

第 2 部

第2部 アンケートデータに関する詳細分析

以下では、アンケート全体にわたった分析を報告していく（第1部との重複がある。）。

I 個別質問項目の結果検証

まず、質問紙調査において取り上げた個々の質問への回答の集計を通して、浪江町の皆さんが体験し、経験しつつある苦痛や被害について確認していくことにする。本文中に掲載したグラフでは、適宜、数値をまとめて集計している。

なお、アンケートの各回答項目に対する純粋な回答者数については、本報告書巻末に「単純集計表（有効回答数 9384）」として掲載しているため、参照されたい。

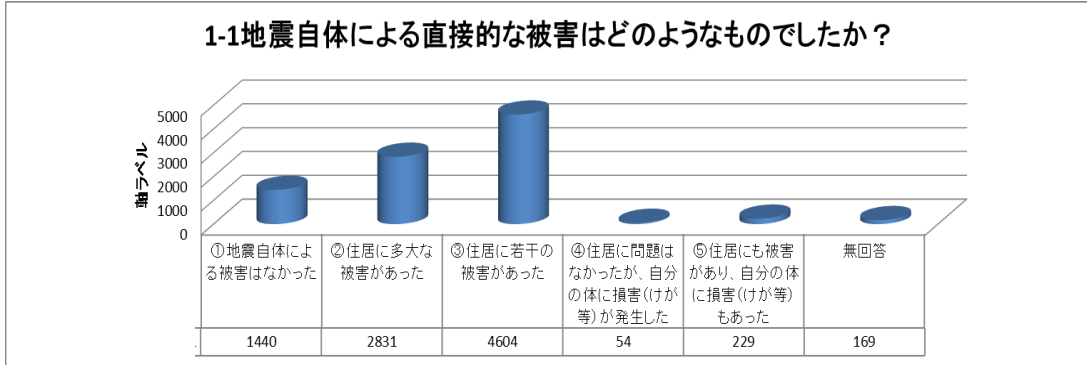
1 地震・津波による直接的被害の実態（質問1-1、1-2）

質問1では、原発に関する被害とは別に、地震や津波による直接的な被害がどのような状況であったかを確認した。

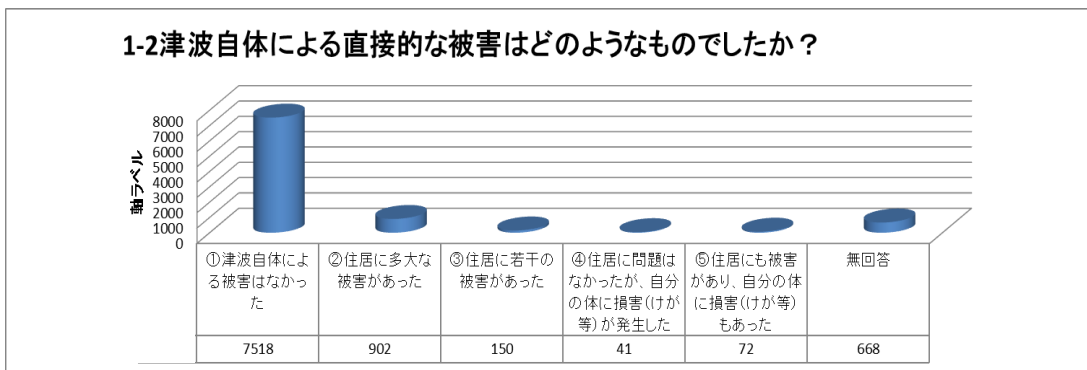
質問1-1では、地震の被害について確認したが、「住居に若干の被害があった」とするものが多く、ついで「住居に多大な被害があった」と続いており、「地震自体による被害はなかった」との回答は1440名となっている。また、人身被害については、283名の回答者が、「被害があった」としている。これに対し、質問1-2の津波による被害については、7518名が「被害はなかった」と回答し、かつ人身被害については、113名が被害を経験している。

以上より、浪江町では、地震による大きな被害は存在するものの、津波による被害は、壊滅的な被害を受けた地域と比べれば、比較的限定されていたことがわかる。このことは、原発の被害さえなければ、浪江町における3月11日の震災による被害は、現在ほど深刻なものになっていなかったことを示しているといえよう（グラフ1-1、1-2参照）。

1-1 地震自体による直接的な被害



1-2 津波自体による直接的な被害



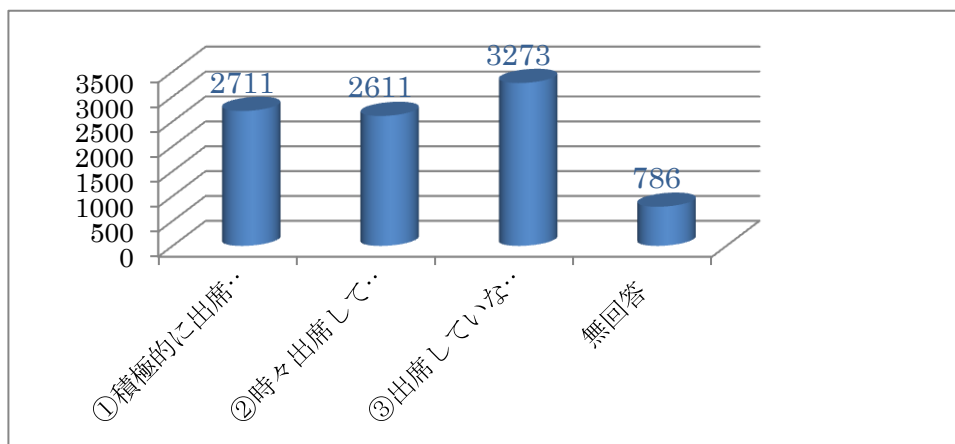
2 災害発生前の生活状況

質問2では、災害後の状況変化(質問4)を確認するために、災害発生前のコミュニティ活動の状況、日常生活や、医療・介護の状況、収入・支出状況などを問うている。

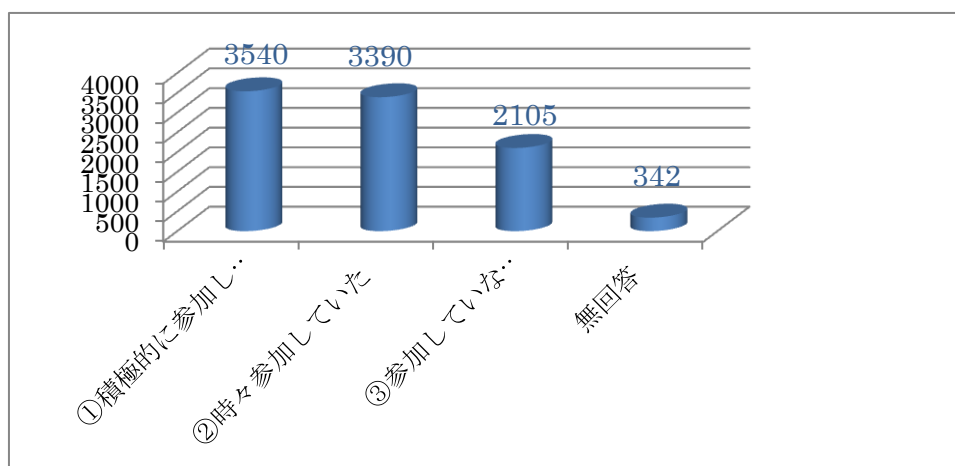
(1) 震災前のコミュニティ関与度(質問2-1~2-4)

質問2-1~2-3では、中学高校の同窓会への出欠状況、自治会活動への参加状況、商工会・農協等の業種団体の会合への出席状況を確認した。これらは、浪江町における住民の方々のコミュニティへの関与度を示す指標であり、コミュニティの凝集性を端的に示している項目である。同窓会、自治会活動については、いずれも積極的に参加と時々参加を加えると過半数を占め、とりわけ自治会活動では、圧倒的多数が参加していたことは、浪江町コミュニティの凝集性の高さを如実に示している。業種団体会合については、参加は3分の1強にとどまっているが、本調査が主婦や学生も対象に含めていること、また、職種による差異などもあることを勘案すれば、この数字は、やはり極めて強いコミュニティ帰属意識を推測させるものであるといえる。(グラフ2-1、2-2、2-3参照)

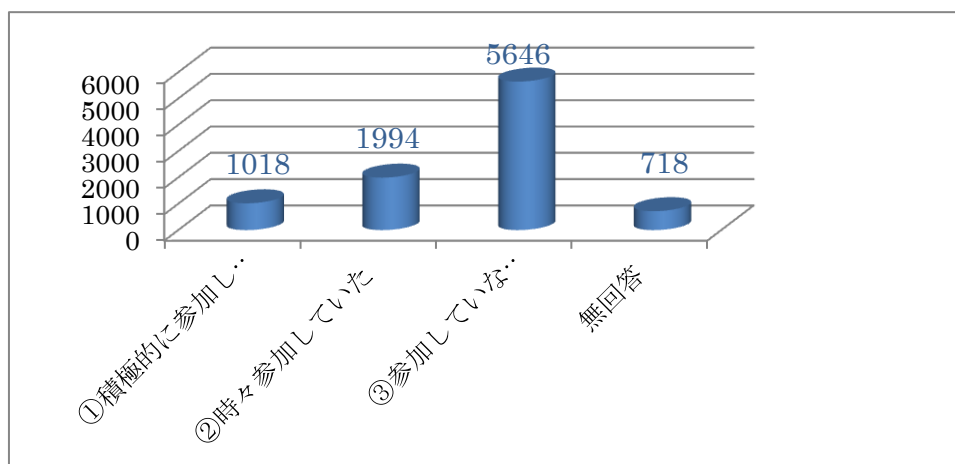
2-1 中学校、高校の同窓会の出席状況(震災前)



2-2 自治会活動(行政区、隣組、消防、地区のお祭り等の活動)の参加状況(震災前)



2-3 商工会・農協などの業種組合の参加状況(震災前)



アンケート自由記載欄には、現在との対比で、以下のような記載がある。これらの記載を読むと、浪江町にいるときは行政区、自治会、スポーツ、教室等々、様々な形での地域のつながりがあり、それが震災後、一瞬にして奪われたことがわかる。

<成人にとってのコミュニティ破壊>

「こんなに引っ越しばかりの生活。今も自宅にたくさんの思い出や物をたくさん置いてきたまま。自宅で将来、親たちと共に暮らしてくはずだった。結婚も考えていたが、すべて白紙になり、今はどこで一生暮らして行くか、家族を支えていくか、放射能の影響で健康被害は大丈夫なのか、不安でいっぱい。新しい仕事も周りの人と状況が違うため、全てストレスに。友達もみんな遠くなってしまい、落ち込む毎日です。自分だけでなく、親や、将来の自分の人生、全て不安。なぜ、被災した私たちが、こんな思いをし、悩まなければならないのか。今までも、これからも悩んでいるのが苦痛。いつのまにか寝不足に。寝ても疲れが取れない。充分寝れていない。毎日、体も心も重くなってしまった。すべてが苦痛に感じます。浪江町が大好きだった。」（30代女性）

「地元にいるときは、子どものころからの友人たちと趣味を楽しんだり、子どもたちと四季折々の行事を楽しんできた。生まれ育った浪江には、行政区でも育成会でも確かな絆があり、いつも周囲の人たちに支えられていたと思う。子どもたちも、登下校時は地域のみなが見守ってくれた。家の外で遊んでいると近所の人たちが、「車に気をつけろよ。」とか「遠くに行くなよ。」とか、気軽に声をかけてくれた、とても暖かいところだと誇りに感じていた。避難先でこんな関係を築き上げるのは不可能に近い。私たちはいつまでも「避難者」で「よそ者」扱いだ。興味本位に話しかける人もいる。子どもは学校で「お金もらえるんでしょ！」と言われたりもした。妻は、地区の役員や学校の役員も「お世話になっているから。」と引き受けているが、出席しても、知り合いもおらず、寂しいという。生まれ育った土地を追われ、絆を断たれ、子どもたちの未来も狭められた。今後、どう進むのか全く見当がつかない。何が不安か・・・すべてだと思う。何が苦痛か・・・未来を想像できないことだと思う。」（40代男性）

「地域のコミュニティがなくなった。部落や地区の集会等もできなくなりました。」（70代以上男性）

「健康づくりのため婦人会のフラダンスや舞踊のふるさと会やコスモス会の踊りの練習を続けていましたが、各地にばらばらに避難したので再会できない友人がおり非常にさびしい。」（70代以上女性）

「事故前の行政区、組での付き合いが出来ないこと。」（60代男性）

「気が付けば仕事もなく、友達も消防団や商工会の仲間とも離ればなれになっていた。」（40代男性）

「子どもの転入先でも PTA 活動に参加しているが、すでに出来上がった輪に入るのは、気疲れする。本心で語れるはずもなく、毎日寂しい思いをする。子どもたちも頑張っているのだからと思い、我慢しているが、浪江時代が懐かしい。」（40代女性）

「強度のストレス・生活環境の変化により、夜熟睡する日がありません。借上の集合アパートに避難、隣も知らない都市型住宅環境には耐え難い現況です。家族バラバラ。地域のコミュニケーション・伝統文化・伝統芸能が消滅されることが危惧される。」（50代男性）

「定年退職後は地域の人々のため自分のできる範囲で尽くし、父母が残してくれた家や庭の手入れなどをして穏やかに日々を送りたいと思っていた。しかし、原発事故のため、一切を無に帰されてしまった。このままでは自分が生まれ育った地域の伝統、民族、慣習、芸能などすべてが消え去ってしまう。私たちの祖先から営々と築いてきた地域の歴史さえも否定されてしまう。」（60代男性）

<高齢者にとってのコミュニティ破壊>

「自分で自分の車を運転して自由にやりたいことをやれた毎日であった。老人会、更生保護女性の会、社明運動、ボランティアで公民館や小学校での活動等々。楽しく生きがいがあった。家に居る時間は友人、知人が訪ねてきてお茶を飲みながら楽しいおしゃべりに花を咲かせたり、パークゴルフ、カラオケ、外食、イベント参加、俳句の教室、手芸教室等々自由に外出していた。現在は、昼間はほとんど一人なので、一日中テレビを観るか、新聞を隅々まで読むだけの生活になってしまった。福島の浪江から会合の連絡が届いているが、福島市や二本松市、郡山市へ一人で出かけられず、娘の都合の良い時のみ連れて行ってもらえ、その時のみ参加できる（今まで2年間でイベント6回、一時帰宅4回のみ）。古い先短いのにこれからどうなるのか不安。物忘れがひどくなった。このままだと、これからどうなるのかとすごく不安になる。気分が落ち込む日も増えて、人と会うのも出かけるのも嫌になってしまう日が増えた。夕方電気もつけず暗い部屋でぼーっとしていて、娘に注意されることが多い。原発事故さえなければ帰れるのにと悲しくなる。」（70代以上女性）

「地域の人々から切り離され、地域へのボランティア(会計係等)もなくなって何のために生きているのか分からない。リウマチはすごい速さで進行し、筋力もなくなり、風呂桶から立ち上がれなくなった。食欲も落ちて174cm・52kgから166cm・41.3kgまで落ち込んだ。年若い母を悲しませないため、1人になった時の妻の経済状況を考えて、生きているだけ。」(60代男性)

<子どもにとってのコミュニティ破壊>

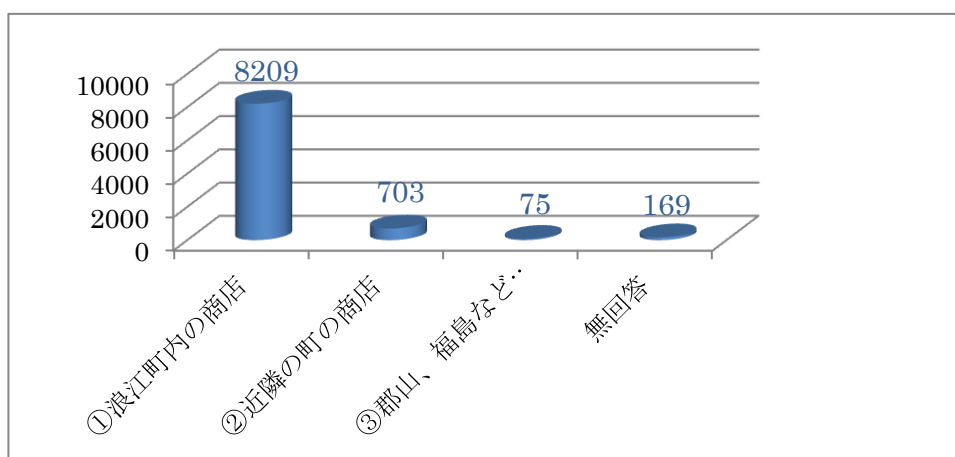
「小学生の子供が二人いる私たち夫婦は今後の子供たちの健康障害及び将来をとっても不安がわき東京電力にとっても失望と怒りがわきました。子供たちは浪江町の小学校から避難していたいわき市の小学校に転校しましたが、いわき市の当初の放射線量と飲食の不安から新潟県の長岡市の小学校に転校させましたが、その避難場所の環境設備が悪く柏崎市の避難所に移動し、そこから毎日30kmある小学校に送り迎えをしていたが大変なので柏崎市の小学校に転校させた。3回の転校があり学校になじめないためか成績が落ち込み登校拒否にもなりました。今でも震災前の学校に戻りたい、友達に会いたいといっています。当初1年も過ぎれば帰れると思っていたのでとてもショックみたいです。震災前通っていた浪江町の荻野小学校は今でも放射線量がたかく帰れる見通しがつかない状況です。子供たちは内部被曝検査や甲状腺検査などをするたびに大丈夫かなと心配しています。なぜこんな小さな子供たちが原発のせいで脅え心配しなければならないのか許せない気持ちでいっぱいです。子供でも放射線・放射能を覚え危惧しています。今後の子供たちの将来の健康と精神面の苦痛が心配でなりません。今後、高校受験があり今避難している新潟県の高校か福島の高校かどこを受験すればいいのかわからない不安、今後の家族が移住する場所さえ不透明でどうしたらいいのかわからない。」(40代男性)

「息子が卒業式に入院した為、みんなに会えないままバラバラになってしまい、高校に入ってから友達との約束や夢すべてが失われ、一時、高校中退も考えた。今現在も、この先を悩んでいる。二男は、小学校一年からやっていた野球をやめてしまった。部室に全ておいてきたし、母子家庭の私に迷惑をかけたくなかったらしい。友達も転校先に浪江の人がいないし、やる気を失ってしまい、腹痛で休む事も多々あった。娘は小2だった為、現実を知るまで、早く帰りたがり、友達や家、浪江を心配し、やはり腹痛で学校を休む事があり、放射線の心配をし、水も(お風呂)怖がった。私もめまいが止まらなくなり、通院し、毎日の薬が手

放せなくなってしまった。職も失い、母子家庭の為、他の家庭より不安は強く不眠である。」（30代女性）

なお質問2-4では、日常の買い物場所について確認したが、回答者の9割程度が浪江町内の商店と回答しており、これも浪江町コミュニティの凝集性を推測させる指標である。（グラフ2-4参照）

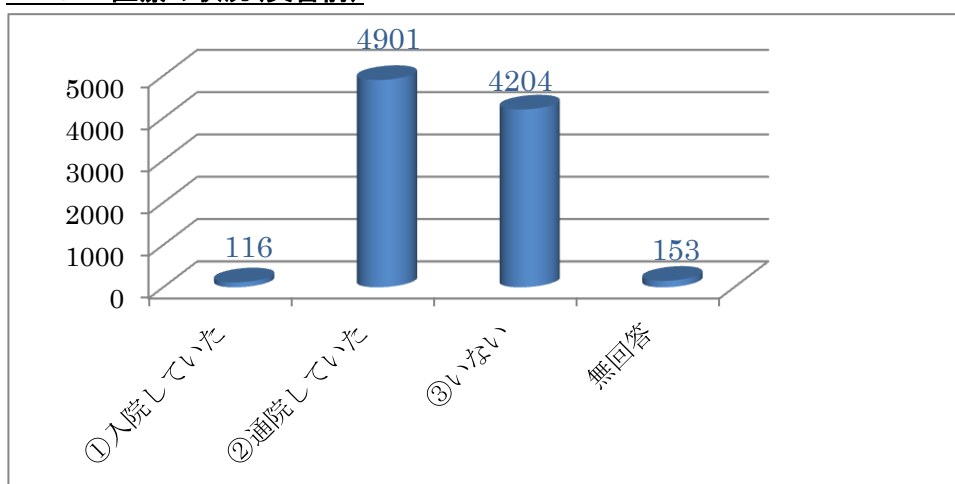
2-4 日常の買い物場所(災害前)



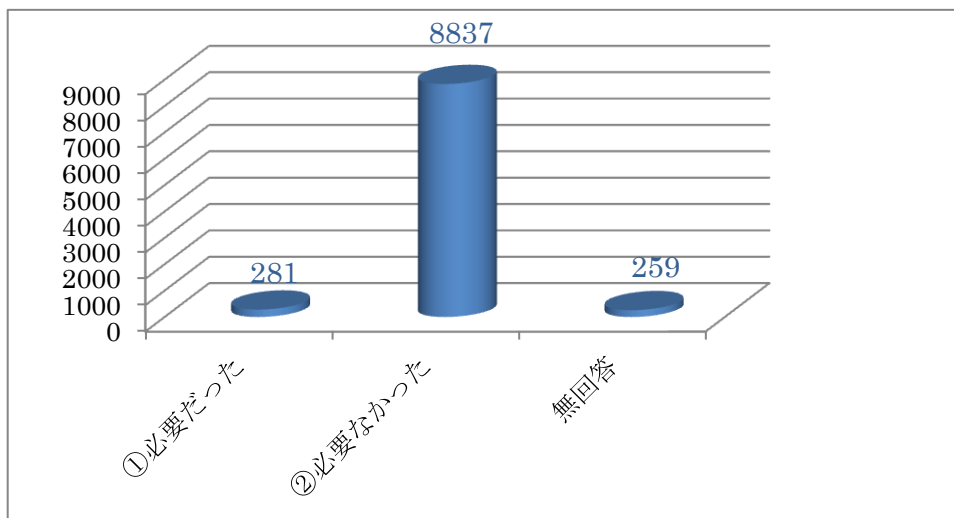
(2) 震災前の医療・介護の状況（質問2-5、2-6）

質問2-5、2-6は医療・介護の状況を問うている。比較的高齢者の比率が高いこともあり、通院中と回答した者が50%程度に達している。しかし、介護については、必要だった者は、わずか281名にとどまっている。（グラフ2-5、2-6参照）

2-5 医療の状況(災害前)



2-6 介護の状況（災害前）



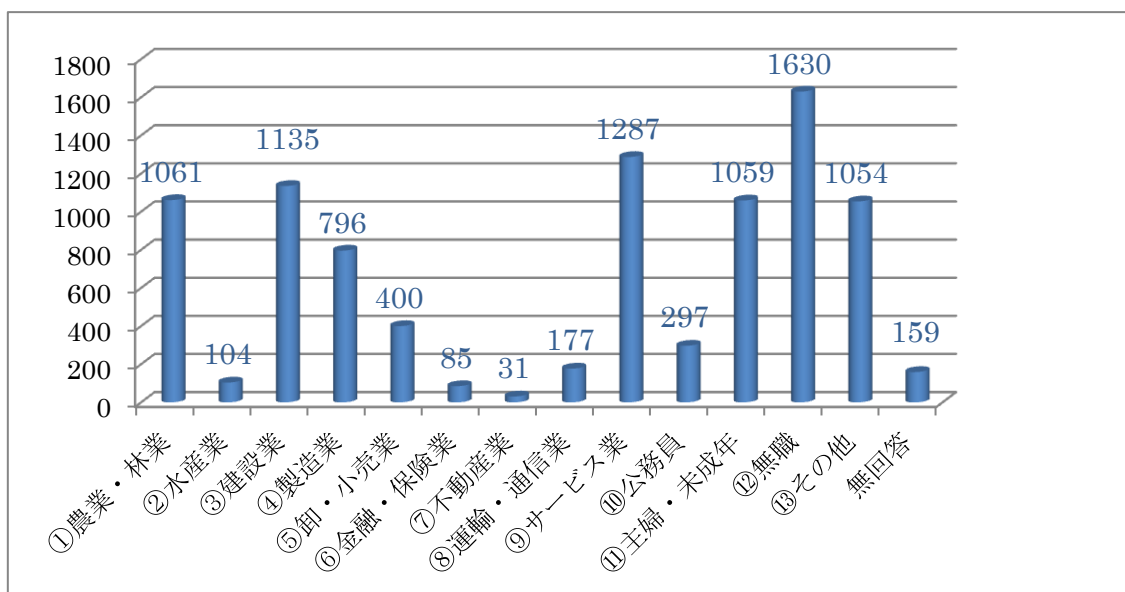
(3) 震災前の就業職種と個人収支（質問2-7～2-9）

質問2-7では、就業職種について確認している。（グラフ2-7参照）

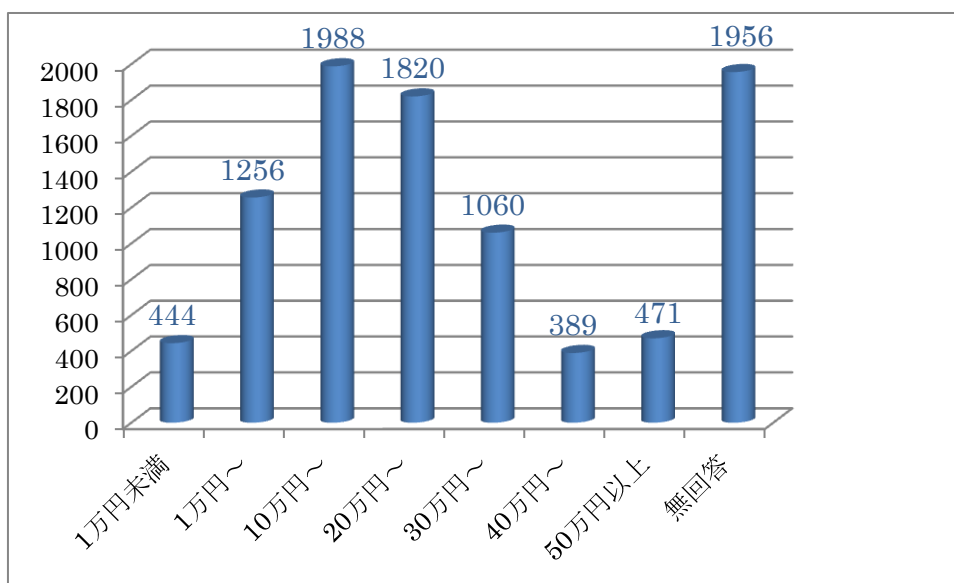
質問2-8、2-9は、個人の収入と支出について質問している。収入については、10万円台が最も多く、無回答を除けばほとんどが40万円未満に該当する。また支出についても、同様の傾向であるが、30万円未満のレベルに大多数が収まっており、収入よりやや低く抑えられていたことがわかる。（グラフ2-8、2-9参照）

この点について、災害後の変化については後に質問4のところで検証する。

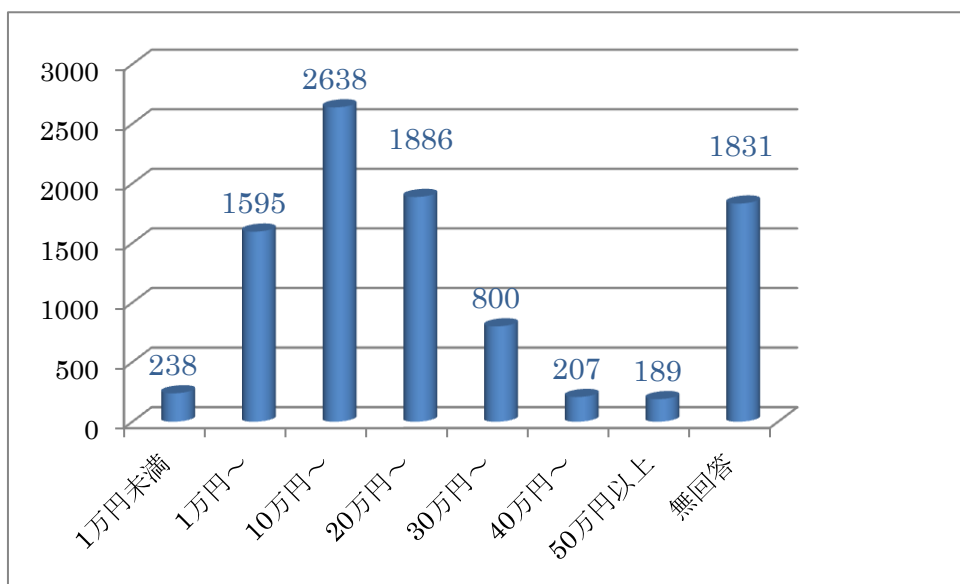
2-7 震災前に従事していた業種



2-8 震災前の毎月の収入



2-9 震災前の毎月の支出



3 避難前の世帯状況

質問3では、後に確認する避難後である現在の世帯状況との比較のために、避難前の世帯の状況について確認した。

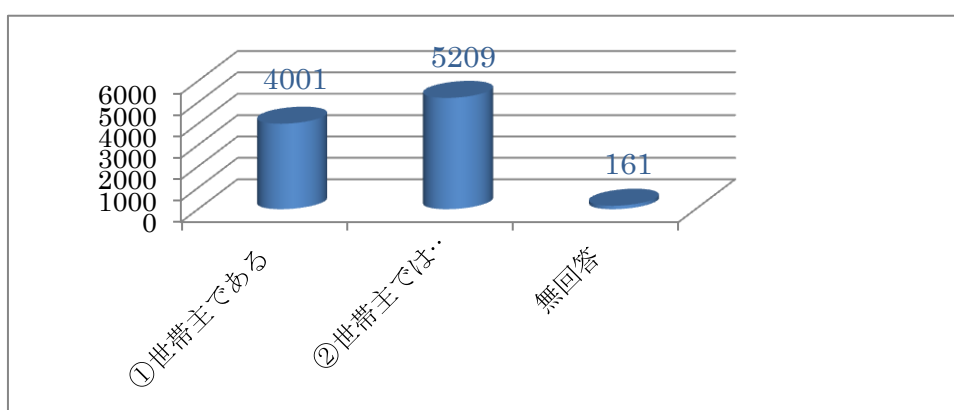
(1) 避難前の世帯状況（質問3-1～3-4）

質問3-1では、世帯主か否かを聞くことで、回答者中に世帯主、すなわち世帯が

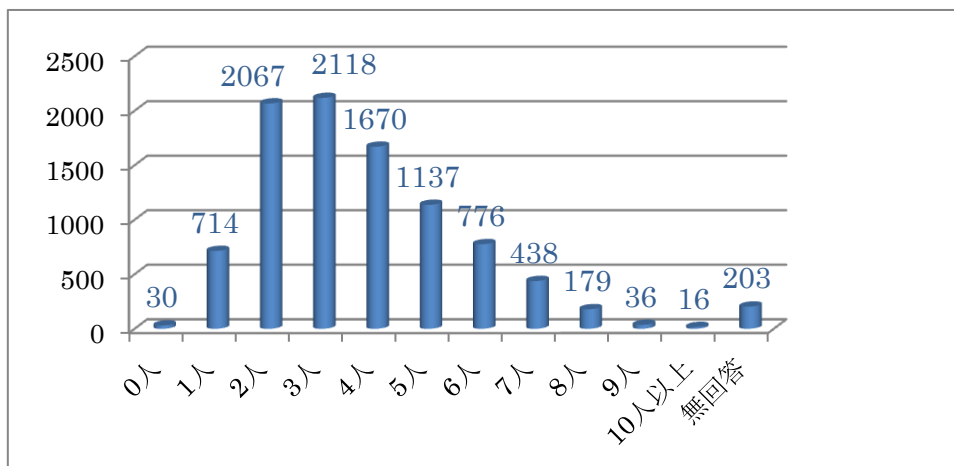
どれくらい存在するかを確認した。9371名の回答者中、世帯主は4001名であった。また質問3-2では、同居人数について確認した。個人単位の回答であるが、独居者は714名、二世帯で生活していた回答者は2067名、また三世帯で生活していた回答者が最も多い2118名であるが、四人世帯、五人世帯で生活していた回答者もそれぞれ1000名を超えている。

質問3-3では、未成年の子供の数を確認した。また、質問3-4では、避難後の生活との比較のため、住居の部屋数についても確認した。

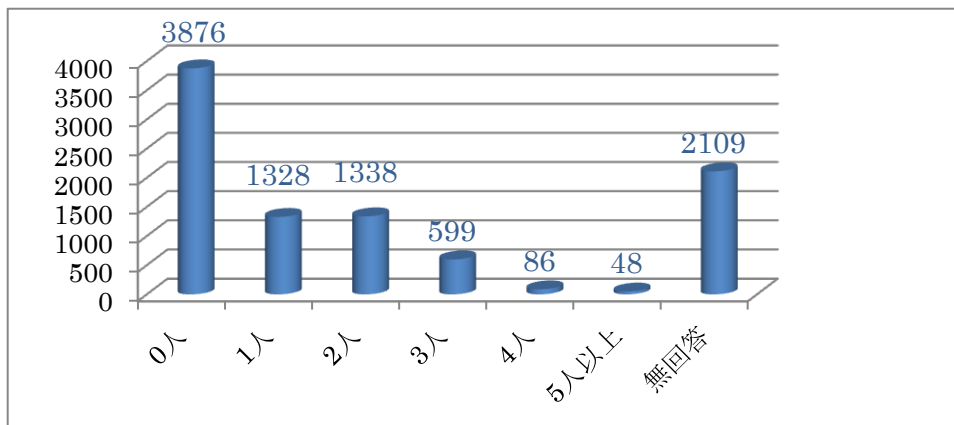
3-1 世帯主か否か(避難前)



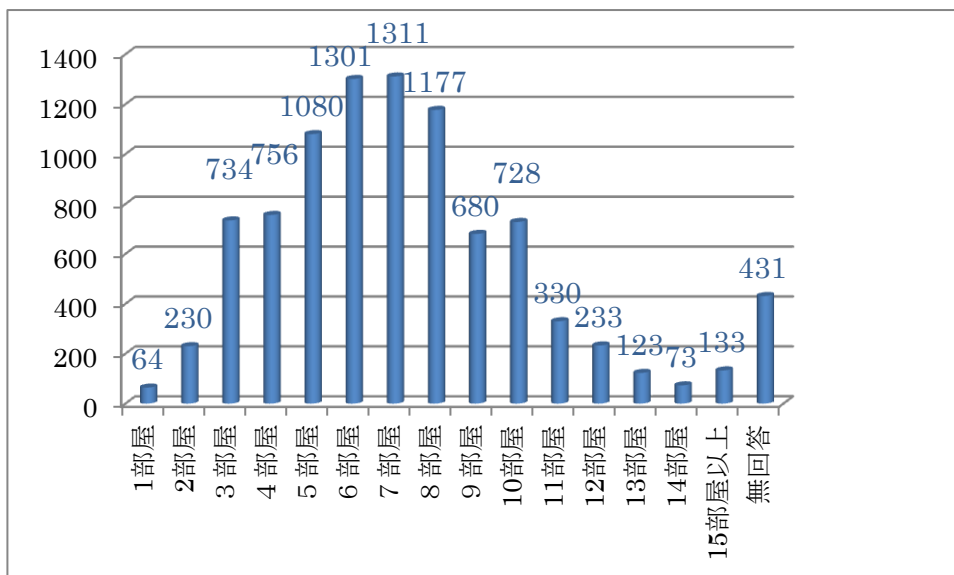
3-2 世帯の同居者の人数(回答者も含む)(避難前)



3-3 世帯の未成年の子供の数(避難前)



3-4 住居の部屋数(避難前)

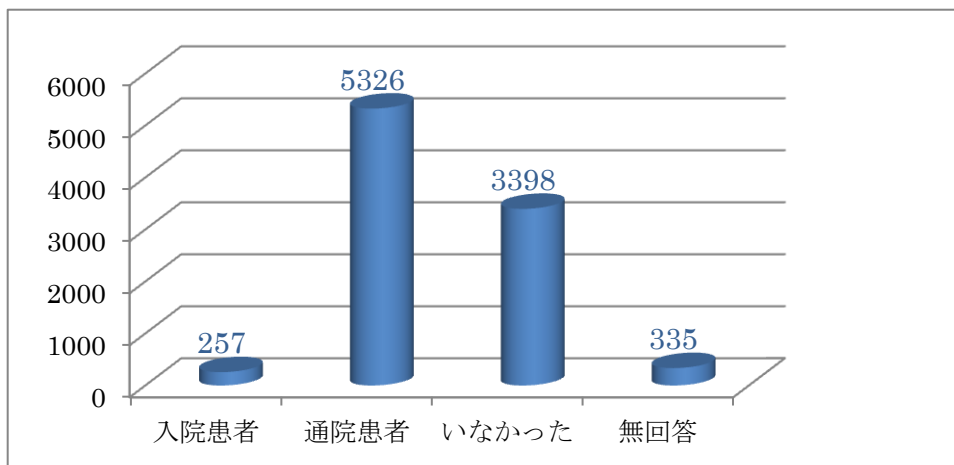


この点については、後で家族の生活環境の変化として、その変化の実情に触れる（第2部Ⅱ4「家族生活環境」）。

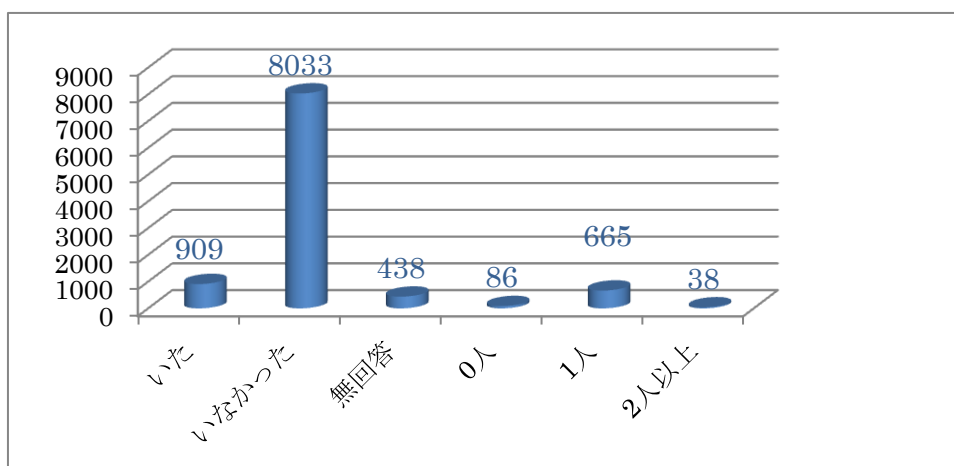
(2) 避難前の入通院、介護状況（質問3-5、3-6）

質問3-5、3-6では、それぞれ、世帯内で病院での治療を受けていた者、介護が必要だった者の数を確認した。家族に定期的に通院する患者がいた回答者数は5326名に至っている。また、家族に介護が必要だった者がいた回答者は909名とほぼ1割に達している。

3-5 世帯内で病院での治療を受けていた者の存否（避難前）



3-6 世帯内で介護が必要だった者の数（避難前）

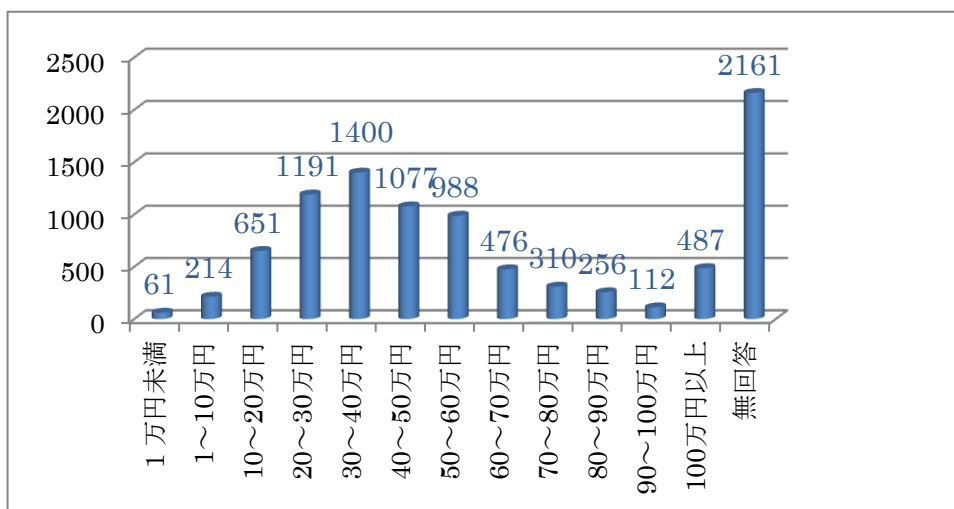


(3) 震災前の世帯収支（質問3-7、3-8）

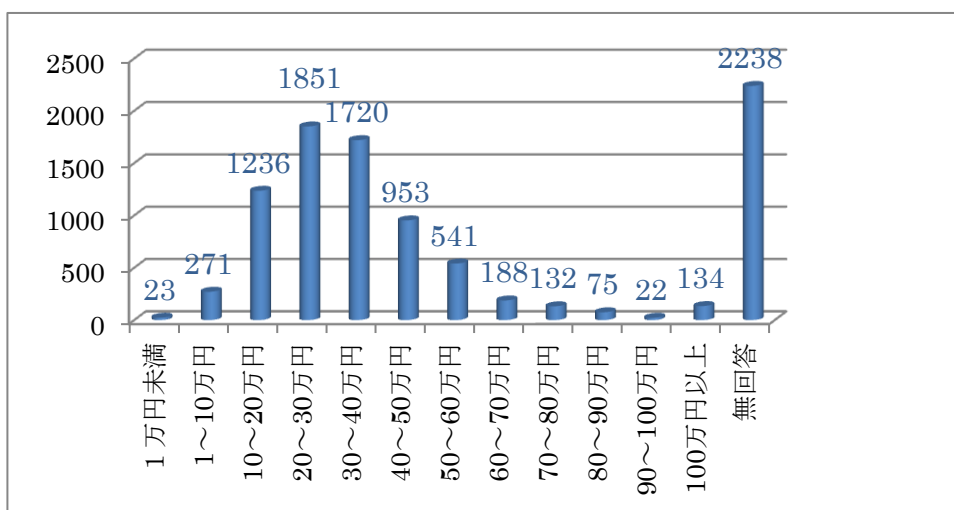
質問3-7は、震災前の世帯収入について、質問3-8は同じく支出について確認した。収入には、東電からの精神的慰謝料は含めず、就労不能損害の賠償金は含む形で質問した。あくまで個人単位の回答（1世帯についての回答が重複）であるが、震災後について、同様の質問をして比較することで、大まかな収入・支出の動きを推定することができる。なお、個人の収入支出については別途、質問している。

世帯収入の回答を見ると、30～40万の回答が多く、20～60万の回答の累積でほぼ半数を占めている。支出については、20～30万が最も多く、10～40万でほぼ半数を占めている。収入より支出が明確に低く、家計が適正に維持されていたことがうかがわれる（このことは、後に震災前後比較検討部分であげる自由記載欄記述（第2部Ⅱ5「個人収入・個人支出の変化」）からもうかがわれる。）。

3-7 震災前世帯収入



3-8 震災前世帯支出



4 避難後の個人の生活状況

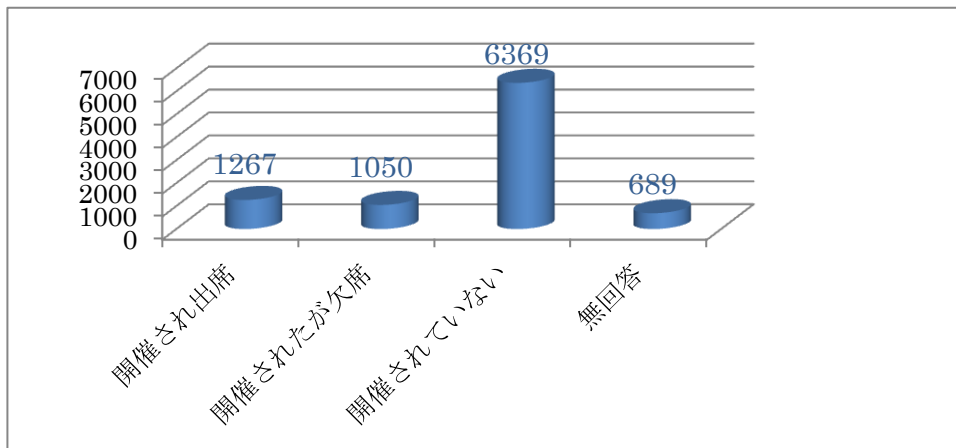
質問4の各設問は、避難後の現在の生活状況につき質問2に対応させつつ聞いた。

(1) 避難後のコミュニティ関与度（質問4-1～4-3）

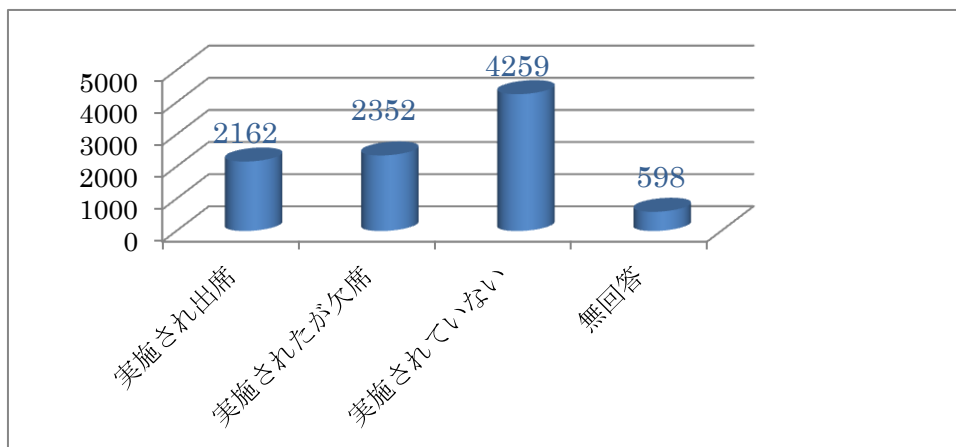
避難後の質問4-1では、中学校・高校の同窓会の開催、4-2では自治会活動の現況、4-3では業種組合の現況を確認している。質問2-1～2-3の回答と比較すると、それぞれ明確に実施回数が激減しており、コミュニティの凝集性が失われ、破壊されていることがうかがわれる。このことは、先に震災前のコミュニティの状況について触れた自由記載欄の引用からもわかるし、また後で「コミュニティ喪失についての心情等」として引用する自由記載欄記述からもうかがえるところである（第2

部 I 6 (2) 「地域社会 (コミュニティ) 破壊による精神的損害」参照。

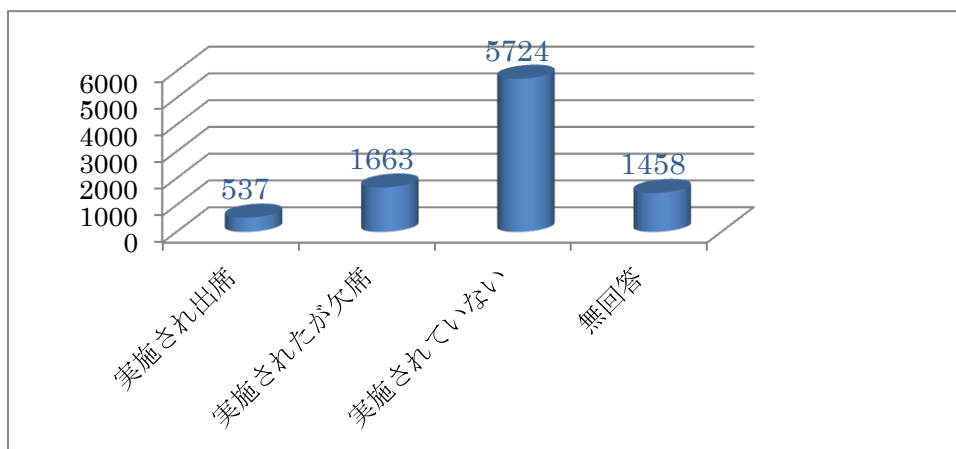
4-1 震災後における同窓会の開催、出欠



4-2 震災後における自治会活動の実施、出欠



4-3 震災後における業種組合の活動

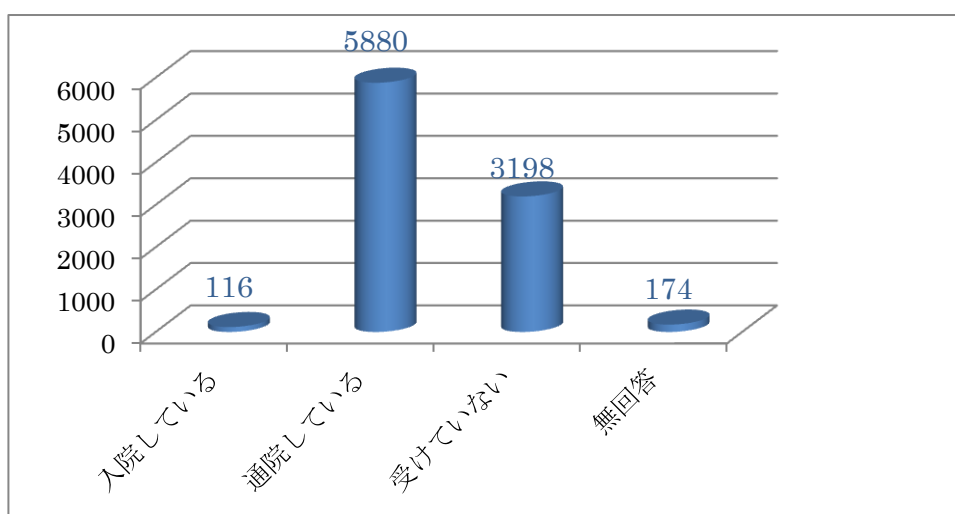


(2) 避難後の入通院、介護状況（質問4-4、4-5）

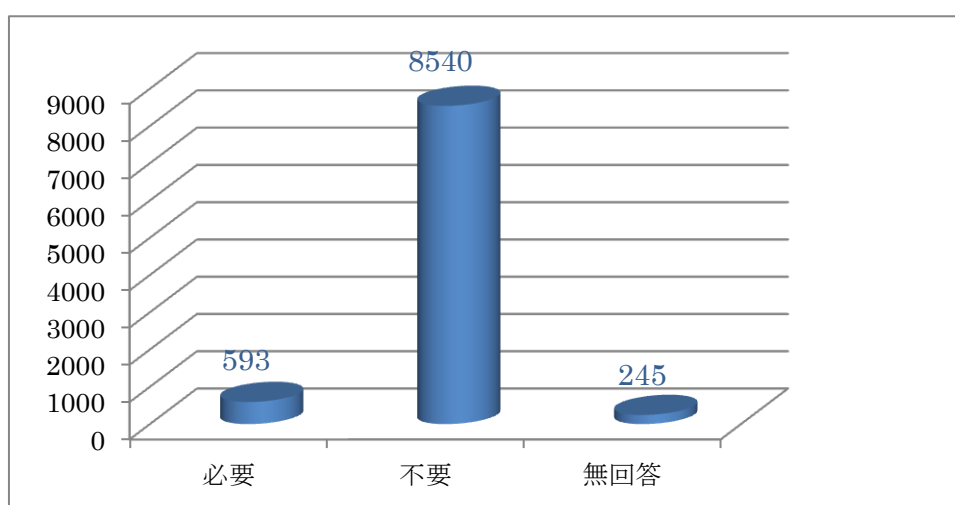
質問4-4、4-5は、それぞれ、現在病院での治療を受けているか、介護が必要かについて確認している。同様の質問をおこなった2-5、2-6の回答と比較すると、入院加療者に変化はないが通院加療中の者の数が、ほぼ100名増加しており、要介護の者の数もほぼ2.5倍増加している。

こうした急増の背景には、震災、避難生活の物理的・心理的苦痛が大きく影響していることは疑いないと言えるだろう。そして、自由記載欄記載の声もそれを裏付ける（第2部Ⅱ3参照）。

4-4 現在、病院で定期的に治療を受けているか



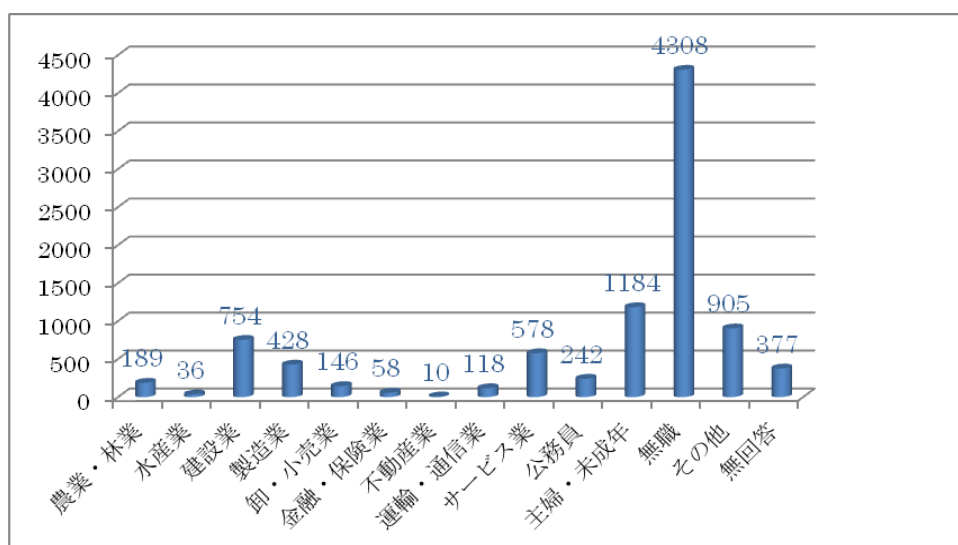
4-5 現在、介護が必要か



(3) 避難後の就業業種 (質問4-6)

質問4-6は、避難後の就業業種について質問した。就業業種に大きな変化が見られ、とりわけ「無職」がほぼ4倍に増加し、回答者の半数に及んでいることが注目される。主婦・未成年は無職回答に含まれないため、これも加えれば、浪江町民の6割が収入のない状態であることがわかる。

4-6 避難後の就業業種



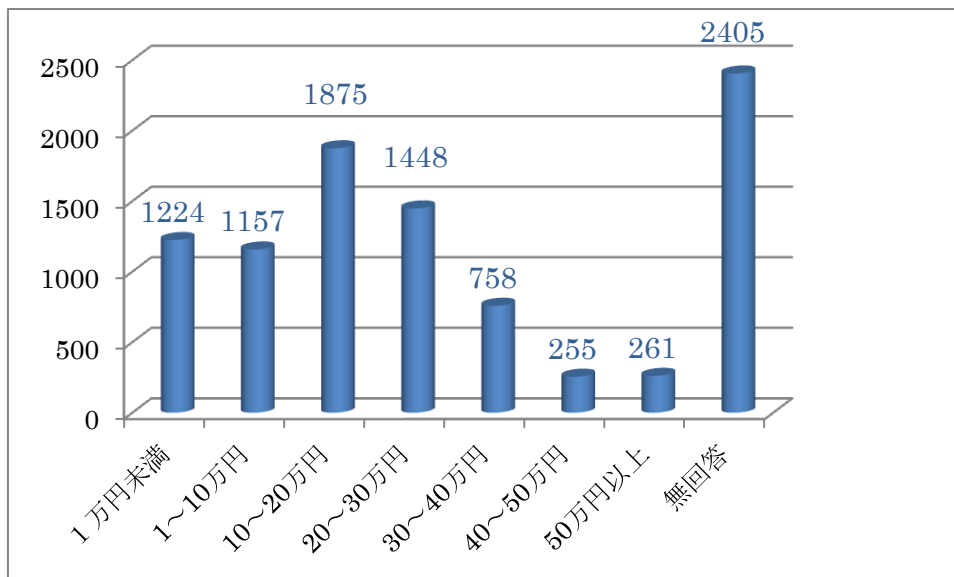
(4) 震災後の個人収支 (質問4-7、4-8)

質問4-7、4-8はそれぞれ、震災後の現在の個人収入、支出について質問している。

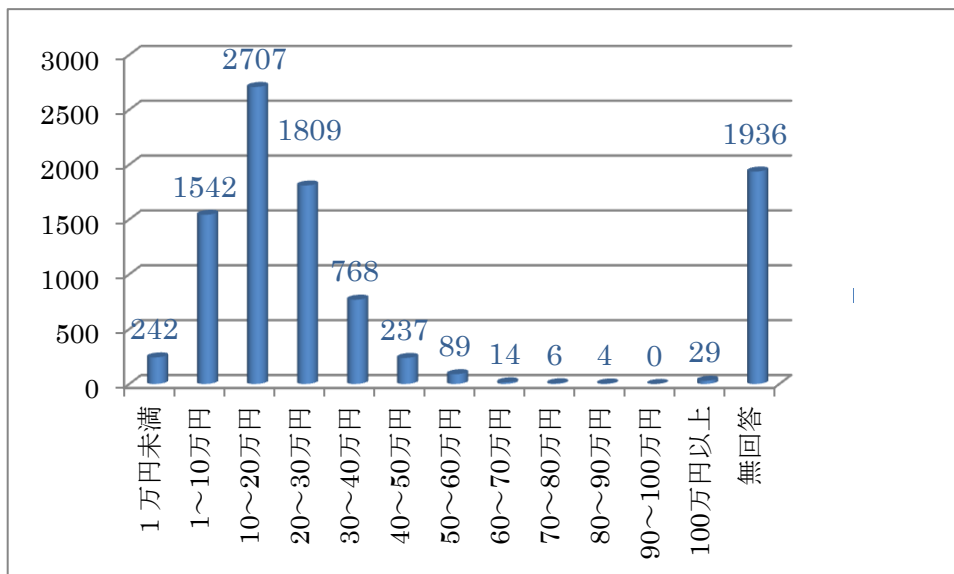
現在の収入は10～20万が最も多く、0～30万で全体の3分の2を占めるなど、震災前の収入を問うた質問2-8と比べると大きく減少していることが確認できる。

支出については、震災前同様10～20万がもっとも多く、低減させることに限界がある支出に対し、収入が激減することで、多くの個人にとって、厳しい家計状況が存在することがうかがわれる。

4-7 震災後の個人収入



4-8 震災後の個人支出



5 避難後の世帯状況

質問5は、質問3の各設問と対応する形で避難後の世帯状況を問うている。

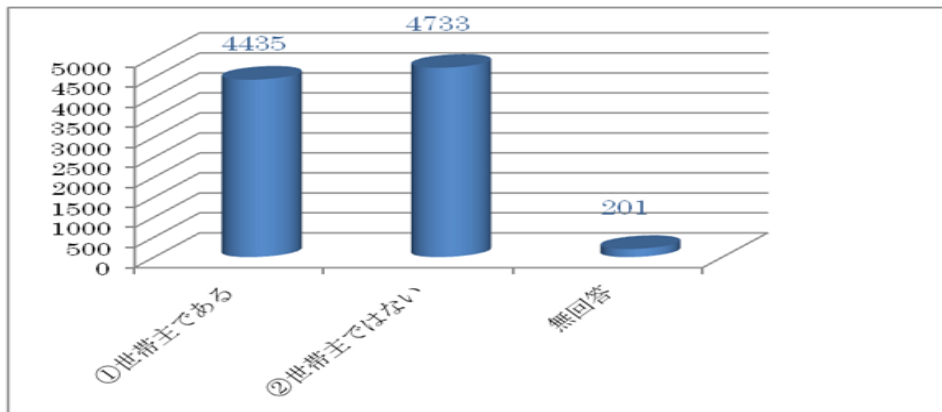
(1) 避難後の世帯状況（質問5-1～5-4）

質問5-1～4は、世帯主であるか否か、現在の世帯人数、未成年の子供の数、部屋数を順次問うている。

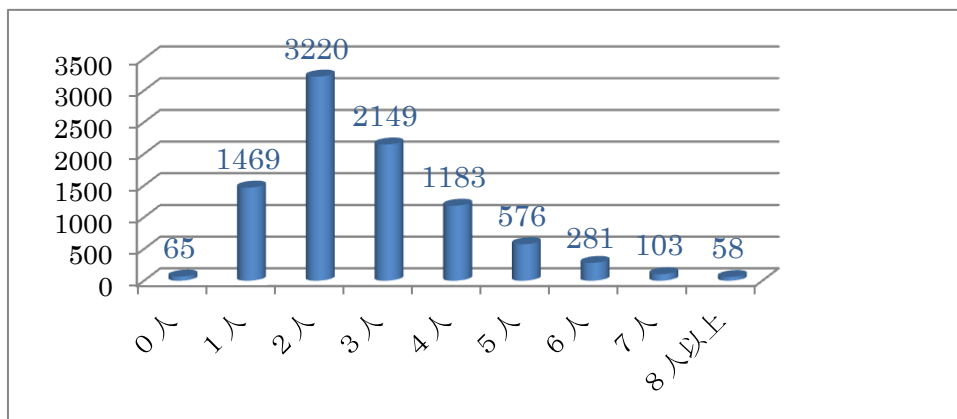
世帯主については、4001名から4435名と幾分増加が見られる。そのほかでは、世帯同居人数の変化が著しい。避難後は2人世帯に属する回答者数が突出して多くなる

など、世帯の構成人数の減少傾向が見られ、家族がばらばらに生活することを余儀なくされている現状がうかがえる。また住居の部屋数も激減しており、仮設住宅はじめ、現在の居住環境の厳しさが読み取れる。

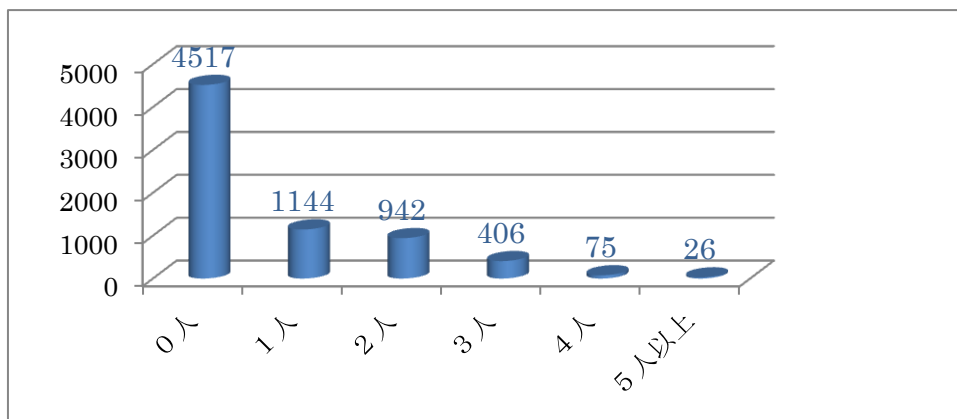
5-1 世帯主か否か(避難後)



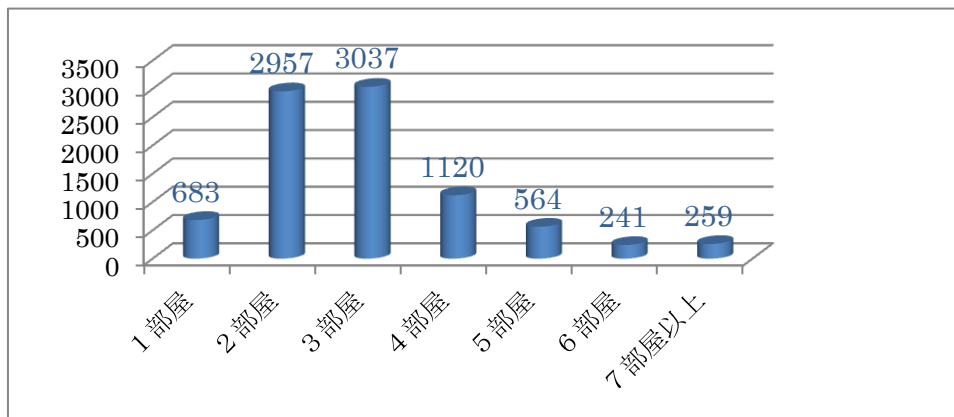
5-2 避難後の世帯人数



5-3 避難後の未成年者同居者数



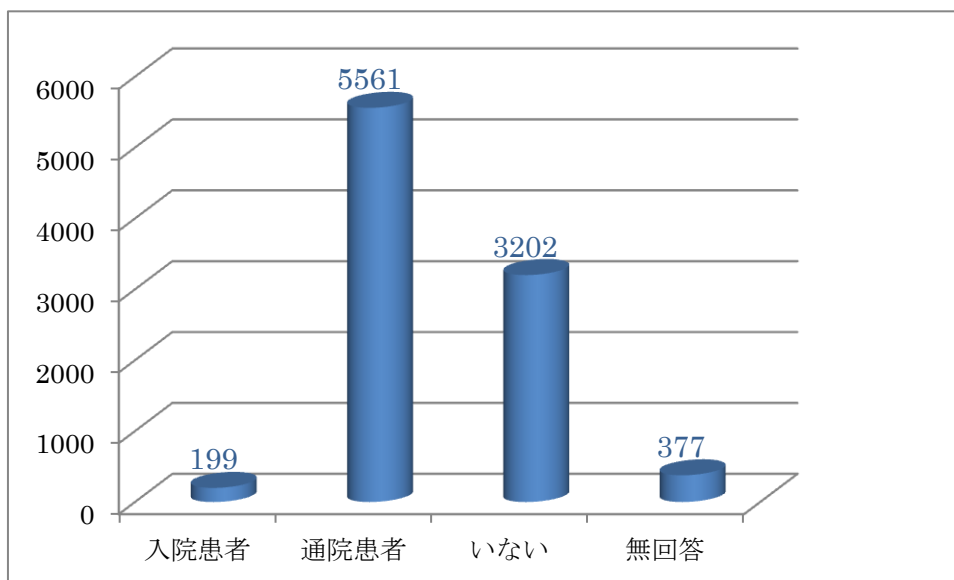
5-4 避難後の部屋数



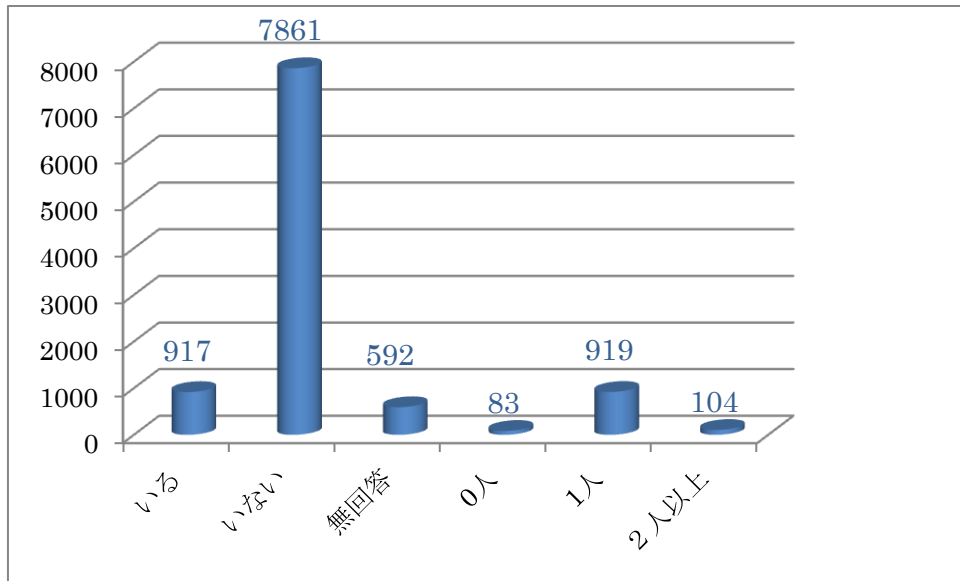
(2) 避難後の入院、介護状況（質問5-5、5-6）

質問5-5、5-6は、病院での治療を受けている家族の数、介護の必要性の状況について確認している。病院での治療については質問3-5への回答と比較すると入院加療中の者は減少、通院者は微増している。入院者の減少は、地元の慢性期病院の閉鎖等に伴い、在宅に変化している可能性が高い。介護については、3-6への回答と比較すると、大きな変化はないが、要介護者がいるとの回答が微増している。

5-5 現在病院で定期的に治療を受けている家族の存否



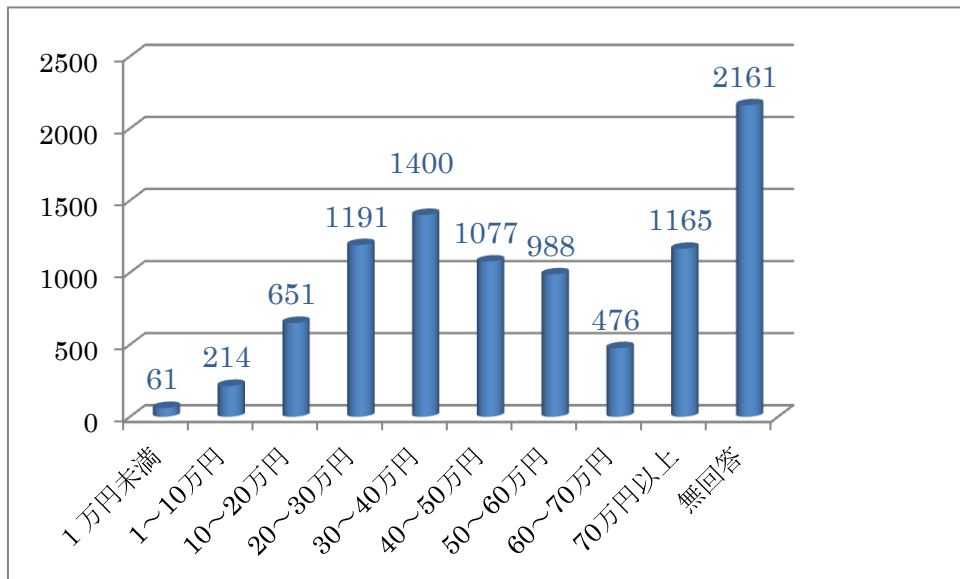
5-6 現在介護が必要な家族の存否



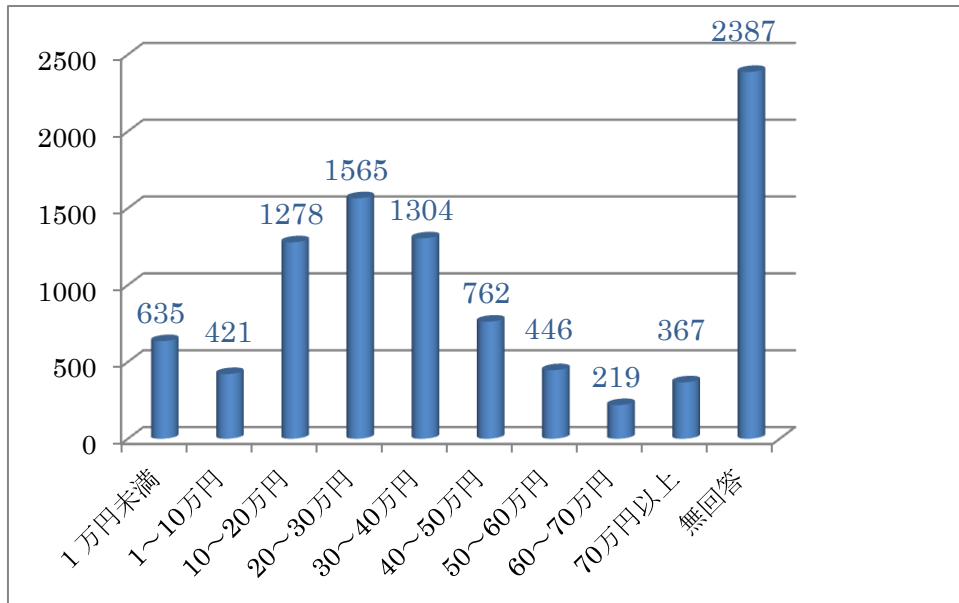
(3) 避難後の世帯収支 (質問5-7、5-8)

質問5-7、5-8は、質問3-7、3-8に対応する形で避難後の世帯収入、支出について問うている。ここでは比較のため、3-7、3-8のグラフを再掲する。グラフから視覚的にも明らかなように、世帯収入についての回答は低い層に大きく変容している。また、支出についても減少しているものの、最も多いのが20～30万の層であることに変わりはない。支出については、収入の減少の中で家計維持のために儉約が行われているものの、それでも限界があることが推測される。

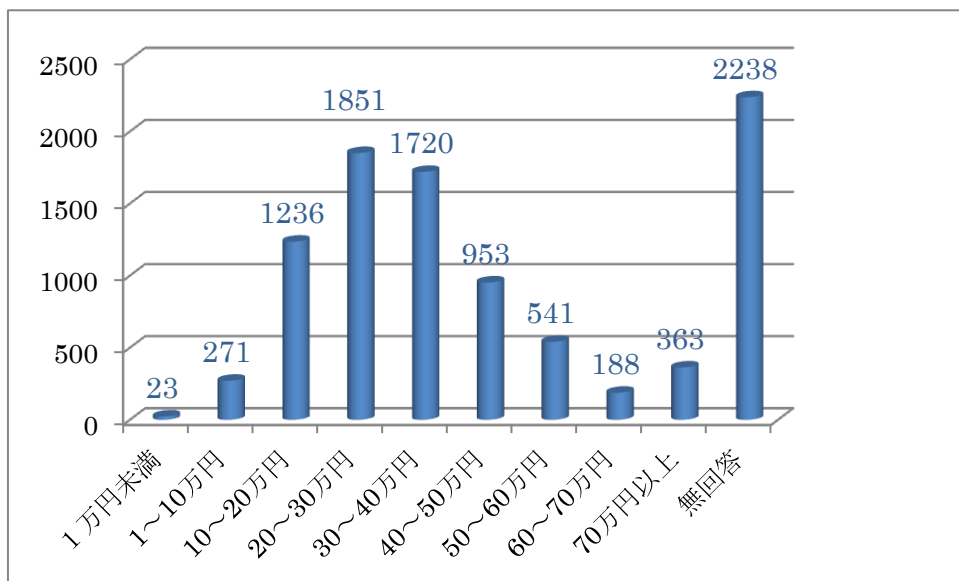
3-7 震災前の世帯収入



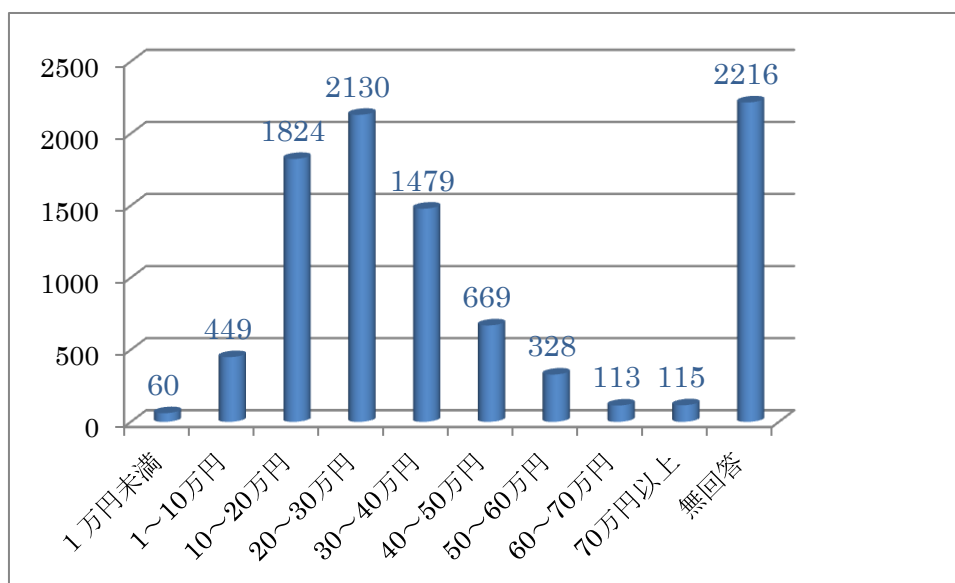
5-7 震災後の世帯収入



3-8 震災前の世帯支出



5-8 震災後の世帯支出



この点については、震災前後の比較として、後述する（第2部Ⅱ5「個人収入・個人支出の変化」）。

6 現在の苦痛について

質問6の各設問は、現在どのような点にどの程度の精神的苦痛を感じているかを確認するための質問である。質問6は下記の6つのパートに分割し、それぞれより詳細に苦痛度を1～5の5段階で検証している。

- 6-1 被曝による精神的損害
- 6-2 地域社会(コミュニティ)破壊による精神的損害
- 6-3 平穏な日々の喪失による精神的損害
- 6-4 自宅に帰れないことによる精神的損害
- 6-5 避難生活の不便さによる精神的損害
- 6-6 先の見通しが見つからない不安による精神的損害

(1) 被曝による精神的損害（質問6-1）

ア まず、6-1被曝による精神的損害では、「自分の現在や将来の健康に不安」「自分の結婚、出産に不安」、「子（孫）の結婚、出産に不安」「被曝したことによる差別・偏見の苦痛、不安」、「放射能が見えない、聞こえない、臭わない、味がしない、触っても分からない恐怖」、「現在も遠方へ避難出来ない苦痛、不安」、「低線量被曝による影響がはっきりわからない不安」の7項目について質問している。自身の結婚・出産のように比較的若い層を対象にした質問、子（孫）の結婚・出産のように比

較的高い年齢層を想定しての質問もあり、これらについては回答者の一部にしか該当せず、参考として考える必要がある。回答の分布は下記のグラフに示されている。全体に不安が強いことがわかるが、中でも放射能が見えない恐怖、低線量被曝の影響など、放射能の身体への直接的影響への恐怖、不安が強いことがわかる。

イ 被曝について、アンケート自由記載欄には、以下の記載がある。

<被曝による健康被害に対する恐怖>

「原発事故が起き、自宅を放棄して津島地区に行き、何にも知らずに被曝して、打ちのめされた気分です。」（60代男性）

「強い放射線下、校庭での牛乳配布に長期間並んだ。飲んだ。」（70代男性）

「後に津島が線量が高いことを知り、将来への不安が大きくなりました。検査では正常でしたが不安です。」（30代女性）

「浪江町民だけが、原発事故を知らずに一番放射能の高い地域へ避難させられたことに怒りを感じている。」（40代女性）

「今考えてみれば、指示に従って、一番最初に避難したところが津島であり、その後長期間滞在したのが、福島で、身体のどこかにいずれ異常がでるのではないかという不安がある。学者の話も多岐にわたり、信頼できない気分になっている。」（60代男性）

「一時帰宅したとき、避難したときよりも余震で家の中がさらにひどく荒れていた。友達や家族との思い出の品を持ってきたかったが、放射能を浴びたものを持ってくることに抵抗があり、どうしても持ち出す気になれなかった。おかげで、思い出を失ったことへの悲しみや、荒れ果てた部屋を見て、もう住むことが出来ないのでは、という思いがよぎり、本当につらかった。家族と離れて避難することや環境の変化に対応できず、なじめず、何度も体調をくずした。」（30代女性）

「放射能をあびたから何年後か後にはガンで死ぬんじゃないか。放射能が怖くて大事なものも取りに行けなかった。」（30代女性）

「2011年3月12日津島に移動し、校庭にいっぱいあった車が毎日なくなっていくのを見ながら最後まで居続けて二本松まで行き、放射能の一番ひどい時に居続けた。二十代の娘にこれから未来に対する恐怖の念がとてもあります。何事もなく一生を終えることができることを念じます。」（50代女性）

「体内に入ってしまったセシウムがまだ人体の中にあること不安が未だにつきまとう。誰にもわかってもらえない。」（40代女性）

「避難先の線量が、かなり高かった事がとてもショックでした。今の時点で保険会社10社のうち2社しか子供のがん保険への加入を認めないことがショック。」（40代女性）

「原発事故による将来の病気が不安である。病気になった場合、保障してくれるのか不安である。」（40代女性）

「後に津島が放射線量が高かったのを知り、健康が心配。」（30代男性）

<出産・子ども（孫）の心身の影響への不安>

「子どもが将来健康を害するのではないか、差別されないか、とても不安。」（40代女性）

「自身の被曝量。いつ発症するのか、子どもは産めるのか。」（30代女性）

「事故前までは明るく元気であった子供が、病気になり薬を飲み続けている。一時は死の恐怖に、家族全体が精神的に追い詰められた。」（50代女性）

「友人に会えない。好きだった場所にも簡単に行けない。妊娠中、5歳の子供がいる。仮設住宅の中は線量が高くて非常に困る。仮設に入ったばかり頃は1マイクロシーベルトになる所があり、除染後は0.3位までに下がったがそれでも高いと思う。仮設の周りでは安心して遊ぶ所もなく、5歳の子供は太り気味になってしまい、困っています。」（30代女性）

「避難先でも、『そのうち帰れるんでしょ?』『まだニート同然の生活をしてるの?』と言われて居心地が悪く人と話すのが嫌になってきた。対人恐怖にもなり、仕事や生活の不安が募るといふ悪循環を繰り返している。精神的、肉体的、経済的苦痛は、筆舌に尽くし難い。このようなことから、自分は結婚を諦めている。もし良縁があったとしても被曝のことを考慮すると、どれくらいDNAに損傷を受けて、子孫にどのような悪影響を与えてくるか解らないので子供をもうけることも考えてしまう。いずれの選択をするにも断腸の思いで決断しなければならず、ご先祖たちにも大変に申し訳ない。」（30代男性）

「被曝しておったとするなら、孫達（埼玉県）に逢うのも本当に大丈夫なのかと不安に思っている。」（70代以上男性）

「子どもの甲状腺にのう胞があると診断されたのに、国や東電は情報もないのに大丈夫だということへの苦痛。」（30代女性）

「お腹にいた子供への放射能の不安。」（20代女性）

「娘の将来、結婚、子の出産、遺伝。事故から今までを振り返ると何故私達が苦勞をしなければならなかったのか？普通の生活が出来なくなったのか今も理解出来ず、子供にも説明が出来ない。」（30代男性）

「小学生の子供が二人いる私たち夫婦は今後の子供たちの健康障害及び将来をとて不安がわき東京電力にとて失望と怒りがわきました。子供たちは浪江町の小学校から避難していたいわき市の小学校に転校しましたが、いわき市の当初の放射線量と飲食の不安から新潟県の長岡市の小学校に転校させましたが、その避難場所の環境設備が悪く柏崎市の避難所に移動し、そこから毎日30kmある小学校に送り迎えをしていましたが大変なので柏崎市の小学校に転校させた。3回の転校があり学校になじめないためか成績が落ち込み登校拒否にもなりました。今でも震災前の学校に戻りたい、友達に会いたいといっています。当初1年も過ぎれば帰れると思っていたのでとてもショックみたいです。震災前通っていた浪江町の荻野小学校は今でも放射線量がたかく帰れる見通しがつかない状況です。子供たちは内部被曝検査や甲状腺検査などをするたびに大丈夫かなと心配しています。なぜこんな小さな子供たちが原発のせいで脅え心配しなければならないのか許せない気持ちでいっぱいです。子供でも放射線・放射能を覚え危惧しています。今後の子供たちの将来の健康と精神面の苦痛が心配でなりません。今後、高校受験があり今避難している新潟県の高校か福島の高校かどこを受験すればいいのかわからない不安、今後の家族が移住する場所さえ不透明でどうしたらいいのかわからない。」「子供たちの健康障害の不安、学力不安、将来の不安のため、不眠・ストレスが時間がたてばたつほど増えています。」（40代男性）

「放射線を浴びたことによって子供の頭痛や吐き気やただの風邪さえも心配になる。」（30代女性）

「借り上げもアパートの2階に住んでいたころは下の階の子供のいない年配のご夫婦に気を遣って、子供に対してずっと注意して怒ってばかりだった。浪江の新築の家では廊下で車を走らせたり鬼ごっこをして遊んだり、のびのびと育児をすることができたのにただただ悔しいです。」

（30代女性）

「事故のことも知らされず、帰宅することができなくなるということは、全く想像もなく、1歳3カ月の孫を連れ、避難をし、まだ離乳食だったため、食べるものもなく、寒かったこと。線量が高いとは知らず、津島の高校に避難し、孫をおんぶし外に長時間いたため、孫が被曝し将来何らかの影響があるのではないかと心配である。東和町に避難した時は寒

さのため、低体温で死ぬのはこういうことかなと思った。」（60代女性）

「放射線が人体に及ぼす影響や、女性として結婚して子供を産めるのが大変不安。」（30代女性）

「未成年の子供を本当に帰して、心身ともに大丈夫だと言えるのか。」（30代男性）

「県内の避難先にいたところに子どもの通う園の砂場等の放射線数値が高く不安だった。子どもの甲状腺のう胞が県の検査では分からなかった事実が浪江町の検査で分かった。そのことから主人は公務員を退職し、現在の避難先へ引っ越すことになった。事故当時妊娠中だったため五体満足の子どもが生まれるか不安だった。

今後の子どもの体について、がんへの不安が消えない。」（30代女性）

「原発事故があった時子供たちと一緒に外に居ました。放射能を浴びたのではないかという不安が常にあります。身体にどんな影響があるのか心配です。子供達はまだ未成年で女の子なので将来が心配である。地震、津波、原発事故と3度の被害を受けて身も心も不安で仕方がない。生活の目途もつかず先が見えない生活いつまでしなければならぬのかという不安。遠い通勤時間、高い放射能の道、土地を通らなければならぬ苦痛。雪の心配。命がけの毎日です。いつも線量を心配しながら生活しています。子供達がこれからどんな生活をしていくのか先が見えないので心配である。県外に避難したいが職業を捨てることもできず、子供たちに負担をかけているので申し訳ない。この震災で一番苦痛を味わっているのは子供達だと思う。一生消されることのない恐怖感をもって生活していかなければならぬ。どんな影響が出るか、常に考えて生きていくことになる苦痛をどう乗り越え行けばいいのか見通しが見えない。どうにかしてほしいです。」（40代女性）

「津島地区に避難した為、今後の健康（特に子供）が不安。避難当初、いわきナンバーを指されたりして、辛い思いをしたため、住民票を移しナンバーを変更した。当時8ヶ月の子供と避難しなければならず、近くに親戚も居ない為、不安な思いをした。数日の避難と思っていた為、オムツやミルクなどが手に入らず大変な思いをした、現在も差別されるのが怖くて、避難してきていることを近所の人たちには言っていない。聞かれるのも怖いのであまり外で遊んでいない。」（30代女性）

「私共の帰宅以来、お嫁さんたちの来訪なし。家から持ち帰ったものがあるところに大切な子供をつれてきたくないから。放射能の害を恐れている。本当に辛く、悲しい思いでいっぱいです。親子関係までゆがめて

しまった。終の住処を失い、避難先の生活はストレスで限界（我慢）で、一日一日を生きている状況です。」（70代以上女性）

「震災後5日たってから関東に避難しました。理由は子供の健康を考えてのことでした。爆発後すぐであったため放射能の健康不安はないと思ってました。ヨウ素の半減期は1週間と聞いていたため、大丈夫であろうと思っていました。昨年末、初めてヨウ素は震災後すぐ拡散していたことを知りました。報道は1年以上も経ってからでした。自分は年をとっているからいいんです。子供はこれから未来があります。これからずっと、福島原発地域出身がついてまわると思います。親として最善をつくしたと思っていたのに、ヨウ素を吸っている可能性があります。

子供の精神バランスをくずさないように、子供2人は友達に毎月19通の手紙を出しています。震災後3か月を過ぎてからはじめました。今でも続いています。おかげで、原発避難ということで同じクラスの子からいやがらせもありましたが、学校へ行くのはいやだといわず行ってくれました。1通に少なくとも120円はかかっています。東電から送料はでないといわれました。おかしいと思います。」（40代女性）

<被曝による差別に対する恐怖>

「娘と主人がホールボディー検査で数値が出ているので、娘の将来がとも不安です。甲状腺もA2判定なので何かあったらと怖いです。差別などで将来結婚できなかつたらどうしよう。この検査結果も将来配偶者やその両親に見せて了解を得てからじゃないと相手方に悪い気がしてしまう。傷よりひどいものを背負わされた。」（30代女性）

「家族、子供の健康のことを考えると、毎日が不安。今後の生活を考えるとどの決断をしたらあっているのか、決断を迫られることが多い。将来的に被曝したことに対して差別されたりするのではないかと考えると苦痛。生活費の増額。家を失った喪失感。」（30代女性）

「スクリーニング検査を被災して受けた時も、針がふりきった程。シャワーでおちますよと言われたが、とても信じられない。年月が経って、身体に何らかの病となって出てくるのではないかと不安は尽きない。差別等を受けるのが不安なので、避難先では被災者であることが言えない。」

（40代女性）

「被曝による風評が子供の結婚や出産に影響しないか心配。」（50代女性）

「国や東電、学者などは放射能など気にするなというが、全国共通、気にせず暮らしていても平気な人はいるわけがない。浪江で生活できると

は考えていない。しかし、他地域で生活しても差別や偏見は受ける。」

(40代男性)

「放射能に対して今後偏見が根付いて娘が大人になった時に支障にならないか不安。そしてすごく放射能を気にしすぎる人もいてその温度差が生活や育児において苦痛を感じることもある。夫が建設業で仕事があるのはいいことでもあるが、線量が高い所での作業、不衛生な中(豚の死がい処理、手の洗えない環境)での作業が苦痛に思う。」(20代女性)

「今独身だが、被曝しているのではないかと偏見の目で見られ、結婚することは難しいのではないかとと思う。」(20代女性)

「避難場所が幾度も変わるたびに落ち着かない。一緒に学校にかようはずの友達が、ほとんど県外に行ってしまう、県内にいていいのか不安ばかり。体にセシウムが入ってしまったことがショックだった。将来、結婚や出産で差別されたり問題がおきたりしないか怖い。家族全員で夕飯を食べられなくなった。避難者と見られるのが辛い。」(20歳未満女性)

「県内・県外のどこに避難しても差別される。必ずどこからきたのか尋ねられ、浪江町と答えると、放射能がついていると思われ、さけられたりいつも嫌な思いをする。身を潜めて生活している。」

仕事をするために家族がバラバラの生活になり、団らんがなくなってしまい、会話をする時間がない。生活費やガソリン代が倍以上かかり、生活が苦しい。住むことができない家のローンを払い、狭い仮設住宅にいてはならない現状は、牢獄にいるように精神的苦痛でたまらない。体内に入ってしまったセシウムがまだ人体の中にあることの不安が未だにつきまとう。誰にもわかってもらえない。子供はやけに不安定な状態になり、それを支える努力も大変。」(40代女性)

<情報への不信からの不安・恐怖>

「被曝の影響が、被曝量と年齢・性別等の影響予測が公開されていない。廃炉計画と放射能の変化推移等…もっともっと科学的データを開示してほしい。特に子供たちのへの影響を非常に心配している。」(50代男性)

「平成23年3月11日から2年が過ぎ現在も避難生活をしています。当初は何も情報がないまま浪江町から避難指示があった津島地区に避難していました。その場所のはちにすごい放射性物質が飛散していたことがわかりなぜ早く情報を公表しなかったのかと憤りを感じました。」

(40代男性)

「東電と国の言う安全を信じたことへの苦痛。東電や国が安全な場所に避難させることなく、線量の高い津島に避難指示をし、正しい情報を得られなかったことが残念です。3・11～3・16、東京に着くまでの放射能被害はどのくらいだったのか。娘はその時19歳。未来健康であることを祈るばかりです。2年が過ぎて疲れが増します。イライラが増します。」
(50代女性)

<放射線による環境的・財産的被害>

「帰宅するたびに家の中が大変なことになっております。ネズミがすごく、言葉では言えません。早く落ち着く場所を見つけないです。先のことを考えるといつも不安です。もう無理です。」(60代女性)

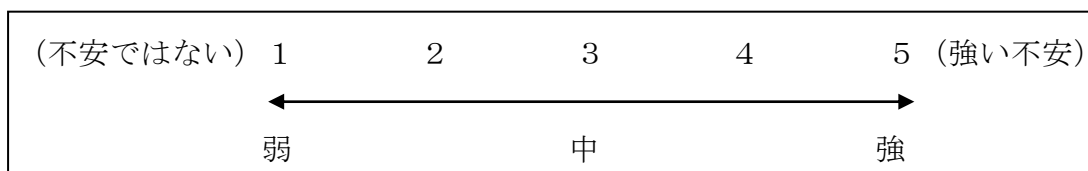
「事故当時、自宅に浪江町民18名を受け入れて寝起きを共にした。その自宅が、津島で最も放射線量が高い所であったと後にわかり、今でも悔しい気持ちがいっぱい。」

津島での生活・先祖代々の土地・家屋・墓地まで失った絶望感で泣くばかり。誰も知らない土地で、娘の家とはいえ、本来の自分らしい百姓としての暮らしができないこと、都会の慣れない環境の中で部屋に閉じこもった生活をしている。うつ状態を何度も繰り返し、死にたい死にたい精神状態です。一生の終りの住みかで、まっとうに生きてきた証を子孫に残すように苦労を重ねてました。この一生を無残に奪われた。津島の近所の皆さんとの絆が、切れてしまった。」(70代以上女性)

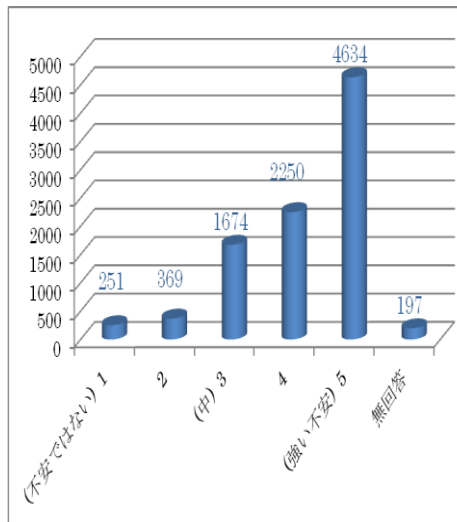
「仮設内は、線量が低いですが、1歩でると、1マイクロシーベルト近くある所が多くあるため、子供を遊ばせることができない。こどもの送迎により、ガソリン代が大幅に増加した。」(30代男性)

ウ 以下は、被曝による精神的損害に関する質問(6-1)に関するグラフ集計である。

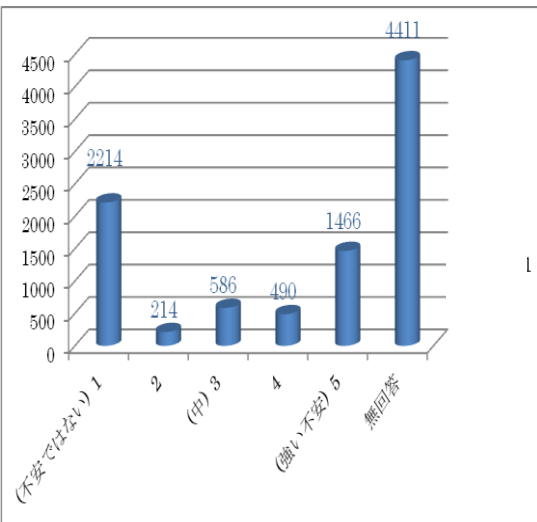
なお、質問6に対する回答は全て、その項目についての不安の強さの程度を1(不安ではない)ないし5(強い不安)の数字で示す形とした。



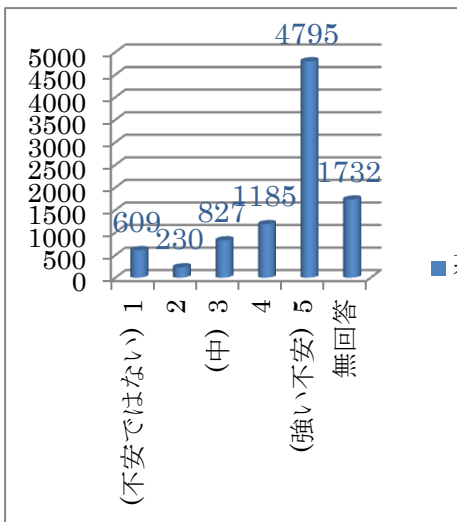
6-1① 自分の現在や将来の健康に不安



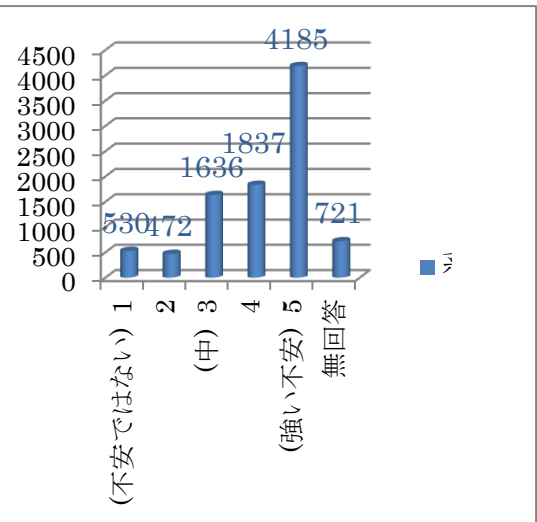
6-1② 自分の結婚、出産に不安



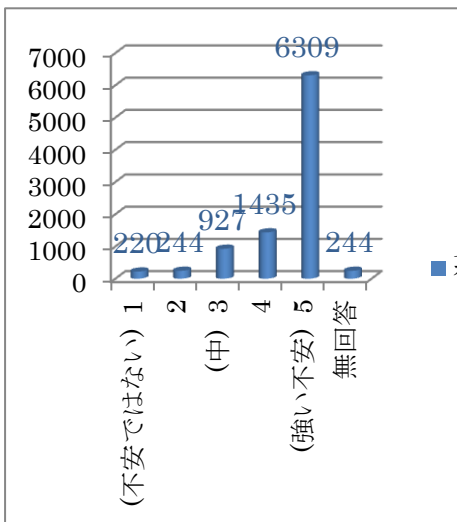
6-1③ 子(孫)の結婚、出産に不安



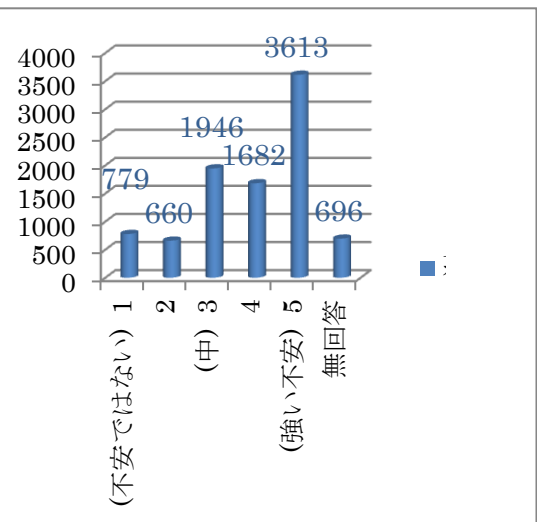
6-1④ 被曝したことによる差別・偏見



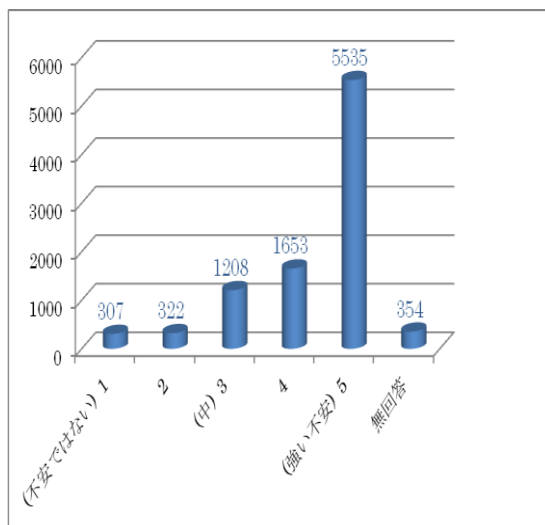
6-1⑤ 放射能が見えない恐怖



6-1⑥ 現在も遠方へ避難できない苦痛



6-1⑦「低線量被曝」による影響



(2) 地域社会（コミュニティ）破壊による精神的損害（質問6-2）

ア 6-2は、地域社会（コミュニティ）破壊による精神的損害について、「避難先では近所に知り合いがいないため、人との交流が断たれ、孤独で不安の苦痛」、「浪江町で長年交際してきた友人と会えなくなった悲しみ、友人の安否を気遣う不安」、「避難により破壊された地域コミュニティが元通りになるのか不安」、「避難中のため、避難先の地域コミュニティへ遠慮する、参加をためらうなど馴染めない苦痛」、「伝統文化、伝統芸能を守り継ぐことのできない無念、苦痛」について質問している。これらを比較すると伝統文化や避難先との関係に伴う苦痛は、比較すればやや低く、自分たちのコミュニティが破壊されている現状や将来についての不安が大きい傾向が見られる。

イ これについてもアンケート自由記載に多数の記載が見られたため、以下にあげておく。先にあげておいたものとあわせて、参考にされたい。

<コミュニティ喪失についての心情等>

「浪江町での生活が安全でなくなった以上は、生涯をかけた東電は賠償すべき。月額10万円で古里を捨てられますか？古里に値段はあるのですか。古里には月額10万円で値段をつけられますか？東電さん、値段をつけるとすれば、あなたなら月額いくらにしますか？生まれ育った古里に値段がついた事例はありますか。古里は値ではないのです。皆、心のなかにある思い出の地それこそが古里なのです。浪江町役場の方どうぞ強く東電と戦って下さい。古里に値段をつけてしまった今、月額10万

では到底納得出来ないのですから。古里には誰でも価値はあります。」
(70代以上男性)

○ 家族関係の破壊

「自宅を離れ、兄弟と意見の食い違いで仲が悪くなり、親には心配をかけ、子どもたちは故郷をなくし、私たちは帰るところもなくし、親の墓参りもできず、これからの生活を考えると先が真っ暗。夜も眠れない。今までに生きがいとしていた仕事、畑、花、カラオケ、友達、何もかも失った。多すぎる。今の生活は、すべてがお金のかかる生活。水、野菜、お金を出して食べる生活。」(60代男性)

「健康の不安。子供には週末にしか会えない。母親に子供を預ける際に、子供は泣きじゃくっていた。震災により生じたすれ違いにより、離婚。仕事ができないので、収入がない。」(30代女性)

「家族がバラバラになって毎日孫の顔が見られなくてさみしい。隣町に住んでいた娘、孫もしょっちゅう家に遊びに来ていたが、年に数回しか会えなくなり、来ても仮設住宅が狭く思いっきり走ったりできない。泊まりに来てスペースがないのでのんびりできずかわいそう。町内に住んでいた年老いた両親の様子を週1、2回程度うかがっていたが、今は何か月かに一回ぐらいしか行けないので心配。」(50代男性)

「兄弟、親類、何よりも友人となかなか会えない。皆散り散りになって苦痛この上なしだ。」(70代以上男性)

「浪江で死にたいと言っていた父が突然亡くなり悲しくて切ない思いでいっぱい。」(50代男性)

「私の両親は、広い自宅と、広い田畑で、四季を通し、米を作り、野菜を作り、家族と共に暮らしていた。私も生まれてからずっと浪江で暮らしていた。それが3月12日以降、その平穏な生活は両親も私も、私の肉親も、何もかも奪われた。浪江町のすべての人も同じ。あれから3年目、両親も肉親も私も狭く、知り合いのいない避難先での生活。何よりも、苦痛と感ずることは、両親が好きな農業ができずに、この2年間毎日、狭い仮設の中で、ただその日一日が終わるだけ待つ生活しかできないということ。もちろん、一家は離散してばらばらの避難生活だ。」
(30代女性)

「今まで一緒だった家族が別々で孫の顔も見れなくなった。子ども家族が来ても泊めてやれない。来ることも少なくなってしまった。仕事を持ち、一生懸命働き、生計を立てていた。生きがいを失ったこと。何代も受け継いだ財産もごみと化してしまったような喪失感。嫁ぎ働き55年

もの人生がすべて奪われ生きがいも失ってしまった。原発事故さえなければ、復興できたのに。今はただ1日を生きながらえている思いで、生きている実感がない。たとえ復興しても全体での生活には戻れない。私たち生きてきた証を失った思いでいる。」（70代以上女性）

「盆、正月、大型連休には、子どもたち家族や親せきが集まって楽しく過ごしていたが、今の避難生活では、部屋が狭くて、集まることも泊まることもできず、寂しい。年老いた母は花壇の手入れや家庭菜園などの楽しみを奪われ、生きる気力を無くし、廃人のようになってしまった。年寄りには、前向きに生きるよう言っても難しい。避難生活が長くなることで、家が荒れ、庭木は大木になっていくのが心配だ。家族が離れ離れになってしまい、家の中の片付けも思うようにできず、ストレスがたまる。この先、墓の移転なども考えている・・・がどうしたらよいか不安なことばかり。」（50代女性）

○ 人間関係・社会機能の破壊

「知らない土地、知人のいないところでの仕事はいままで全く経験のない仕事、職場環境、人間関係を築くのが大変でした。方言がわからなかったり、何を言われているのかもわからないこともありました。50年余り生きてきた経験も否定され、自分自身のいままでの生き様を知ってくれる人もいなかった。」（50代女性）

「知らない土地で、知っている人が誰もいない。何かをする意欲もわからない。起きて、生きている事さえ苦痛。故郷を奪われ、友人が皆バラバラになってしまい、買い物、出かけたとしても、知っている人に会う事が無い。」（30代女性）

「帰ったとしても、浪江に友人も帰ってこなければ帰る意味がない。昔の浪江町に帰りたい。ほどよく自然があったからこそその浪江町…都会は住む場所じゃなかった。」（30代女性）

「浪江にいるときは、友達や隣組の人々と毎日お茶を飲んでおしゃべりしてました。話をするのに、携帯電話を使用するため料金が高額になり、家計に負担がかかった。現在は、ひとりにつき、月一回程度の通話で我慢している。それでも高額な料金を支払っている。」（50代女性）

「コミュニティがある場合は、お互いの助け合いができていたが、現在はそれができないので、解決するのに時間もかかったり、しまいにはあきらめることが出てくる。」（60代男性）

「近所に知人がなく、浪江にいたころのように毎日茶飲み友達もいなくなった。通院中で、かかりつけの医師のような気心の知れた治療がないことに不安がある。」（70代以上女性）

「農作業や趣味（園芸や山菜採り）等ができなくなり、生きがいが無くなった。冠婚葬祭等、地域の方や親類との付き合いが極端に減ってしまった。家屋やお墓の修繕ができないので、一時帰宅したときに、荒れ果てた様子を見るととてもむなしい。」（50代男性）

「今までの物、先祖代々続いたもの（物質的・精神的）がすべて奪われた。この喪失感を金額では表せない。」（60代女性）

「浪江町では、信頼できる人や病院・学校など、周りのものをわかっていて。しかし、避難先では、知人もなく、自分を理解してくれる人はいない。浪江町以外の人、おもしろがって話を聞いたり、冷たい目で見ると。ストレスで夫や子供にあたってしまう。

浪江町では、米や野菜を作り、新鮮なものをもっていたが、避難先では全てを店から買い、出費も多く生活が大変。」（30代女性）

「自宅は、自然が豊かで、空気と水がきれいな健康にいいところだった。食事も家庭菜園で無農薬野菜を作って食べ、体に良いだけでなく、スーパーで買ったものとは比べ物にならないくらい美味だった。職場も恵まれていて働きやすく、人間関係もよく、楽しかった。

避難するようになってからは、環境の激変、原発事故直後の恐怖等のストレスから、体調を崩し、髪は抜け、体に合わない水道水で、肌は荒れ、一度に5～6歳も年をとったような姿になってしまった。失業はしなかったものの、なれない土地で、職場を転々として、公私ともに落ち着くことのできない生活から体調はどんどん悪化し、避難先住民の心ないひやかしや悪口、無神経さに精神的に耐えられなくなって、うつ病を発症した。一時は帰宅困難区域にある自宅に戻って死のうと思いつめていた。将来に希望が見いだせない。東電が憎いから、なんとか責任を取らせてくたいて生きていくような状況です。」（40代女性）

「住む所を追われ、今までの人生の思い出、人々との絆を断たれていること、一時帰宅のたびにみる我が家の荒れ放題の様子…全くそれらのことを無視した冷たい言葉、視線に、心がズタズタになっています。」（40代女性）

「慣れない土地での生活で学校の授業参観などに行ってもだれも知っている人もいなくひとりぼつんとさびしい思いを何度もした。買物などに行っても車がいわきナンバーなのでじろじろ見られたり私達が別に悪い

ことをしたわけでもないのにすごくいやなおもいをしている。」（40代女性）

○ 高齢者が受けるコミュニティ破壊による損害

「60歳を過ぎてからのアパート生活。周りには、知人がだれ一人もなく、話もできない生活。毎日毎日涙が出るほど不安。同居している娘が病気になった。入院・手術・退院してからの通院。自分がしっかりしていなくてはと思っても、本当に心細く、どうしてこんな目に合うのかと腹が立ちます。ひとりで涙が出てくる。浪江は山があり、川があり、海があり、親戚もみな近くにおり、友達も知人もいっぱいでした。良い所でした。」（60代女性）

「知らない土地で、散歩も自由にできず、だんだんと歩行が困難になってきている状態である。自宅にいるときは、隣の人たちとお茶を飲んだりと楽しく過ごしてきた。今は一人で部屋に閉じこもり、話す相手もなく、折り紙で飾り物を作ったりすることしかない（日中は一人になってしまう）」（60代女性）

「浪江にいた頃は、野菜作り、魚釣り、サボテンの栽培と四季折々の仕事があり計画を立て今日はこの仕事、明日はあの仕事と毎日を楽しんでいた。又野菜を作っては友人たちに配り雑談に興ずるのも楽しみの一つであった。避難してからはやることがない。これが一番の苦痛である。一日を過ごすのが大変である。」（70代以上男性）

○ 子どもが受けるコミュニティ破壊による損害

「息子の入学式が可哀相だった。同級生には知っている人が誰もいなく、知らない土地での学校をとにかく嫌がり、無理に行かせてしまったこと。娘は、転校先に知っている人が誰もいなく、毎日が憂鬱でふさぎ込みがちで、学校でもいわれの無い一言を同級生10人くらいにいわれ、学校で立てなくなるほど泣いていた。子供にとって、とっても苦痛だったと思う。嫁ぎ先で、子供を通して培ってきた絆を裂かれてしまった。実家も同じ町内だったので、行き来してたのに、今は違う県に避難していて年に数回しか会えなくなってしまった。」（30代女性）

「子どもが学校になじめず、毎日朝と夜と夜中に泣いていました。その時は、子どもはどうして浪江に帰れないのか・・・大人のことを「うそつき」と全く信用してもらえないときがあった。浪江にいた時は、学校が大好きで、勉強も大好きで、明るい子だった。今は少しずつだが、学校にも慣れ始めているが、浪江の話をする、辛いのか、あまり浪江町

の話を聞きたがらない。それに、ニュースとかでも、避難者の車にいた
ずらや嫌がらせをしている人がいるようで、この町にいるのが、少し怖
い。子どももいじめられるのではとても不安で、子どもには、浪江町
から来たことを隠すように言っている。とても悲しい。人によっては、
色々な考えの人もいるし、賠償金をたくさんもらっているということ
から、ねたみなどを持っている人も少なくないと感じている。なので、
私も、この町に来てから対人恐怖症になったように思う。浪江に帰りたい
のと、子どもを思えば、浪江に帰ってはいけないのと、色々な思いで
生活している。」（30代女性）

「原発避難で親戚や避難所を転々としていたので子供が精神的に不安に
なり、かなり激しい夜泣きが約1年間続き、当時子供2人と自分の3人
で避難していたので誰にも頼ることができずにいた。子供は泣きわめく
ことが多く、私は、それに対して怒鳴りちらすことが当たり前になって
いて、本当に虐待の一手手前まできていたと思う。子供も子供なりにか
なりの精神的ストレスがあり、夜泣きというか夜中に『ギャー』と叫ぶ
のが1時間に1回が、朝方まで続いていた。私も近所の目も気になるし
で、もうあんな思い絶対にしたくないし思い出したくもない。」（20
代女性）

「息子は、決してお金がほしいわけではありません。息子は学校生活が
大好きで、友達をととても大切にしていました。いい先生方にも恵まれ、
とても充実した毎日でした。その日常を返してください。元の町にして
返してください。なんでも前向きで頑張り屋だった息子がいまは、「ど
うでもいいや」という考えに変わりました。人生がくるってしまった責
任を取ってほしい。あの日3月11日以前の日常を返してくれるなら、
お金はいらない。返します。それができるのか？子どもたちのことを考
えてください。」（20歳未満男性の母）

「希望して入学した高校は通常通り再開したのに、小さい弟・妹の健康
不安から県外に避難せざるを得なくなり、通っていた高校を転校しなく
てはならなくなった。友達と離れ離れになり、頭がおかしくなりそうだ
った。」（20歳未満女性）

○ 経済的損失

「避難中は全く仕事ができず、キャリア、人脈、信頼をすべて失った。
その喪失感自分の生きる力を失わせた。天災なら多少の諦めがつくが、
原発事故は明らかに人際であり、防げたはずの事故だっただけにつらい。
財産も仕事も生きがいも人間関係も慣れ親しんできた風景もすべて奪っ

た事故は絶対許せない。新たな土地で不動産を求めるに当たり、本来浪江町で建てた家で十分なものを、親と住むために新築せざるを得なかった。高齢の親は不慣れな郡山へ避難し、精神的に弱ってしまい、いつもなら同じ町に住む家族もバラバラに避難し、話し相手も少なく、鬱病手前まで来てしまい、いつも泣きながら電話してくる姿にこちらもどうしてやることもできず、今回の事故の怒りが改めてこみあげてくる。ある日突然の避難指示により何の心の準備もないまま古くからの友人とのきずなが打ち切られた苦しみは筆舌に尽くしがたい。何の落ち度もない私たちが人生を狂わされ、多くのお年寄りが故郷を思い、涙を流し、幼い子供たちが自分の心身のこれからを憂う。日々増す望郷の思いと二度と同じ町で会うことができない友人たち、知り合いたち、日々深まる悲しみにどう向き合えばいいのか。」（40代女性）

「生活費の準備やりくりは言葉では言い表せないほど。その捻出に工夫をし、頭を痛めた。夜寝ても幾度も目を覚まし、朝まで悩み続けてしまうのが現実。」（70代以上男性）

○ 自然環境の破壊

「ふるさとの野や山、海や川には春夏秋冬の楽しみがあった。例えば、山に茸採りに行ったり、川へ魚釣りに行ったり、町や大字の祭りごとに参加する楽しみも、東電の事件で皆出来なくなってしまった。この苦痛は大変なものだ。」（70代以上男性）

「大切な人に会えなくなったこと。親戚との付き合いも出来ないこと。山も海も川も畑も何もない生活はできない。」（50代男性）

「一生をかけて築いた家庭、家、人脈がなくなってしまった。生まれた浪江町を住めない町にされてしまった。」（50代男性）

「『住み慣れたふるさとが誰も住めなくなってしまう』という足元が崩れ落ちるような喪失感。」（50代男性）

「去年の秋に自宅に行ったが庭が雑草だらけで車を駐車することもできないくらいだった。家に入る道も竹や木が覆いかぶさっており出入りすることができず歩いて入った。町内の変わり果てた状態を見ると哀しい。原発事故さえなければ自分たちで復興できたと思うと残念です。」（50代男性）

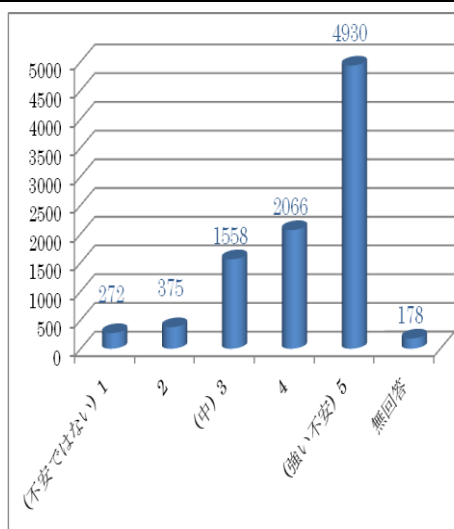
「一夜に家も土地も畑もそれに川も海も山も奪われたこの苦しみは言葉には表現できない。」（60代男性）

「浪江が大好きだった。海も山も川も全部。自分の生まれた町は特に何もないが、自然があふれていて自由に生活できた。友達もたくさんいた

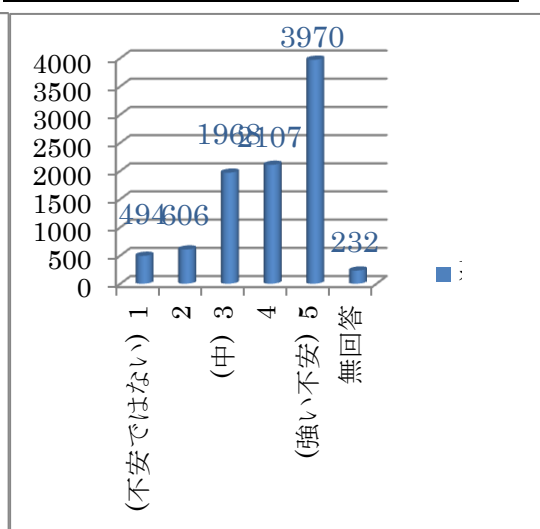
し親せきもたくさんいた。みんな色々あっても仲良くしていた。地元の野菜、米、魚、果物、おいしかった。どこの人に送っても喜んでもらえると聞いていた。自分もそう思う。早く帰りたいと思うが、もう元の浪江はないんだと思うと、本当に帰った方がいいのか考えてしまう。事故後1年くらいからずっと考えている。考えても考えても答えが出なくて、同じことを繰り返している。おかしくなりそうだ。」(20歳未満男性)

ウ 以下、地域社会（コミュニティ）破壊による精神的損害（質問6-2）に関するグラフ集計である。

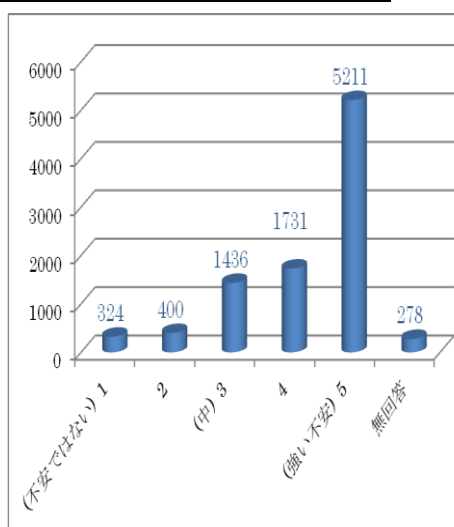
6-2①人との交流が絶たれ、孤独で不安



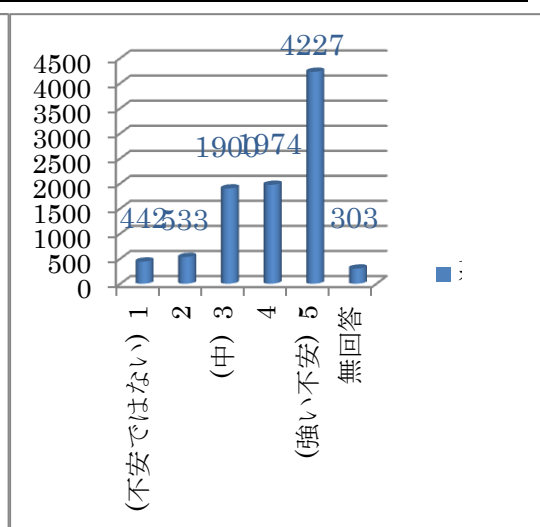
6-2②友人と会えない悲しみ、安否の不安



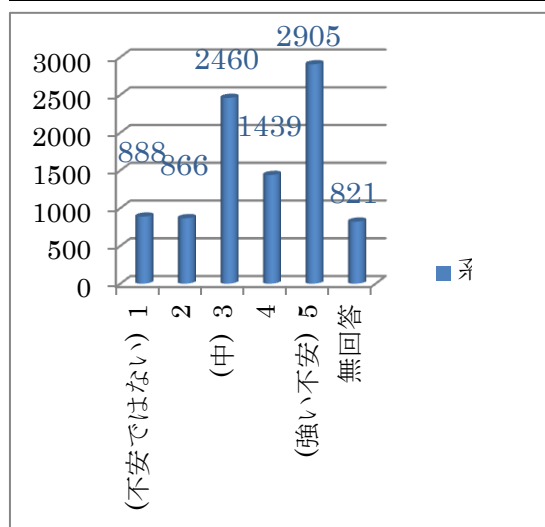
6-2③コミュニティ回復への不安



6-2④避難先コミュニティに馴染めない苦痛



6-2 ⑤ 伝統文化、伝統芸能を守り継ぐことのできない無念、苦痛

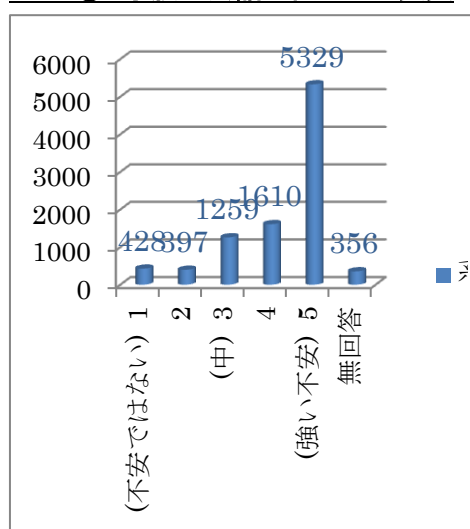


(3) 平穏な日々の喪失による精神的損害 (質問6-3)

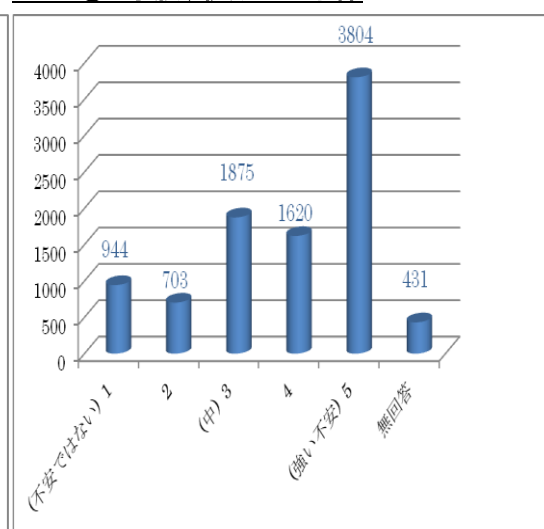
ア 質問6-3では、平穏な日々の喪失による精神的損害について、「家族の離別や生活サイクルの変化により、家族の会話や団らんを失った苦痛」、「避難生活では家族や親戚の間の適度な距離を保つことができず、不仲になってしまった苦痛」、「仕事(生業、畑仕事も含む)や趣味を失って、「生きがい」や「やりがい」がなくなってしまった苦痛」、「浪江町での日々の生活を思い出し、これからの生活を前向きに考えることができない苦痛」など、家族関係や生活など日常の喪失に関わる苦痛について質問した。いずれの項目でも強い苦痛を抱えている現状が明らかである。

イ 以下、平穏な日々の喪失による精神的損害(質問6-3)のグラフである。

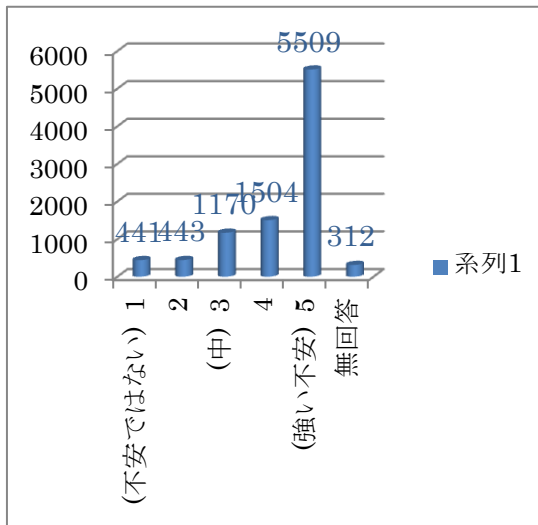
6-3① 家族の会話や団らんの喪失



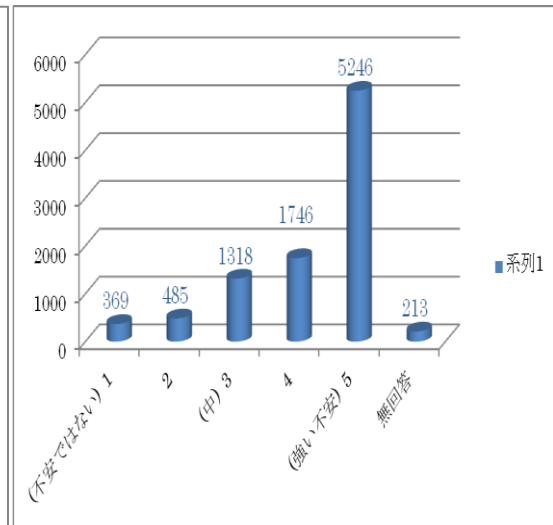
6-3② 家族、親戚との不仲



6-3③ 仕事や趣味の喪失



6-3④ 今後の生活を前向きに考えられない



(4) 自宅に帰れないことによる精神的損害 (質問6-4)

ア 質問6-4は、自宅に帰れないことによる精神的損害について、「長年生活してきた愛着のある家に住むことが出来ない無念」、「先祖、故人の供養、お墓参りができない苦痛」、「家や庭、敷地、田畑、家畜などが荒れ放題だが、手を入れることが出来ない苦痛」、「避難先の住宅は近隣が気になり、いつも落ち着かず気を使う苦痛」、「避難先の住宅は狭い等で、家族間のプライバシーが守られない苦痛」の5項目について質問している。ここでは、プライバシーの制限や、近隣との関係など現状の生活に関わる苦情以上に、住み慣れた家の喪失、手入れができないこと、墓参りができないことなどへの苦痛度が高く、生活の場が失われたことによる代替不可能な精神的苦痛が非常に強いことがうかがわれる。

イ 以下、自宅に帰れないことによる苦痛に関する自由記載欄のコメントの一部を紹介する。

「浪江の家をみると悲しくなる。もうネズミのフンとかで汚くてすめる状態ではない。とても苦痛である。」(70代以上女性)

「家は、牛に硝子戸を壊して中に入れ、居間で猫が2匹死んでいて、骨になっている。気持ちが悪くて自分では片付けられない。」(60代女性)

「実家の祖母が、区域が再編されて日中は自由に行き来出来るようになったのだが、自宅で生活出来ないことを苦にして昨年、自宅から隠し持ってきた農薬で服毒自殺してしまった。」（40代女性）

「亡くなった母の葬儀を母の生まれ育った浪江町で実施できなかった無念さは言葉では言い尽くせない。」（60代男性）

「100年以上先祖代々受け継いできた土地、家を手放さざるを得ないであろう状況は、60近い私たちにとってもつらいし、83歳の父にとってはさらに苛酷である。今後一体どうしたらよいのか先が全く見えない。」（50代女性）

「避難場所を5カ所変え、途中からは実家の母も一緒に避難するため連れて移動しました。ポケもなく、自分のことは全部自分でやっていた母ですが、3カ所目の避難場所では鬱病的になり、昨年10月には亡くなってしまいました(事故がなければもっと長く生きられたでしょうに)。息子と孫の二世帯で暮らしていましたが、孫たちは新潟へ、息子は福島で単身アパート暮らし。孫たちはじいちゃんばあちゃんはどうしているのと心配していたようですが、一緒に大変な時期に過ごせなかったことのがやしさがあります。また、孫が、新潟の小学校では教室の隅でいつもポツンと一人でいたと後で聞いたら涙が止まりませんでした。浪江に帰っても家の中はぐちゃぐちゃ。ひどいものです。お墓も倒れ、ただただ手を合わせてごめんねということしかできません。」（60代女性）

「去年の秋に自宅に行ったが庭が雑草だらけで車を駐車することもできないくらいだった。家に入る道も竹や木が覆いかぶさっており出入りすることもできず歩いて入った。町内の変わり果てた状態を見ると哀しい。原発事故さえなければ自分たちで復興できたと思うと残念です。」（50代男性）

「先祖代々親の位牌もそのままの状態。原発事故の状態の家の中にいます。自分たちが死んだらどうなるのか心配です。」（70代以上男性）

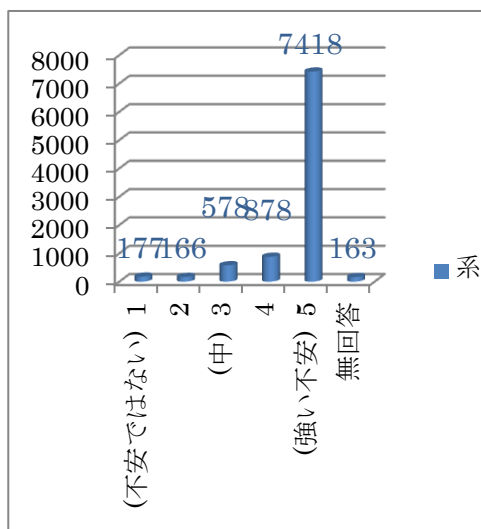
「一時帰宅時、柱までネズミにかじられ、糞だらけ、雨漏れ、風呂場に蛇がいたりし、トラウマになった。」（60代女性）

「今は一人で郡山に住んでいるが、家に一時帰宅すると、家はねずみのふん、あらゆる動物が入っていてメチャメチャになっている。2階も崩れているので、家には帰れない。外からはあまりわからないが、家の中は大変なものだ。」（60代女性）

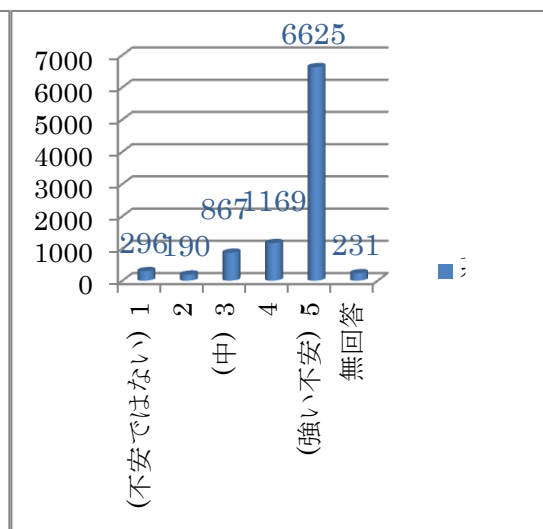
「子供達の小さい頃の記録(写真、ビデオ、作品、賞状等)がネズミに食いちぎられていた。押入れ箆笥が猫に荒らされていた。もう持ち出せない。あきらめなければ…淋しい。」(50代女性)

ウ 以下、自宅に帰れないことによる精神的損害(質問6-4)に関するグラフである。

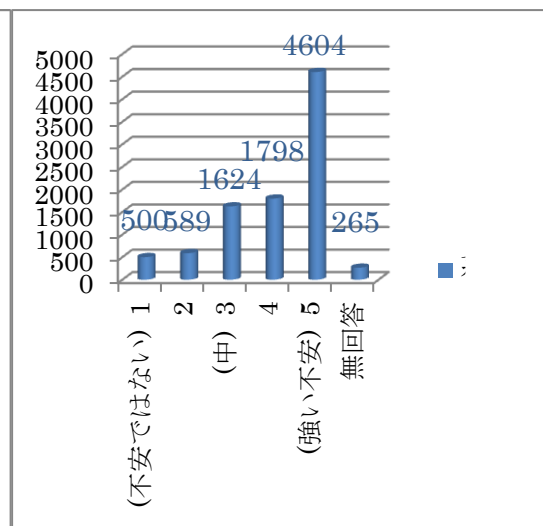
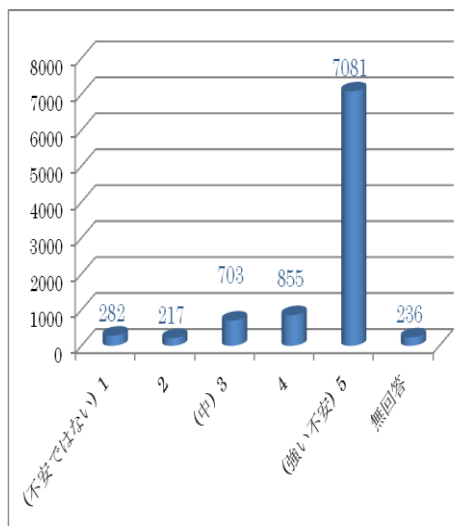
6-4① 愛着のある家に住めない無念



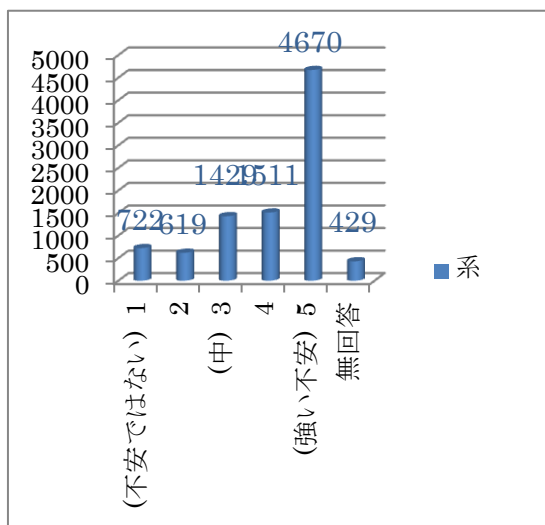
6-4②先祖、故人の供養、墓参りができない



6-4③ 家や庭、田畑、家畜などが荒れ放題 6-4④ 近隣が気になりいつも落ち着かない



6-4⑤ 家族間のプライバシーが守られない



(5) 避難生活の不便さによる精神的苦痛 (質問6-5)

ア 質問6-5は、避難生活の不便さによる精神的損害について、「仮設住宅は狭い、寒暖の差が激しい、結露による湿気など、住環境が劣悪」、「避難先（借上住宅等）は狭い、階段の上り下りがある、近隣がうるさいなど、住環境が悪い」「通学、通勤が不便、または長距離等で時間が掛かり苦勞する」、「移動にお金が掛かる（タクシー等）、または苦勞する」など、現状の生活環境、生活上の不便に起因する精神的苦痛について問うている。これら現状の生活に関する苦痛は、失われた生活に起因する苦痛と比較すると比較的低いものの、いずれの質問においても苦痛度5の回答がもっとも多く、現状の生活環境・状況についても、強い精神的苦痛が存在していることを示している。

イ この点について、アンケート自由記載欄には、以下のような記載が見られた。

<仮設住宅>

「仮設住宅は四畳半二部屋に二人で住んでいるが、物を置くと狭い。窮屈な思いで暮らしている。隣の話し声や物音が聞こえるので、自分でも物音を出さないように気を付けているのでストレスがたまる。」（60代女性）

「仮設住宅の中で隣の寝息が聞こえたのにびっくり。テレビの音、話し声、部屋の小ささ、浪江の生活に比べてすべて。また、避難生活の中で子供、孫達が自由に正月、盆、春、夏、冬の休みに来て泊まって行っただができなくなった。原発事故のためすべて失った。」（70代以上男性）

「部屋が狭く、隣が気になって落ち着かない。」（70代以上女性）

「仮設住宅での隣や近所とのプライバシーが守られていないこと」（60代男性）

「仮設の暮らしが苦でもあるが、夜が眠れないときがある。仮設の隣がうるさくてかなりの苦痛だ。壁の防音をしてほしい。夜眠れないのでお願いしたい。」（20代男性）

「仮設です。お客が来て、玄関の戸を開けたら自分たちの生活が他人様に丸見え。お昼寝もできない。」（60代女性）

「慣れない仮設住宅の生活で家の中で大けがをしまい、1年経った今でも通院の日々。手術までして、足首が固まり階段の下りができない。家族に迷惑をかけてしまっている自分に毎日苦痛で仕方ない。」（20代女性）

「7回も避難場所を変わり、仮設に移って、部屋は少なく、プライバシーは家族だけでなく、隣にも気を遣い、もう少し隣との壁を厚くしてもらわないと年寄りも若い者も話し声、テレビの音量、すべてを気にして暮らさなければならない。家族間でもほんの少しの言葉遣い、行動が気になり、お互い我慢の連続で、爆発しそうになること度々。棟と棟の間が狭く、洗濯物を干すのも気になり、自宅では開放的だった部屋も、目の前を人が通るのでは気楽に窓も開けられない。」（70代以上女性）

「部屋が狭いので、夜はよく注意して歩いて怪我のないよう、トイレの時はカニさん歩きで歩いて気を付けている。本当に大変です。」（70代以上女性）

「除雪作業が大変。仮設が寒い。光熱費の増加。山なので、買い物するのに不便。●●市民からの嫌がらせ・悪口・陰口。とくに子供が学校で避難民というだけで、浪江人は嫌い、賠償金もらって税金払わないといじめにあっている。いわきナンバーに乗っているだけで嫌がられる。仮設内は、線量が低いけど、1歩でると、1マイクロシーベルト近くある所が多くあるため、子供を遊ばせることができない。こどもの送迎により、ガソリン代が大幅に増加した。」（30代男性）

<借上住宅>

「借り上げ住宅が劣悪（結露、湿気によるカビ、コウモリ、寒暖の差が激しい、一日中暗い）。」（40代女性）

「借上げ。現在の住宅にはトイレや風呂に窓が無く、結露で壁にカビが生え、床も濡れ、毎日の掃除が大変。」（70代以上女性）

「借り上げ住宅についても、一度ハウスダストのアレルギーで住み替えをし、猫2匹と大人2人で2DKに越したが、子供が生まれ、狭くなってしまった。離れて暮らす家族が泊まりに来ても、茶の間で寝てもらふ始末。アパートなので、気を遣う生活がいつまで続くかもわからず。」
(30代女性)

「今の借り上げ住宅では5人家族で住むのはとても狭く、毎日が苦痛。マンションなので、上下の音が気になり、自分たちも毎日のように子供に注意してしまう。引っ越したいが、子供たちがもう転校はしたくないというのと、実際に引っ越しといってもほかに広いところ、物件すらありません。」
(30代女性)

「避難先の生活環境になれず、とても苦痛である。借り上げアパートが狭く、家族別々に暮らしており、周りからは家庭がうまくいっていないと噂されている。」
(30代女性)

「高齢者2人が一緒に避難だったのですが、借り上げ住宅での生活で段差等につまずき、けがをしたことにより、2人とも歩けなくなり、寝たきりで介護が必要になりました。狭い借り上げ住宅で2人の介護はとても大変です。自分も介護をしているため、働きに行くことができません。」
(50代女性)

「慣れないアパート生活。部屋数が少ない、狭い。介護が必要な親にとって是不便でならない。引っ越しを考えても、借主が借り上げにしないところが多く、自己負担額が増える。住環境が悪く、排水溝の悪臭や不審者が住宅侵入やのぞきをしたりで、子供に被害がないように気をつけて疲れる。」
(40代女性)

「周りの人に『避難民』と呼ばれるのが嫌で、浪江から避難してきていることを隠すことがある。同級生の友達と月に何度もランチしていましたが、みんな遠くへばらばらになってしまい、愚痴をこぼす相手もいなくなりました。借り上げ住宅のアパートは音を気にして生活するので疲れる。」
(40代女性)

「家族がバラバラになり、各々が慣れない土地や人たちにより、苦痛やトラブルにあい、ストレスで身体に様々な症状の病気が出て困っている。県外の借り上げ住宅に住んでいるが、上の階の足音、物音がうるさすぎて部屋にいると具合が悪くなったり、話し声も筒抜けのため、プライバシーもない。移動したくても借り上げは1回と決まっているため新しく借りることが出来ない。二重生活のため、生活費が二倍かかるし、家族と会うのにも遠距離なのでお金もかかる。具合が悪くてもどこの病院がいいのかわからず、大変苦労している。周りに知っている人がいないた

め、孤独を感じるし、知り合いになるきっかけさえない。」（40代女性）

<今の生活についての心情等>

「人生のほとんどをかけて手入れをしてきた家・庭・畑、四季を通して花が咲いていた家、それが無残な姿に変わって生きる希望がわいてこない。」（60代女性）

「農家だったので、広い家、広い土地に住んでいたが、現在はアパート暮らし（6畳二間）なので、食器棚、調理したものを置いておくスペースがない。いつも頭にきてイライラしている。物があふれて、狭いアパートがゴミ屋敷状態になっている。自宅をいつも花でいっぱいにしてきたが、それができない。いつも他人の音を気にしながら自分でも気を遣いながら生活している事。」（60代男性）

「毎日何をやればよいのか。職を失ったことの惨めさ。我が家があるのに（103坪新築）貸家暮らし、情けない。田、畑の耕作、将来が見えない不安、ちくしょう！」（60代男性）

「現在、アパートで生活しているが、3部屋で茶の間兼寝室として使用している状況である。部屋も狭く、プライベートもない。2階で足の不自由な母が上り下りが大変苦勞している。知らない土地で、散歩も自由にできず、だんだんと歩行が困難になってきている状態である。自宅にいるときは、隣の人たちとお茶を飲んだりと楽しく過ごしてきた。今は一人で部屋に閉じこもり、話す相手もなく、折り紙で飾り物を作ったりすることしかできない（日中は一人になってしまう）。」（60代女性）

「高齢の要介護者が一緒なので避難してから生活のリズムが狂い、母が夜不眠になり、二年間ほとんど私は眠ってはいられない状態です。去年の秋ごろから、低血圧ぎみだった私ですが、不眠とストレスで高血圧ぎみです。目に影響が出ています。家にいた（浪江町）ときは、ベッドを使用していたので、自分で（夜はポータブルトイレ）用を足していたのですが、今は狭い（6畳2間に大人4人の借り上げ住宅）ので、ベッドは置くことを控えています。老母の体がいよいよ自由にならなくなったら使用しようかと思っています。母は眠られないので1時間おきぐらいにトイレに行きたくなりポータブルトイレに立たせて介助してやらなければならない、自分で出来るつもりで立ち上がると危険なのでそばに寝ていて、ぐっすり眠るわけにもいきません。ですから、県内に戻りベッドを置ける広さのある借り上げを探していますが、なかなかみつかりませ

ん。手足をのばして何も気にせずゆっくり眠るのが当面の私の夢です。」

(60代女性)

「仮設住宅での生活は、以前のように体を動かすような仕事がなく、筋肉の衰えが感じられる。一日中、目的も希望もなく、ぼんやり過ごしているために、心身ともまいってしまった。以前は、家族9人が楽しく生活していたが、今は孫やひ孫が遠くに避難し、家族がバラバラになってしまい、ごく平凡で楽しかった老後の生活をうばわれた。」(70代以上男性)

「家族6人1部屋で生活していたときは、ストレスがたまり、泣くほど辛かった。家族の絆が、ほどけてしまうような気がした。また、ずっと連れて来ていた猫をアパートのため何度も捨てにいき、また探しに行ったり、今でも、我が家の猫を思いだすと、胸が苦しくなる。今は仕事の都合で6畳一間のアパートに一人暮らし。昔の大家族だった頃の思い出をこころに浮かべることが多くなった。」(50代女性)

「毎日孫が遊びに来てイベントが大好きだった家族もできなくなり、家族バラバラ。借り上げ住宅でも狭く、家族(子供、孫)全員集まることましてや泊まることもできず遠くに離れてしまい逢いに行くこともできず、夫婦だけの食事でも食器を置くところもなく最低な生活です。」「浪江にいたころはいつでも逢えていたのに。朝から趣味の草花の手入れをしたり、仕事もできたのに、今では何もできず、精神的ストレス重症の診断され、年を取って不安、苦痛だらけです。」(60代女性)

「家族がバラバラになって毎日孫の顔が見られなくてさみしい。隣町に住んでいた娘、孫もしょっちゅう家に遊びに来ていたが、年に数回しか会えなくなり、来ても仮設住宅が狭く思いっきり走ったりできない。泊まりに来てスペースがないのでのんびりできずかわいそう。町内に住んでいた年老いた両親の様子を週1、2回程度うかがっていたが、今は何か月かに一回ぐらいしか行けないので心配。」(50代男性)

「家族がバラバラになったこと。家族間移動のため、長距離運転をしなければならぬこと。単身赴任の生活をするようになったこと。」(50代男性)

「二重生活による生活費増、将来及び今後の方向が不明。県外避難で周りに知人がなく、孤独。」(60代男性)

<通勤の困難>

「仕事について：前の勤務先は退職して、避難してからの勤め先は、片道38kmも離れている。肩こりや腰痛もひどく、大変な毎日を過ごしている。」（50代女性）

「通勤時間が30分から3時間30分に増加し、毎日朝2時30分に起きて眠い目をこすりながら通勤している、そのせいで腰痛、肩こりが頻繁になり震災後はギックリ腰を何度もやっている。それと、ちょっとした風邪などもひきやすくなった。通勤の疲れがたまっているせいだと思う。」（20代男性）

「勤務先の事務所移転により通勤時間がかかり過ぎる。単身で生活せざるを得なかった苦労が現在も続いている。生活も二重生活となり、気持ちも落ち着かない。」（50代男性）

<子供の生活の困難>

「高校生とかには何の支援もなく、苦労した。仮設にエアコン1台しかなく、壁で仕切られて風が当たらず、18歳の息子は40度を超える部屋で受験勉強をして、熱中症になりかけた。浪江や原発に近いというだけで車に傷をつけられたり、石投げられた。子供がわらわなくなった、暗くなった、友達居なくなった。自分も仕事なくなり、生活が苦しくなった。」（40代女性）

「現在二本松で借上げアパートで生活だが勤務先は南相馬市、距離もあるし、時間もかかる。放射能の高い飯舘も通っている。冬は雪で事故への不安が高い。一時帰宅しても家がない。お墓は3月11日のまま全く進まない復興。考えるだけで不安とストレス。子供の通学に時間・お金もかかる。特に定期代は3か月で約7万もかかる。」（40代男性）

「高2の子どもは転校したが、通学に自転車で片道2時間かかり心配だった。また、避難生活に耐える子どもを見るのが辛い。」（40代女性）

「通学の距離が遠くなり、学区外のため毎日送り迎えをしている。近くに引っ越したくても一度住み替えをしているとどんな事情でも移動できないため本当に不便。事情によって住み替えはあり得ることであり、認めてほしいと思う（何度でも）。」（40代女性）

「子供3人の心配。浪江にいた時は、学校行事を時間休でとったりも出来たが、今は半日休まないと見ることも出来ず、行けない時もある。主人は郡山、私は二本松に通勤していて、仮設に入って少したってから二本松か郡山に引っ越ししないかと家族会議をしたら、2番目の子が「いやだ～」といって布団に入り泣いていたことを思い出し、今は言いづらい。（仮設住宅に入るまで転校を3回したため）。」（40代女性）

「主人との2重生活。親子と一緒に暮らせないことが悲しい。子どもは毎週主人と別れる度に泣く。子どもにも悲しい思いをさせていることがとても辛い。家族みんなで暮らしたい。子どもはまだ小さいため浪江町に入ることが出来ない。「おうちに行きたい」と言われるのもとても辛い。大人より子供の方がいっぱい傷ついている。」（30代女性）

「主人と離れて生活しなければならなくなり、子供達がパパ、パパ、と泣く姿を見るのがとても辛くて、私まで涙が出てきてしまった。原発さえなければ子供達がそんな想いをせずにすんだのにと考えると、辛くて辛くてしかたがない。」（30代女性）

「この1ページに書ききれないくらい精神的にも肉体的にも苦痛を受けた。特にひどい精神的苦痛は、私の子どものこと。子どものうち一人が、避難直後精神が不安定になり「死にたい」と言って家出をした。すぐに追いかけて説得して連れ戻したが、その時のことを思い出すたびに私の体調は今もおかしくなる。その子どもも今は何とか頑張って学校に通えるようになり、少し落ち着いてきたが、まだ不安定な時がある。他の2人の子どもも原発事故の話をするとう「頭が痛くなるから言わないで。」とか、「僕は今の学校へはあまり行きたくない。」と言っている。毎日子どもたちの今後のことを思うと、大人の私でも精神が不安定になり、原因不明の腹痛や不眠になる。仕事にも支障があり、とても辛い。」（50代男性）

「幼稚園の娘に『いつ浪江に戻れるの？私もお家からおもちゃを持っていきたい』と言われると、『今地震で壊れて直しているからね』と説明するしかない。幼稚園、中学生の子供は、浪江の風景を忘れてしまうのが怖い。自然豊かできれいな故郷に本当に帰れるのか？子供を思うと動き出せない。」（30代男性）

「はじめ津島にいきましたが、そのあと川俣など6ヶ所も移動したことで、避難で親せきのところでも子供たちがうるさく気をつかい、いつまでもいることができず体育館などに避難した。学校も小学生と中学生と幼児がいたが、学校も3回も転校したのがかわいそうだった。一番下の子もそのときは3才だったが、幼稚園に一週間もかよえなかった。今の仮設におちつくまで子供たちがかわいそうだった。自分たちの仕事が再開して会社が郡山の方になったので移動しようとしたが子供たちがもう学校転校するのはいやだって泣いてたのまれて妻と2人して高速道路をつかって通勤している。最近体がつかれてこまる。仮設ぐらしでストレスがたまってしまう。ネコをかっていたが、ストレスでなくなってしまった。部屋でかうしかなく外にもだせずなくなってしまった。子供たちも

外で遊んでいるとうるさいとかまわりに気をつけて大声で遊ばず、部屋に閉じこもってしまう。まわりに気をつかうのもつかれてしまう。」

(40代男性)

以下は、子ども自身からの声である。

「体育館から旅館に避難した。高校に通うのにバスで往復2時間だった。途中乗り替えがあり、苦痛だった。仮設が狭く2Kで3人家族で過ごした。勉強する環境ではなかった。」

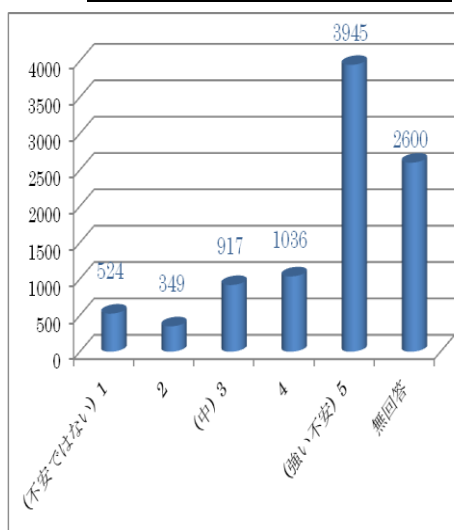
旅館、仮設住宅の生活で同年代の人(男子)がいなかったのが孤独感を感じた。自分が入学した高校の入学式もなく、校舎に入れないうさびしさ。このまま卒業するのかなと思うととても悲しいです。(平成23年4月入学なので)1日でもいいから中学校時代の同じ高校を受験した友人と高校生活を送りたいです。お父さんの仕事が変わり、長期の出張で家を留守にすることが多くあり、家族3人で過ごすことが減り、寂しいと思う気持ちを強く感じる様になった。」(20歳未満男性)

「先輩と一緒に最後まで部活動をしたがためにサテライト校に入りましたが二本松は放射能も高く被曝がとても心配でいやでした。」(20歳未満女性)

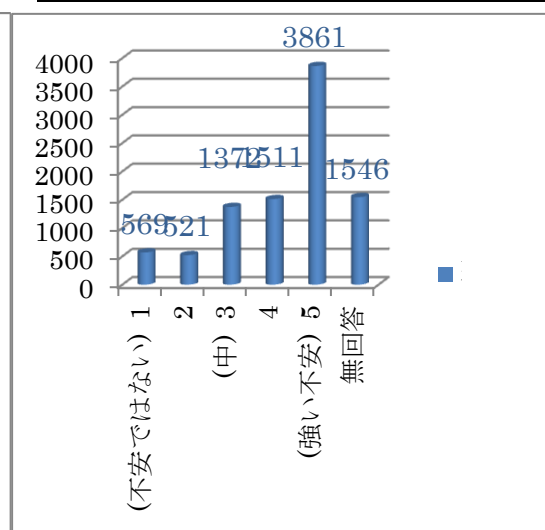
「親戚の家へ、2軒の家に家族が分かれ避難生活が始まり、新学期には土湯を宿に、福島市の中学へ、3年生としていきなり転校生として通学になりました。今まで経験のない大型バス通学になり全校生徒、何百人という大きな学校、そしてクラスも何組も慣れるまではそれは大変でした。勉強も次の年受験で大変だった。」(20歳未満女性)

ウ 以下、避難生活の不便さによる精神的損害(質問6-5)に関するグラフである。

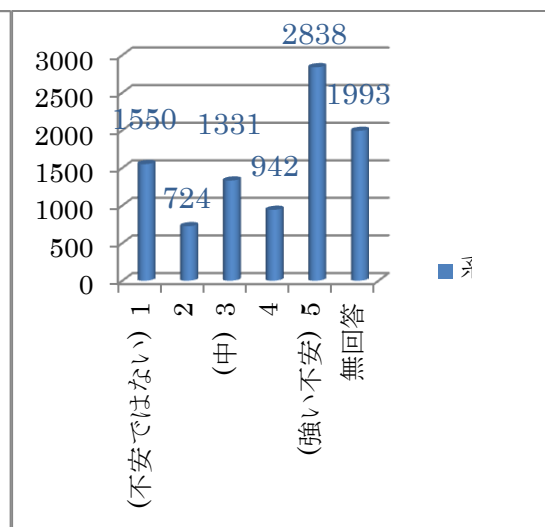
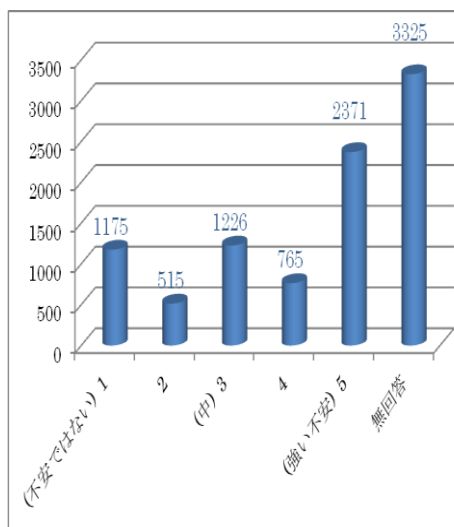
6-5① 仮設住宅は狭い、寒暖の差が激しい、結露による湿気など



6-5② 避難先(借上げ住宅等)は狭い、階段の上り下りがある、近隣がうるさいなど



6-5③ 通学、通勤が不便、長距離等の苦勞 6-5④ 移動にお金がかかる又は苦勞する



(6) 先の見通しが見つからない不安による精神的損害 (質問6-6)

ア 質問6-6は、先の見通しが見つからない不安による精神的損害について、「いつ帰ることが出来るのか、本当に帰ることが出来るのか不安」、「浪江に戻っても、または避難先でも隣近所と支え合い、楽しく暮らすことができるか不安」、「土壌や水質も含め、町内全域が安全に暮らすことができる線量まで除染されるのか不安」、「原発の廃炉までに、また事故が起きないか不安」、「中間貯蔵施設、最終処分場の建設や安全性に不安」、「避難先などでの生活再建に向け、十分な賠償金が支払われるのか不安」、「仮設、借上住宅等にいつまで住むことになるのか、またいつまで住むことができるか不安」、「自分の就学・

進学先、就職先をどこにしたらいいか悩む苦痛」、「子（孫）の就学・進学先、就職先をどこにしたらいいか悩む苦痛」、「生活（人生）設計が狂ってしまい、これからどうすればいいのか困惑する苦痛」の各項目について質問した。この6-6の「先の見通しが見つからない不安」についての苦痛は、一部を除くすべて、6-1～6-5の各質問項目と比較しても強い不安を示しており、多くの住民にとって、今後の生活の設計や安全性などについての不安、苦痛が、きわめて強いことを示している。

イ 以下、先の見通しが見つからない不安に関する自由記載欄のコメントである。

「自宅の時は、部屋が8室でアパート生活は初めてで、部屋の一角には、妻の骨の仏さんと枕元での生活。成仏もできず、78歳の一人暮らし。残念でならない。」（70代以上男性）

「平穏な二世帯の日常生活が分断され、コミュニティからも隔離されたような生活が長期化し、高齢化世帯となり、将来の見通しが立たないこと。」（70代以上男性）

「孫達も遠くへ行ってしまう年に1～2回しか会えない。今後年老いていく私らはどこに住むことになるのだろうか。どうしたらいいのだろうか。毎日が孤独な生活。いつまで耐えられるのか？不安。すべてが原発事故のせい！」（50代女性）

「突然知らない所を転々と歩き回り、先の不安が頭の中で大混乱してしまった。現在、体を動かさず何か見ようとか書こうとかが出来なくなっている。人との話をするのも面倒になり、こんな生活をいつまで続けて行けばいいのか。もうたくさんだね。」（50代女性）

「原発直後、体育館への避難。老いた身体には無理があり、次男宅へ行くが長くいられず長女の神奈川へ行く。6ヶ月程世話になるが長女の家族をも崩壊状態になり、緊急に浪江町に連絡を取り仮設住宅への避難生活へとなる。老いた体に先行きがとても不安な気持ちで暮らしている。」（70代以上女性）

「子供が小さい（当時9才、5才、3才、1才）ので避難している時に先が見えない状態が続いている間にも成長してしまうため、どうしてよいか判断できないことが辛かった（今も）。」（40代男性）

「子供達がこれからどんな生活をしていくのか先が見えないので心配である。県外に避難したいが職業を捨てることもできず、子供たちに負担をかけているので申し訳ない。この震災で一番苦痛を味わっているのは子供達だと思う。一生消されることのない恐怖感をもって生活してい

なければならない。どんな影響が出るか、常に考えて生きていくことになる苦痛をどう乗り越え行けばいいのか見通しが見つからない。どうにかしてほしいです。」（40代女性）

「すぐに戻れると思い、バック1つで避難。避難先の津島が一番放射線量が高い所だったとは辛い。避難先の都会生活は、年寄りにはせわしすぎて住みよい所ではない。避難先の仙台も、水道・ガスが使えず、大変な毎日だった。事故前は、家族そろっての生活だったのに、息子夫妻は仙台へ、孫はアパート暮らし、私は東京とばらばらの生活。住み慣れたあの町あの家で、もう一度家族そろって暮らしたい。隣近所の人たちとお茶を飲んだり話して笑ったり、当たり前前にできていたことができない悔しさがある。最後は、ご先祖様のいる浪江町の墓に納まりたい。」（70代以上女性）

「一緒に暮らしていた子や孫が現在は他県で暮らしている。将来は一緒に住みたい希望がある。しかしどこに住居を構えたらよいか見当がつかない。以前のコミュニティも大事にしたい。孫が来年小学1年生になる。学校の選択について悩んでいる。」（60代女性）

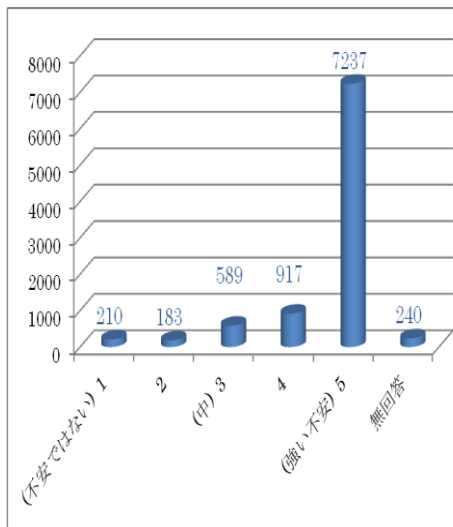
「両親が働けず、私が浜通りと中通りを往復する生活。事故前は車の運転などほとんどしなかった私にとって、長距離運転は大変な苦痛です。家族は帰町を希望している為、一時帰宅のたびに荒れ果てる家を見ると、病人を抱えてこれからどうやって生活再建していけばよいか夜も眠れません。疲れて仕事もあまり手につきません。別世帯の家族、親戚、友人、近所の人々に会いたい。見つからないペットに会いたい。自宅の広いベッドでぐっすり眠りたい。」（40代女性）

子どもからは、以下のような記載もある。

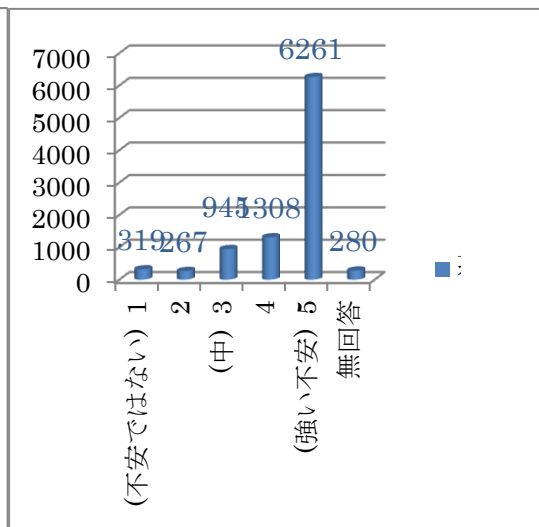
「学校の転校を2回もしたこと。自宅では将来音大に行くための練習を毎日していたが、避難後はピアノを設置する部屋もなく、また、練習もできないため、自分の夢が実現するにほど遠くなってしまった。この現実をどう受け止めるか自分の感情をセーブしながら生活していかななくてはならないこと。」（20歳未満女性）

ウ 以下、先の見通しが見つからない不安による精神的損害（質問6-6）に関するグラフである。

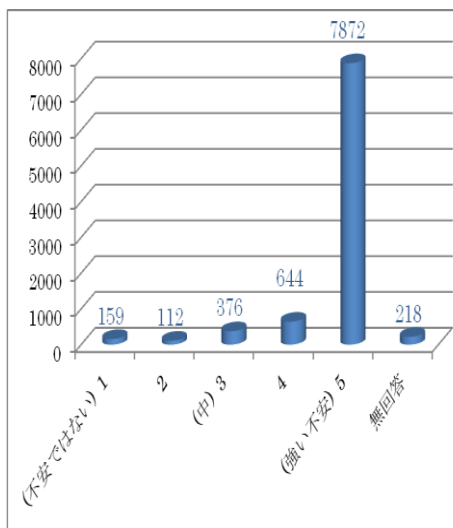
**6-6① いつ帰ることが出来るか、
本当に帰ることが出来るのか不安**



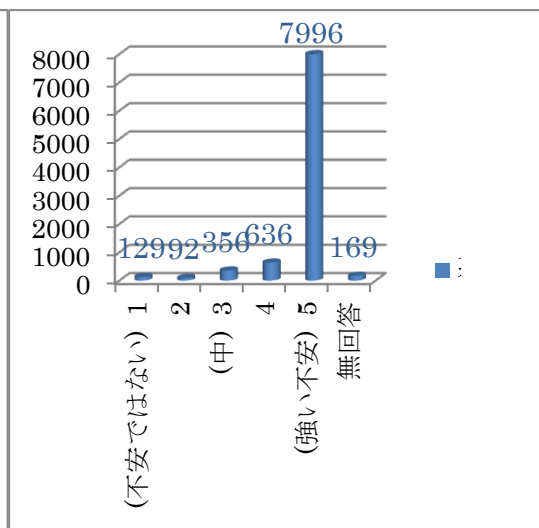
**6-6② 浪江に戻っても、又は避難先でも隣
近所と支え合い楽しく暮らすことが出来るか**



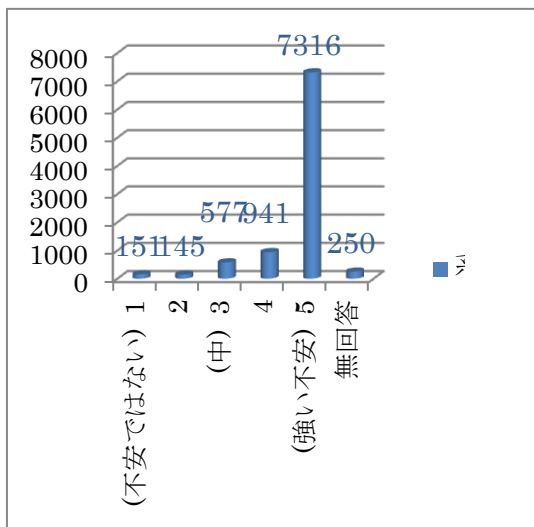
**6-6③ 安全に暮らすことができる線量まで
除染されるのか不安**



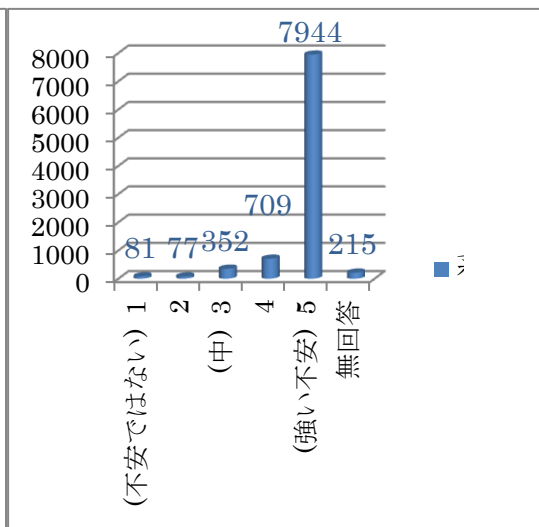
**6-6④ 原発の廃炉までに、また事故
が起きないか不安**



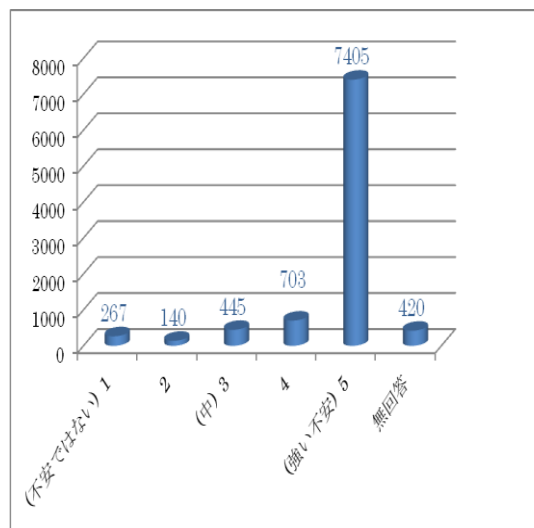
6-6 ⑤ 中間貯蔵施設、最終処分場の建設
や安全性に不安



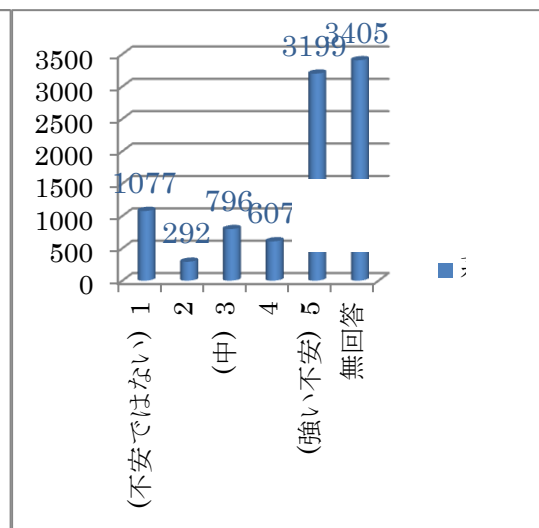
6-6⑥ 避難先などでの生活再建に向け
十分な賠償金が支払われるのか不安



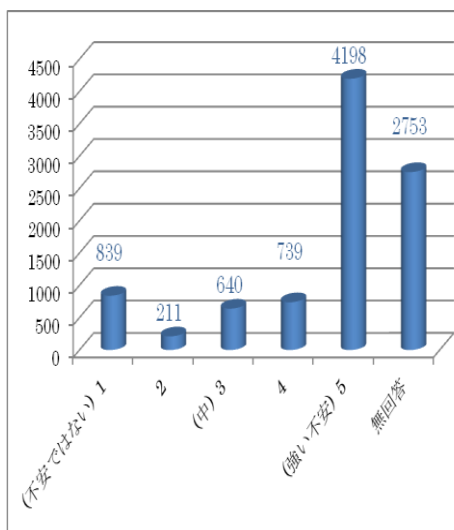
6-6⑦ 仮設、借上住宅等にいつまで住む
のか、いつまで住めるのか



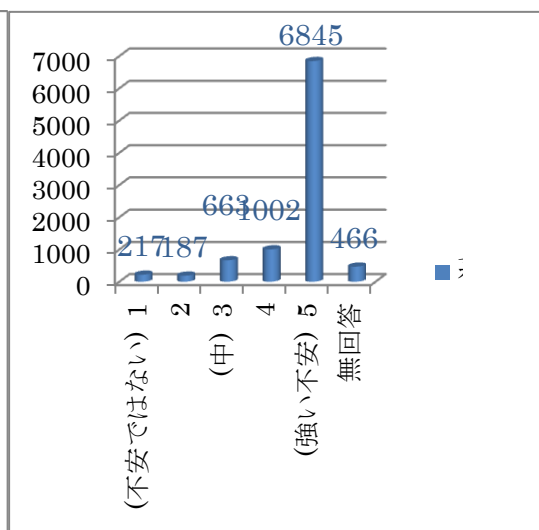
6-6⑧ 自分の就学・進学先、就職先を
どこにしたらいいか悩む苦痛



**6-6⑨ 子(孫)の就学・進学先、就職先を
どこにしたらいいか悩む苦痛**



**6-6⑩ 生活(人生)設計が狂い、これから
どうすればいいのか困惑する苦痛**



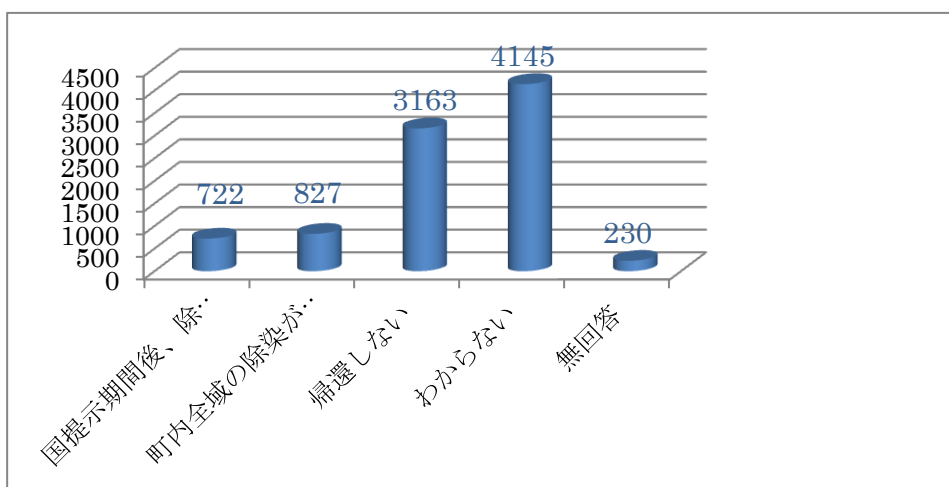
7 帰還の意思

質問 7 は、帰還の意思を確認するものである。

(1) 帰還の意思の有無 (質問 7-1)

7-1 では、「国が示している期間後に除染が完了したら帰る」とする者は、722 名とわずか 7、9%であった。また、「除染にどれだけかかっても、町内全体の除染が完了した時点で帰還する」も、やはり、827 名(9.1%)にとどまっている。他方、「帰還しない」と断言する解答が 3163 名 (34.8%) と、ほぼ 3 分の 1 にのぼっている。また「わからない」が 4145 名と 45.6%と半数近くのにぼる。

7-1 浪江町にいつかは帰還するとお考えですか



これらからわかるのは、多くの住民が、国の発表はもちろん、客観的にも除染可能性、すなわち放射能の影響の除去の可能性について、大きな不安を抱えている実態、またコミュニティとして機能するだけの条件が整うか、帰還までの間の家族の生活、家族の健康や将来設計などに不安を感じ続けている実態であろう。

また、3分の1の住民が「帰還しない」と明言していることは、除染がもし完成したとしても、町としてのコミュニティ機能の回復には困難が伴うことを意味している。「除染が完了したら帰還する」に回答せずに、「わからない」とした回答の多くは、こうした現実の1)放射能汚染の除去可能性への疑念、2)コミュニティ回復の可能性への疑念、3)家族の生活や健康、家族の将来設計と、希望としての長年暮らしてきた浪江への愛着との間での悩みと苦痛の表現と言えるかもしれない。

この悩みを裏付けるものとして、アンケート自由記載欄には、たとえば以下のような記載がある。

「震災や原発事故後は家に帰れないのが辛かったけど、今では浪江に帰るか帰らないか悩んでる事が辛い。」(60代男性)

「子どもが学校になじめず、毎日朝と夜と夜中に泣いていました。その時は、子どもはどうして浪江に帰れないのか・・・大人のことを『うそつき』と全く信用してもらえないときがあった。浪江にいた時は、学校が大好きで、勉強も大好きで、明るい子だった。今は少しずつだが、学校にも慣れ始めているが、浪江の話をする時、辛いのか、あまり浪江町の話の話を聞きたがらない。それに、ニュースとかでも、避難者の車にいたずらや嫌がらせをしている人がいるようで、この町にいるのが、少し怖い。子どももいじめられるのではとても不安で、子どもには、浪江町から来たことを隠すように言っている。とても悲しい。人によっては、色々な考えの人もあるし、賠償金をたくさんもらっているってことから、ねたみなど思っている人も少なくないと感じている。なので、私も、この町に来てから対人恐怖症になったように思う。浪江に帰りたいのと、子どもを思えば、浪江に帰ってはいけないのと、色々な思いで生活している。」(30代女性)

「避難先で新たに就職した勤務先で浪江の現状について聞かれた際、横から別の同僚が「あそこはもう日本じゃないからパスポートがないと入れないんだよ」と言われた。冗談では済まされない無神経な言葉に腹立たしさを感じた。」「他県の友人や知人からは簡単に「もう帰れないん

でしょ？」と言われることがある。私は当然帰りたい気持ちはあるのに、はっきり言われて腹立たしい。」（30代男性）

「高齢の方は皆故郷に早く帰りたいといっていますし、近くに住んでいる知人の親さえも浪江に帰って死にたいといっていたそうです。その方は96歳で最近死にました。私も高齢なので毎日家の仕事のこと、体調のことなど考えながら暮らしています。もう180度人生が狂いましたのでどうしようもありませんがせめて4年後には元気に故郷浪江で暮らしたいと思いますので、下水道の方早くお願いします（涙ながら書きました）。」（70代以上女性）

「放射能あっても帰してください。人生の終わりになって残念。」（70代以上男性）

「為すこともなくその日暮らしで前途に希望なく、くらやみの道を歩くような毎日、腰痛から諸痛発生し、果ては生まれ故郷にも帰られぬことがはっきりし、先祖の墓地も棄てざるを得ない状況におちいったこと実に残念。山梨水明のふるさとを奪ったものは誰か。復興の声は高いが何年後になるのか不明。鬼となって帰るしか道はないのか。ひざを痛めて歩行困難な妻と共に天を仰いで嘆くのみ。」（70代男性）

「知り合いがない。町まで遠い。買い物が不便。隣近所の音。母の介護が必要になった。浪江にいれば、介護が必要になることはなかった。母は浪江のことばかり言う。全部が辛い。家があるのに帰れない。ふるさとに帰してほしい。」（50代女性）

「浪江の家に戻っても前の生活ができるかどうか生きている間どうなるか心配である。早く帰りたい。一部破損が甚だしく住む事は諦らめている(内部)。」（70代以上男性）

「息子・孫と会えない。遠すぎて家にも帰れない。妻が身体障害者であり、介護に苦勞している。家に段差がかなりあり、苦勞している。浪江町に数年後に戻るとなると、新しい生活を始めることになり、不安が募る。ここに住まざるを得ないのではないか。」（60代男性）

「福島に移動したい気持ちは有るが、小さな子供がいるため線量など気になる事が多くてなかなか帰ることが出来ない。」

高齢の祖母が福島の仮設住宅に住んでいるが、遠方のためなかなか会いに行けず、また事故後体調が良くないと言っているので心配だ。浪江に住んでいた時は週に1回は必ず会っていたが今はそれが出来なくなってしまった。今はまだ浪江に帰るといふ気持ちが有るが、避難先での生活が長引けば長引くほど帰るに帰れなくなるのではないかという不安が有

る(子供の学校、自分の仕事等で)。最近、風邪など体調をくずす事が多くなった。」(30代男性)

「今もなお、浪江にある実家には住むことができない。誰も住んでいない我が家はどんどん荒れ果て、虫の死骸やカビで帰宅できても、住める状態にはない。これから先、どこへ家を構えたらよいのかと、不安ばかりが募る。誰も住んでいないにもかかわらず、住宅ローンは残っており、今も払い続けている苦痛と負担は大きい。」(20代男性)

「9回もの昼夜、夜中に風雨、雪、霧の中の避難。寒い体育館に段ボールに少ない毛布、灯油が少なく寒いのに夜9時になると暖房がストップして本当に寒かった。初めてのスクリーニングで自分たちの家族だけ針が振り切れ、担当者が上司を呼びに行ったときの周りの目が苦痛だった。隣の部屋の声、音も聞こえ、自分の家で生活とは比べものにならない生活。このころ、血圧糖尿の値が高くなり通院している。借り上げ住宅でも今までの隣人、親類、友達が遠くなり、電話代、ガソリン代がかかる。家族、孫が遠くなってなによりさみしい。家があっても帰れず、住めず、とにかく精神的に弱くなってしまふ。生きているうちに帰ることができるのか心配。冠婚葬祭に行くだけでも遠く全て金がかかる一方、義理も大切にしたい。」(60代男性)

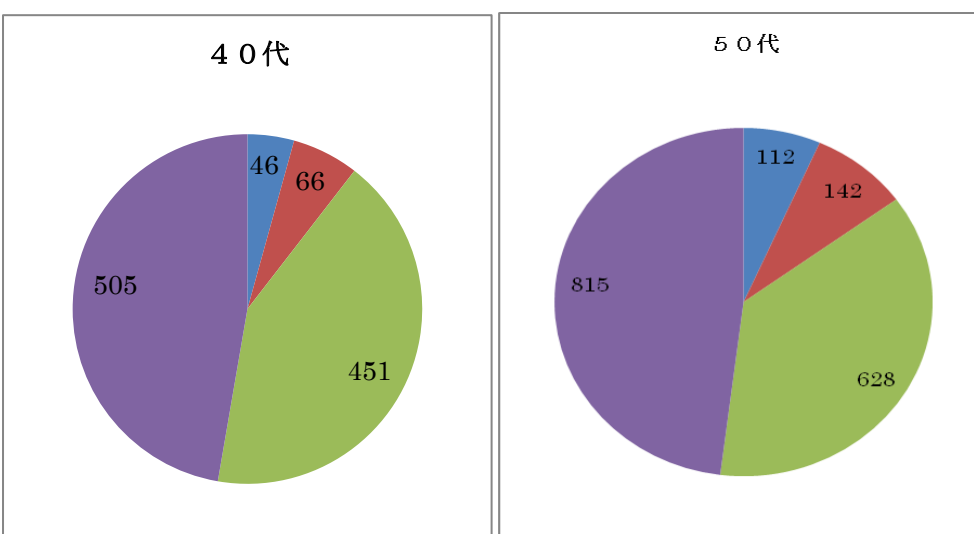
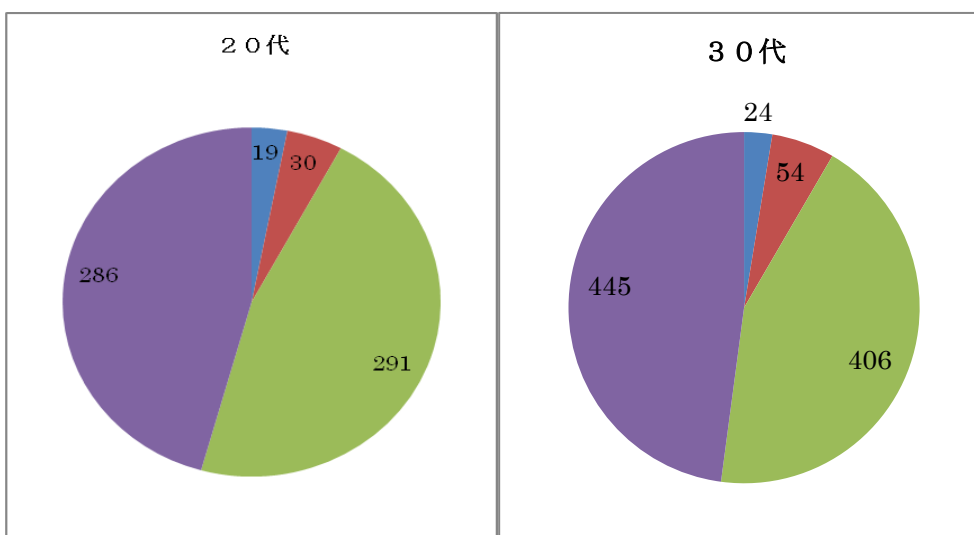
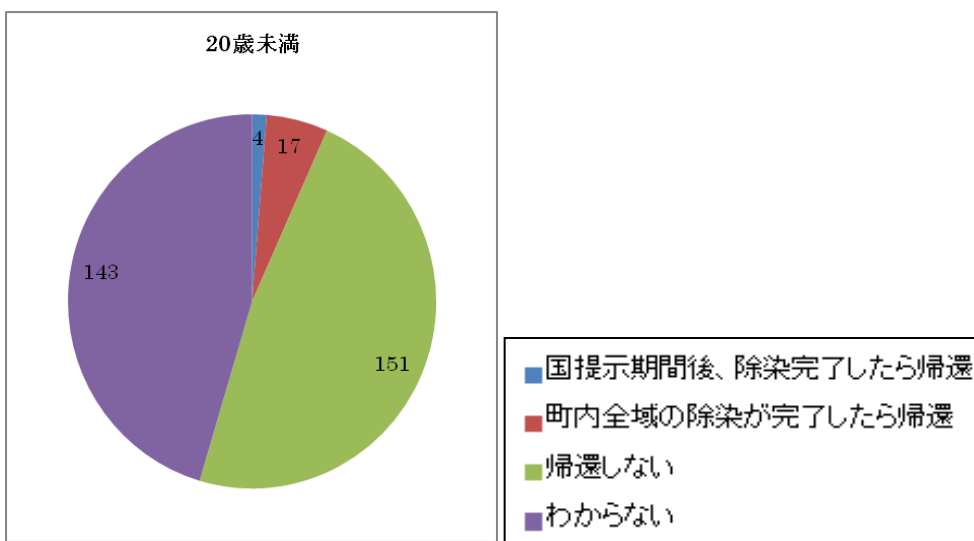
「私たちは幸せな日常を強制的に奪われて普通の暮らしができなくなりました。それに加えて放射能というこれまでに例を見ない恐怖に見舞われている。将来がとても心配で不安な毎日を送っています。娘が将来結婚できるのか、または出産したときの子供に不安があります。それに住めない家のローンはなくなりません。津波被害にもあわず、地震でも壊れなかった我が家のローンが重くのしかかってきます。帰還困難区域ですよ、誰のせいでこんなことになったのでしょうか。その普通の幸せを奪っておいて東電の態度は最悪です。支払いはしないという有様です。また、私は自分で稼いだお金で井戸を掘り天然の安全な水を飲んでいましたが、それを奪い、庭の植木もイノシシにやられてしまい、帰宅するたびにがっかりする毎日です。まだローンのある家は、カビが生えて鼠がいます。田畑は荒れて再生は不可能でしょう。父も母も高齢です。仮設住宅では死にたくないと訴えています。我が家で死にたいというのです。我が家の娘は、避難後学校に行けなくなってしまいました。津島の中学校に行きたいと泣くのです。毎日娘が心配で目が離せません。もし自殺なんてされたらと思うと生きた心地がしません。」(40代男性)

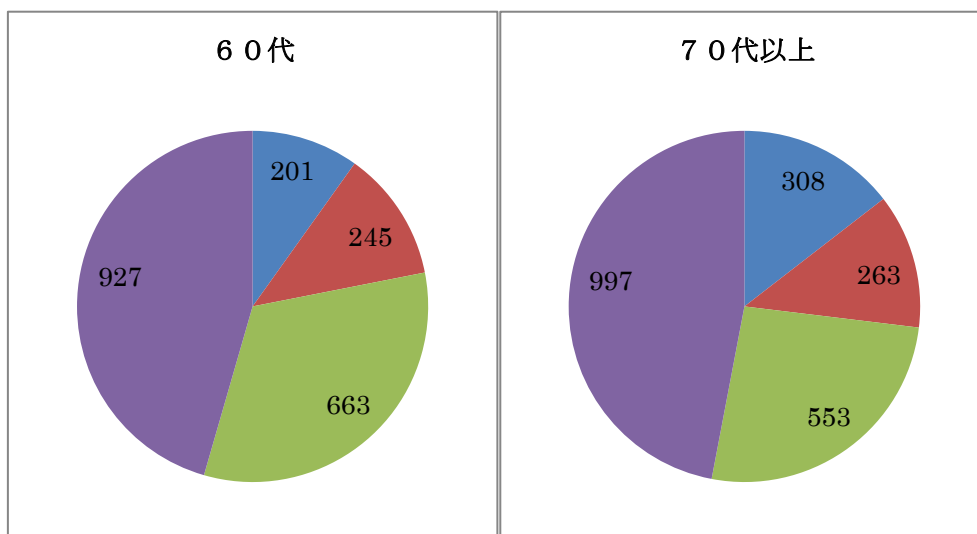
「夫は仕事で県内に残り、86歳の義母と避難。3月末～5月末にかけて、国立の自然の家に避難したが、青少年研修施設のため、コンクリー

トの階段、移動距離が多く、義母が寒さもあって体調を急激に崩した
こと。トイレのたびにコンクリートの階段を何段も昇降し、特に夜中の回
数も増え、足元もおぼつかないので、おむつの使用を始めたが売り切れ
状態。平面移動は車いす。食事のみ目を覚ますが、後は寝たきり。13
人1部屋の中でみんなに気を遣うし、このまま息子や娘もいない嫁と二
人で逝ってしまうのではと心配したことが忘れられない。休みのたびに
夫が面会に来たが、そのたびに当初はスクリーニングを受けて、十分な
時間も取れずに帰るので、余計に義母が気落ちしたこと。元の暮らしや
先のことを一言も話せず、耐えながら厳しい表情で寝ているだけの様子
を隣で見ているしかなかったこと等。孫たちを浪江には連れて(今後も)
いけないと言われ、帰還しないと決め、帰還をいずれはしたい夫と意見
が対立すること。借り上げの生活で自分の本当の居場所ではないと平常
心ではいられないこと。現居地に引け目を感じること。」(60代女性)

なお、帰還意思に関する回答を年齢別に整理したものが、以下の円グラフである。
これを見ると、「わからない」(④、グラフでは紫)としている回答は年代別にそれ
ほどの差異はないが、「帰還しない」(③、グラフでは緑)と決めている層は、若い
世代ほど多く、逆に高齢層ほど、(除染が完了したら)「帰還する」(①・②、グラ
フでは青と赤)が多くなる傾向がはっきりと現れている。

Ⅲ-3-1-2 年齢と浪江町への帰還意向のクロス表(年齢別円グラフ)

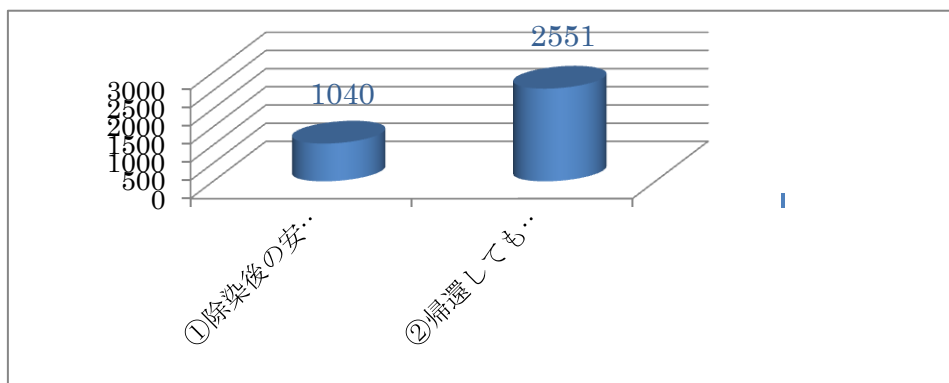




(2) 帰還しない理由 (質問7-1-1)

質問7-1-1は、帰還しないと回答した者にその理由を確認したものである。ここでは、「除染後の安全性への不安」と、「帰還しても元の生活が送れない」という項目を立ててどちらかを選択させる形で質問してみたが、「元の生活が送れない」との理由が「除染への不安」を示す解答を大きく上回っており、除染されれば帰還できるといった単純な論理ではなく、今回の事故により生活環境やコミュニティ自体が破壊され回復不能と思われることが、大きなウェイトを占めていることがうかがわれる。

7-1-1 帰還しない理由



帰還しない、できないという回答者からは、以下のような声がある。帰還は単純に自分だけで決められる問題でなく、他の世代の帰還、コミュニティの再建、インフラの整備、そして除染の問題等が複雑に入り組んでいることがわかる内容となっている。

「原発事故による浪江町内の自宅を失ったこと、夫の病気が重なり、絶望の一言です。また、夫が病気のため、避難先の選択、アパート探し、学校、幼稚園の転校手続き、役場や東電への書類の作成・提出等、ほぼ一人で判断し行う必要がありもう疲れしました。また帰町できる年数、5～6年を待つことは、いくらインフラが復旧したり除染が進んでも現実的には不可能です、理由は子供たちの学校生活を落ち着かせてあげたい、自分たちの職場の移住など、浪江町内への帰町はもう不可能です。現在の避難先、いわき市内、学区内に移住し、落ち着いて、生活を再建せざるを得ません。」（40代女性）

「浪江町には帰還したいが、若い世帯が戻らなければ、戻りたくても、戻れない。」（50代女性）

「帰ってから、コミュニティーが作れるのか。」（30代男性）

「浪江町にはもう戻れない事に関しては心の傷はとても深いものです。たとえ戻れる日を迎えたとしても、その時はもうすでに避難先での生活が整っている状態です。生活もままならない、学校教育も万全ではない、地根から再び蒸しあがるセシウムなどの危険もある、自然と触れ合いのびのびした育児を望めない、そんな土地に子供がいる世帯はほとんど戻らないと思います。不安を抱えながら、毎日生活してまで地元へ戻ろうとは思いません。」（30代女性）

「一番悔しいのは、故郷の歴史、先祖の苦労とあの見慣れた風景。川のせせらぎ、風の音、匂い…。今すぐにもでも戻りたい。けれども戻るつもりはない。あの高い山、深い谷をどうして除染しようというのだろうか？」（60代女性）

「義兄の実家にお世話になったが、自分の居場所がなく、帰るにも両親もバラバラに避難したのでそこにいるしかなかった。その後、宮城にアパートを借り、就職先をどこにするかを考えた。両親と一緒に住みたいと思ったが、浜通りは放射線量が高いので、両親と行き来しやすく、放射線量も低い須賀川市に決めた。家族のそばにと思ったが、自分の将来を考えるとなるべく被曝をしたくなかった。」（20代女性）

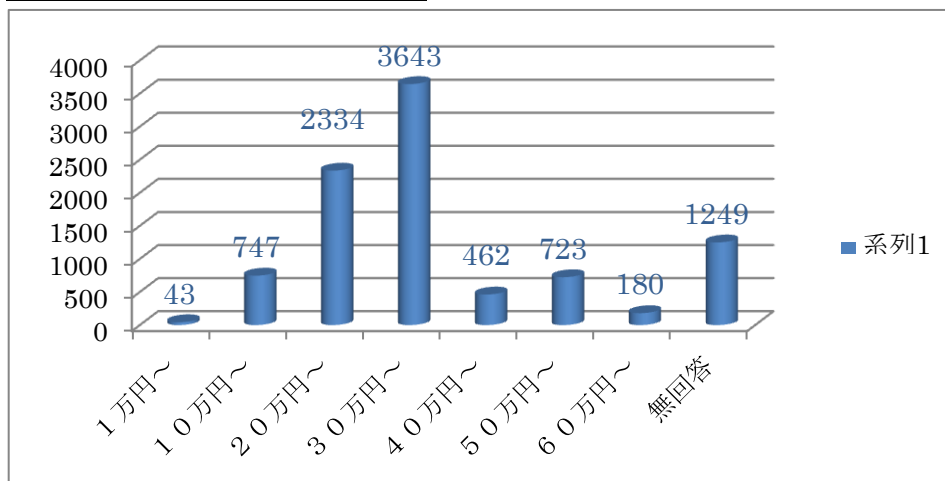
「二重生活で子供とはなれて生活しているので、子供の成長を見守ることが出来ないことがとてもつらいです。福島県から避難してきたということで、子供達が被災者ということが学校でも話題になったりしたことや、避難当初に不動産でアパートが借りられなかったり、小学校の転校をするのに5回も断られたり、市役所に行って話をすると、福島から物を持ち込まないでほしいといわれたりした。福島から避難した理由を友達に話が出来ないというのを言っているのを聞くととてもかなしくなっ

てしまう。除染をしたからもどれという国や東電の説明だけで子供を持つ親達は安心して帰還することが出来るわけがありません。子供達の将来に責任ある私達の世代は、後に病気が発症したときに子供達にどのように説明をしたらよいか分かりません。」（40代男性）

8 適正賠償額の認識（質問8）

質問8では、現在の状況を踏まえ、生活費増加費用も含めて1人あたりの適切な月額賠償額をどう考えるかについて聞いている。回答では、30～40万を適切と考える回答が最も多く、次いで20～30万となっている。いずれにせよ、今までとは激変した生活環境の中で収入が減少し、支出の切詰めに限界がある中、相当の額が生活を維持するために必要とされていることがうかがわれる。

8 適切な賠償額(1人、1月あたり)



以下のように、現在の賠償額では到底納得できないという声は非常に多い。また避難生活、それに伴う家族の離散等による生活費支出増から、現在の賠償額では生活が非常に困難であるとの声が非常に多いことに着目する必要がある。

<現在の賠償額に納得できない理由、増額を希望する理由>

「姑が避難中に認知症になり、姑が夜に何度も起きて、夜が寝られなくなった。1年6ヶ月間、夜寝つくまで2時間くらいかかっていた。先の事を考えると寝れない。会社員だったが、会社が人員削減のため、解雇になり、日中、家族と狭い部屋でずっと居るため、イライラして、家族内の口げんかが多くなり、だんだんと会話が少なくなり、今はもう、ほとんど会話がなくなった。今までの友人との付き合いも減ったり、生活のリズムが変わり、家の中でも面白くない！どう考えても精神的損害が

月10万円では不足だ。あまりにも失ったものが多い。」（40代女性）

「結婚してすぐに震災に見舞われ、夫と暮らしたのはわずか3か月足らず。そのまま今まで過ごしてきたため、新婚なのに仲が悪くなってしまった。今から一緒に暮らしてもうまくいくかは分からない。原発事故さえなければ、ここまで不仲にはならなかったと思う。収入は以前と変わらないが、二重生活のため出費も多い。1月あたり10万円の賠償では、いくらなんでも少なすぎる。」（20代女性）

「何にしても、お金の面でいろいろな方（親族）に迷惑をかけました。震災時、妊娠していて、現在の場所を出産。出費もかさみ、とても大変です。精神的な苦痛への「賠償」の額は、10万円じゃおかしいでしょう！子供の分もいただいています。地元で伸び伸びさせてあげられないことに、私は残念でなりません。子どもは何も悪くないのに、子どもにまで避難生活をさせてしまい申し訳ない。自分の子供にも、浪江町のすばらしさを伝えたかった。」（20代女性）

「高齢のため（87歳）、一人で生活することが難しい。有料老人ホーム（月25万円）の支出が辛い。」」（70代以上女性）

「家を追われ、これから先どうしたらいいか分かりません。何事も時間とお金がかかりすぎます。賠償金額にも納得できません。早く普通の暮らしがしたいです。築18年の家には借金もありました。収入が減ってどう返済したらいいのかわかりません。元の家を返して下さいと言いたいです。」（60代女性）

「住み慣れない土地と家屋においてエアコンやトイレの便座交換等補償が認められず、借上げ料も認められず、補償金10万円の中から出費を強いられ貯金も少なくなり、高齢であることもあり不安で一杯。せめて借上げ料だけでも補償してもらいたい。」（70代以上男性）

「一時帰宅の際に、朽ちていく家や風景、建物を見るとすごく切ない気持ちになります。壊れたままの建物は何時になったら元に戻せるのでしょうか…。賠償額は全然足りていない。家に帰れない苦痛は計り知れないものなので、是非賠償額UP希望します。」（20代女性）

「事故から今まで避難民ということで差別されたり、賠償をもらっていないとか色々言われストレスになり苦しんでいる。こっちは家もなく、狭いアパートで暮らしているのに他の人はうらやましがる。前の生活ができなくて苦しんでいるのにひどい話だ。これから何年こんな生活が続くのか。子供がいるから浪江には戻ることは考えられない。少しでも多く賠償してもらい家が欲しいというのが正直な考えだ。1人10万円なん

て金額1日に計算するとしれたもの、増額が望ましいのではないか。まして、子供は大人の倍の金額でなければならない。もう少し子供達のことを考えて欲しい。」（30代女性）

「狭い部屋に押し込まれて、ストレスが溜まり、頭痛やめまい、耳鳴りがする。これから先どうなるのか、先が見えない生活がいつまで続くのか分からない。住む所もない。東電からのお金もいつまでもらえるのか分からない。とても不安です。悔しいです。放射能になる前は家族皆んなで働いて、暇をを見つけては自分の畑を耕しながら生活していたのに、今は何んでも買って食べなければならないのがとても悔しいです。また今は税金、医療費が無料なので何とか生活できますが、息子も職をなくし、次の仕事もなかなか見つからないので、10万円の補償ではどうしようもないです。これから先が分からないので東電から入った金も使えないです。」（70代以上女性）

「生活費の増加分にその他を含めた10万円の補償額ではどうにもなりません。」（60代男性）

「年配2人連れての体育館での避難、それから点々と何ヶ所かの避難で、1人は施設に頼みましたが、もう1人は避難中、誰も知っている人がいない知らない土地での生活で認知症になり現在一緒に暮らしていますが大変で、自分も病気になり通院しながら毎日生活しています。周りには誰も知っている方もいないし、先のことを考えると不安です。町全体として早く補償してもらいたい。この苦しみは、実際に生活してみない人には分からないと思いますが、10万円は馬鹿にしてる!!!」（50代女性）

「どう考えてもあの時1人10万円の補償では納得がいかない。1年間は本当に辛く、ふと気付くと涙ばかり流していた。また、冬には大雪が降り、今まで経験したことのない生活の違いと天気悪さに本当に精神的に鬱になった。病気になり人に会うのが嫌になり外出もしなくなった。この時も本当に辛く悲しく故郷が恋しくて恋しくて気が狂いそうであった。」（40代女性）

「これからどうしていいか分からない、社会から取り残された。どう社会へ復帰したらよいか分からなくなった。人生どう生きてよいか分からなくなった。10万円でどう暮らせというのか？東電の人間はみな給料を10万円にすればよい。」（30代男性）

「苦痛が10万…それは低すぎにもほどがある。」（20代女性）

「見知らぬ土地を転々とし、全てにおいて不安の中で、この先どこに落ち着くのだろうかと不安・苦痛。毎日の生活の出費も大変で、賠償には問題だらけ。」（60代男性）

「親の会社は、福島第一から3km以内のため会社が移転。家族が5つに分離して5重生活をしています。生活費増加があり、10万円程度の補償では毎日が赤字になっております。」（20代女性）

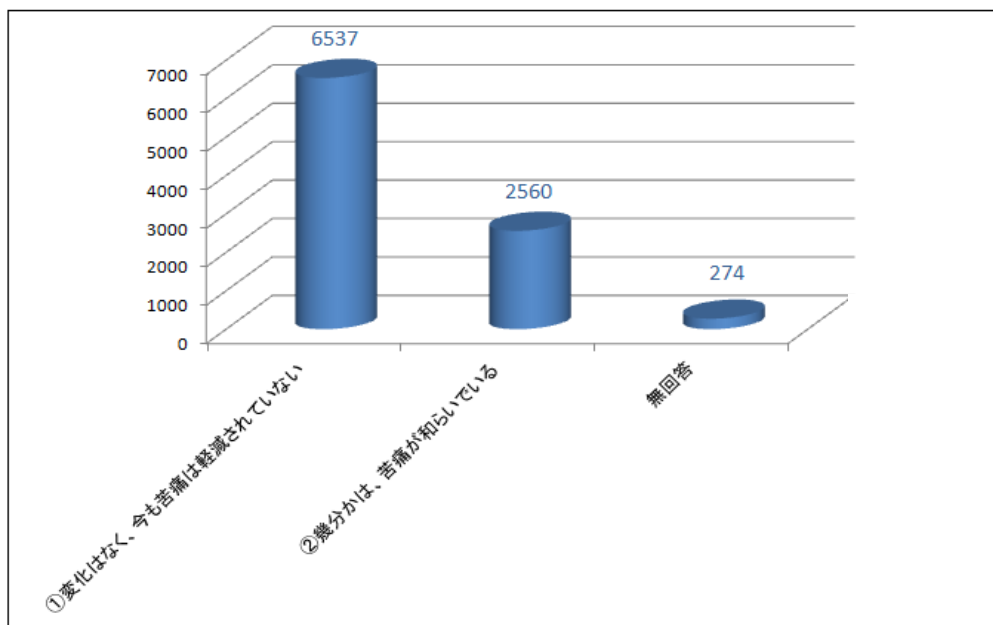
「収入は以前と変わらないが、二重生活のため出費が多い。1月当たり10万円の賠償では、いくらなんでも少なすぎる。」（20代女性）

9 被災直後と現在の精神的苦痛の変化（質問9）

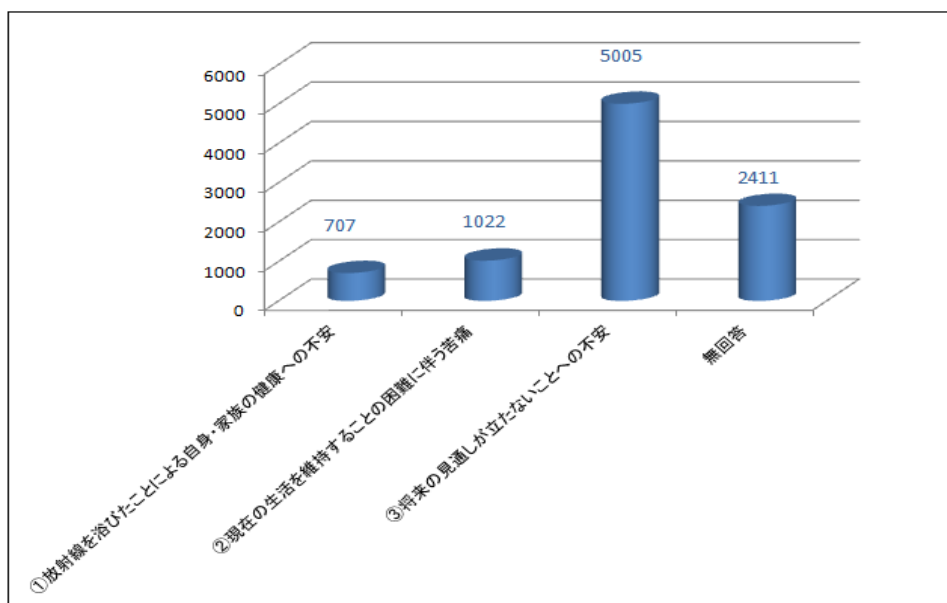
質問9では、被災直後と現在の精神的苦痛の変化及び現在も苦痛が続く場合、その内容について直接問うている。6537名（69.8%）は、苦痛は変わることなく現在も続いていると回答し、幾分なりに和らいだとの回答は、2560名（27.3%）にとどまっている。生活環境を奪われ、先の見えない被災生活の中では、当然ともいえる結果であるといえよう。

さらに質問9-1では、苦痛が軽減されていないと回答した層に、その理由を問うている。①放射能を浴びたことによる自身・家族の健康への不安、②現在の生活を維持することの困難に伴う苦痛、③将来の見通しが立たないことへの不安の3つの選択肢について、多重回答でなく、最も苦痛の強いものを選択してもらう形式で質問した。結果は、①が707名（10.5%）、②が1022名（15.2%）、③が5005名（74.3%）と、先の見通しが立たない不安を理由として挙げる者が圧倒的多数であった。健康被害の問題より、先の見通しという現在置かれている状態の不確定さに伴う苦痛を回答した者の割合が非常に高いことは注目に値する。また本問は、最も強い理由を一つあげる質問であるため、精神的不安の関わる先の見通しへの不安が高いのは当然と思われるが、それでもなお、現在の生活を維持することの困難という生活・財政上の理由を第一に挙げる回答が、15.2%に上ることにも留意すべきである。それだけ現在の生活維持に関わる困窮の問題が差し迫っている層が、多く存在することをうかがわせる。

9 震災直後のと現在の状況を比べて、精神的苦痛に変化があったか



9-1 現在、最も苦痛を感じていること



以下のように、精神的苦痛は、減少しているどころではなく、むしろ増大しているという声が極めて多数にのぼる。

<精神的苦痛が増大した理由>

「避難が長くなればなるほど苦痛やストレスが大きくなっていきます。」
(40代女性)

「先の見通しが立たず、これからどこに住んだらいいのか？仕事も何をしたらいいのか？決められず・・・避難者で仕事してないだけで周りの人から「東電の補償金あるから働かなくてもいいわねえー」みたいなことを言われたりするの、すごく苦痛です。原発事故がなければ、何ら変わらず働いていたのに。友人、知人とバラバラになってしまったし、生活全部が変わってしまった。震災後から何も変わりなく、精神的苦痛も軽減されません！」（40代女性）

「避難時津島に行かされたことは、今でもとても苦しい。自分も、小さい孫と一緒に、今後どのような形で影響するかと思うと不安。この2年以上の間、落ち着いて生活できた日がない。朝、頭が痛くなったり、体が硬くなったりする。避難していることを言うと、補償金のこと言われたり、被曝していることをあまり気にしないみたいなことをいわれたことは辛いです。」（60代女性）

「家族同様に生活をしていた飼い犬を置き去りにして避難をしてしまったことで、その後探しに行くも見つからず、今も犬の顔が脳裏に浮かび、思い出すたび後悔の思いが募ります。現在の借上げ住宅へ移る前にアパートの借上げ住宅で同アパートの住人により、物音を立てないようにとの文書の抗議文が郵便受けに投函されたり、駐車場の車両をわざとらしく離されたり嫌な思いをした。避難してから自家用車に傷を付けられました。今も直していません。傷をつけたままです（いわきNoだからでしょうか）。」（50代女性）

「家族6人1部屋で生活していたときは、ストレスが溜まり、泣くほど辛かった。家族の絆がほどけてしまうような気がした。また、アパートのため、ずっと連れていた猫何度も捨てては、また探しに行ったりしたが、今でも我が家の猫を思い出すと、胸が苦しくなる。今は仕事の都合で6畳一間のアパートに一人くらい。昔の大家族だった頃の思い出を心に浮かべることが多くなった。」（50代女性）

「避難生活の心労でアトピーがひどくなり、その薬の副作用で目が見えにくくもなり、眼底出血を引き起こし本来の治療もままならず、皮膚の状態を良く保つために医療では治せず、高額クリームや石鹸を使うことになり、サプリメントなどに頼るほかなく、出費するお金も多大です。また、私の人生設計が大きく狂ってしまいました。結婚を考えていた矢先の事故で、付き合っていた方と遠くに離れて暮らすようになり、彼の方の仕事もこの先どこへ移動、赴任させられるか全く分かりません。これからの住まいのこともまったく予定も立てられず、精神的に不安定です。また、浪江に一時帰宅するたび泥棒に入られて、書類や着物帯、時

計など大切なものがなくなります。家も荒れ果ててしまいました。心労です。」（40代女性）

「もう頑張れません。かなり限界です。強制避難により我が家族（主人と長男）は何度も壊れました。間に入って、その都度、何かと傷口を塞いできましたが、接着剤も気力も底を尽きました。次は何をしたら良いのでしょうか？今にも発狂しそうです。私の精神は完全に壊れています。2年経ったからといって、苦痛の軽減など全くありません。いつまで続くのでしょうか？こんな状態が。自分の人生を、一生を、こんな理不尽なことで終わらせたくはありません。60年近く生きてきて息をするのがこれほど苦しいと感じたことはありません。自由を奪われた人間の悲しみは、人間にしかわかりません。ただただ悔しい思いでいっぱいです。原発事故さえなければ。」（50代女性）

「津島の避難所生活における飢えと、一睡もできない寒さ、加えて放射線への恐怖『住み慣れた故郷が誰も住めなくなってしまう』という足元が崩れ落ちるような喪失感。ストレスが溜まり、家族間の諍いが始まった。言い争いから、取っ組み合いの喧嘩になることもしばしば。避難生活をして以来、はじめて心療内科クリニックに通い、軽い精神安定剤をもらい服用している（息子も私も）。朝から精神安定剤を飲む生活はここ2年来変わらない。」（50代男性）

「今までの生活ができないことで、家族関係がめっちゃめっちゃになったこと。何十年を愛情を注いできた畑・田を作ることができないこと。住みたくもない所にしばられていること。避難先で死ぬわけにはいかない。苦痛は増すばかり。」（70代以上女性）

「仮設の皆さんも同じ浪江町民ではあるが、70年に渡って築いてきた友人、知人などの絆が遠く、遠くなってしまった。親戚、知人の葬儀にしても浪江にいれば大した負担もなく行けたのに、今は福島市内も含め、二本松、南相馬、いわき、会津若松、郡山など、知らない遠距離地への移動となり、高齢者でなくても大きな負担となっている。我が農地も荒れ放題。墓地も荒れ放題、宅地も故郷も荒れ放題。生きる希望が日一日と萎えてゆくことに耐えられない。」（70代以上男性）

「避難者にとっては、生活の不便がたくさんあり、対外的にも精神的な苦痛が多く、自分で自分の命を絶つ人の気持ちが分かるような気がします。今まで感じたことのなかった苦痛を体全体で感じ、どうしていいのかが分からない。月日が経つにつれそれが増し、放射能の不安とこれからの生活の不安とで本当に苦痛の毎日です。」（30代男性）

「避難する前は、朝4時に起きて家事を全部やっていたが、今は歩くのがやっとで家事は全くできなくなり、家で寝たり起きたりしています。残念で残念でならない。」（70代以上女性）

「現在8カ所目で借上住宅で生活しておりますが、避難生活の立場であることを話せない。特に今日この頃の話もできない。毎日が苦痛です。今が一番苦痛です。早く浪江町を再生して下さい。町民、県民のことをもっと理解して欲しい。町も県も国も！もっとせいせいした所で暮らしたいです。」（60代女性）

「避難してから子供の高校合格発表があり、転学するか、合格した学校に残るかについて、親子で悩んだ。双葉郡の学校に残ったけれども、入学式がなく、学生服もなく（秋頃に支給された）、高校入学の準備も思うようにしてあげられなかった。1年年の時は福島のサテライト校に、2学年の時はいわきに集約されたため、旅館で共同生活をせざるを得なく、転々としなければならなかったことについて、子供に対して申し訳なく思っている（自分のせいではないのだが、つい自分を責めてしまいます）。避難前は仕事をしていたが、今はいつまでこの場所において、次はどこに行くか（仮の町に行くか、新居を見つけるか）分からないので仕事を見つけるにも二の足を踏んでしまう。収入が避難前の3分の1に減ってしまったが、住宅ローンもあるため、日々生活していくのが大変です。賠償金は一次金として入ったが、住宅ローンはあと10年残っているので、賠償金をローンに使ってしまうとこれからの生活が苦しくなる。これからのことを考えるとどうしていいのか答えが出ない（頭痛薬が必需品になった）。福島といわきの二重生活、主人は県外出張と家族3人ばらばらの生活で、こんな生活していいのか？と不安にある。生活費もかかり、いつまでこんな生活が続くのか心労が絶えない。正直、このアンケートを書いてても悔しさがこみ上げてきて、なんでこんな生活をしなければならぬのか涙が出て来ます。！！」（50代女性）

「散歩していたおじさんに声をかけ、世間話をしていた際、「福島も大変だあ・・・」と言ったので「私達避難者ですよ」と答えたら、顔色が変わり「福島の人？近寄らんでよ」と言われ、そそくさと、去って行った・・・私はガッカリした。放射能が怖かったのだろう・・・と自分を押し殺しました。子供にも、変化は分かるのでしょうか。親たちがイライラしたり、怒ったり、毎週のように避難先が変わって・・・急に子供が泣き出したり、髪をひっぱったり噛みついたり・・・一時期ひどかった。あれから2年が経ち、未だ何も変わらない生活がある。」（40代男性）

「避難でお世話になった親せきや旅館、避難先でお世話になった方々、よくしていただきましたが、H23.3.12から「すいません。」の連続です。お世話になっているという立場上迷惑はかけられない。自分の意見は言えないという思いが強いです。何も悪いことをしているわけではないのに、どうして謝らなければならないのか。避難後すぐに仕事をしましたが、「浪江の人はいつもパチンコ屋で遊んでいる。」「飲み屋で態度が悪い。」等々、避難者の言われ方は決していいものではなく、1年経たないうちに仕事を辞めました。これからどこで生活すればいいのか、家族はバラバラになっています。避難先の方々ともどれぐらいの付き合いをすればいいのか、地に足がついていない中途半端な状態です。こんな生活いつまで続くのか。今の賠償額は“生活費”。一人暮らしの方は足りない人もいます。精神的な苦痛（絶望感）は事故から日が経つにつれて増えています。」（40代女性）

「浪江に戻るたびに荒れていく自宅、思い出の場所・・・悲しい、苦しい、辛い。避難してから毎日同じことを考え、毎日絶望感を感じています。20数年かけてやってきたこと、夢、努力を返してほしい。」（40代男性）

「福島県から離れ知らない土地で過ごすということは一人ぼっちである。何が起きてもおかしくない状態である。放射能に関係ない人は何も思わないかもしれないが、この気持は分からないと思う。何にもすることがなく、ただ嫌な毎日を過ごさなければならない。自殺した人の気持は良くわかる。」（70代以上男性）

「家は津波で流されましたが、原発さえなかったら山側の方に家を再建して頑張れたのに、請戸で楽しく暮らしていたのに、日が経つのに連れてお墓の事や家のことが頭から離れません。苦しい。」（70代以上女性）

「80歳近くまで、働くことだけが生きがいと、朝から晩まで広々とした田畑を眺め、作物ができるのを楽しみに生活してきた。突然の大災害で、貯め込んで豪華な家を金（高齢者はローンが借りれない）で作り、ゆうゆうと、老人の部屋も2室もって、家族2世帯で楽しく生活していた。強制避難の声で、右往左往と逃げ回り、明日は帰れると信じ、他人の家に数日お世話になり、1ヶ月過ぎ、ようやく廃墟のような家を見つけ、シャワーもなく、古いトイレ、上にかぶせる椅子式を買い、毎日、大きくなった孫との摩擦が起こり、狭いところにはいられず、1人、5～8回渡り歩き、ようやく仮設に入れましたが、浪江では、誰か彼かと数人が集まり楽しい生活でしたが、今は、自分がボケるのが分かるよう

だ。若者は、仕事の関係、孫たちは、それぞれ中高と学校授業が忙しく、
来ることも少なくなり、また私が行ってもワンルームに生活していると
ころには、泊まれない。幸せな家族が、離れ離れで絆が薄くなるようだ。
一番さみしいことだ。また、新しい家は、修繕することもできず、廃墟
になってきています。家を考えると月々の賠償にも手をつけられず、今
後老後が心配だ。」（70代以上女性）

「まさかと思っていた原発事故で逃げなくてはいけなくなり、どこへ行
っていいか分からないまま逃げた。親類の家へお金もないのに食材を買
って持っていけば片付けられてしまう。そして出してくれともいえない。
また又、買ってあげれば同じ繰り返し。気を使い、お金を使い、肩身の狭
い思いをして、東山温泉のあるホテルで避難させてもらいました。初め
は同情してくれました。ホテルの皆さんも5日間ほどお世話になってい
たら、急に態度(ホテルのスタッフ、フロントの方達の目線)が変わりま
した。きつい目でらむのです。それまでは、朝昼夜3回白いおにぎり
2個と漬け物とみそ汁をいただいていたのですが、無言で何か書いてあ
る紙を渡されました。すると、素泊まりで布団なしで、1人5000円
いただくと、できなければ出て行ってほしいと紙には書いてありました。
あわてて、夜逃げするように雪の降る中私と夫、他にも相馬の方など、
そのホテルを出ました。会津若松には大熊の人達が入るから、ホテル側
としては別の市町村の人々を追い出したのだとすぐに分かりました。あ
の時のフロントの方の目は忘れてしまいたいけれど今でも忘れられませ
ん。それからどこへ行ってもいいか分からず、ガソリンも手に入らず、家
に戻ったら、また「直ちに出ろ」と警察官に言われました。また再び遠
い親類に身を寄せ、気を使い、置き去りにしたペット達のことをとにか
く心配しました。1月半離れてしまった3匹のネコちゃんを特に心配し
ました。会津若松にいたら知らない60代の女性が私に「いわきナンバ
ーだけどどこから来たの?」と言いました。私が「浪江です。お世話に
なっています。」と気を使い言葉を返すなり、「あなた達は原発の恩恵
を受けていて今まで良い思いしてきたんだからバチが当たったの」と、
また「あなたとご主人で1月20万円もらえるんだから、後20年、3
0年生きて安泰したものよ。お金もらって暮らしていけるんだから
最高じゃないの。」と言われ、傷つきました。別な場所では、「津波と
原発どっちがいいかって思ったけど、おれ達が思うには津波で一瞬で流
されていった人達、家を流された人達の方が大変だ。あんた達は生きて
お金もらいながら暮らしていられるんだからずっといいよ。宮城・岩手
の人達と比べたら、ずっと幸せだよ。」と言われました。私はどちらに

も何を言って返す気になれませんでした。心の中では「私達だって、全て失って、心もどこかへ行ってしまったような状態なのに。いつ出るか分からない病気への不安を持っているのに」と叫びました。こういう事は体験した人にしか分からないことだと思います。原発の話は、関係のない人には話す気にはなれません。」（50代女性）

「原発は消えません。私たちまで消さないでください。知らないところに追い出されて、毎日苦しみました。食もダメ、医者もダメ、家族同士もダメ、痩せて、自分が分からなくなった。体はいつも震えている感じ。あの恐ろしさは津波の力で、家が幾世橋の方に流れてくるのを見て、今もその夢に見ます。いつも追われている夢。頭から消えません。生きていることが不思議です。夜も昼も耐えられませんでした。浪江のことは何も知らずに、言葉もありません。手の打ちようのない原発に、こんなに苦しめられ、あのとき家に帰ることなく、仮設では死にたくありません。1日も早く除染など後でいいから、人間の住むところをください。バラバラになった生活は戻りません。山に追われて、どうすればいいのか、分からなかった。あの寒さ、雪、ニュース、原発さえなかったら、それなりに生きていられた。政治屋の頭を除染して、私達のことを見てください。冬の雪かき、仮設のトラブル、気が狂いそうです。知人宅におかれて、よくしてもらったけど、それが私たちには気兼ねをして毎日暮らしました。まさかこんなに仮設で暮らすとは思いませんでした。大臣さん、入居してみてください。精神的に本当に疲れました。ハーモニカ長屋に住んで、人の絆はよくわかります。楽しいとか笑顔とかそれは表面だけ。心の中は怒っているのです。早く心から笑える日が来るのを。」

（70代以上女性）

「原発により避難してきたことにより、避難先において「出ていけ！」と言われたこと。報道が偏っていて、実際のことがなかなか伝えられていないこと。生活が変わり、体調を崩すことが多くなった。避難前より医療機関へ通院する回数増」（40代女性）

「2011年3月12日津島に移動し、校庭にいっぱいあった車が毎日なくなっていくのを見ながら最後まで居続けて二本松まで行き、放射能の一番ひどい時に居続けた。二十代の娘にこれから未来に対する恐怖の念がとてもあります。何事もなく一生を終えることができることを念じます。現在、夫の仕事の都合で別居生活を強いられています。近くに知り合いも居なく、寂しい不安な生活を続けています。夜もなかなか眠れず睡眠薬をのんでいます。週末に帰ってくる夫も疲労困ぱいです。」（50代女性）

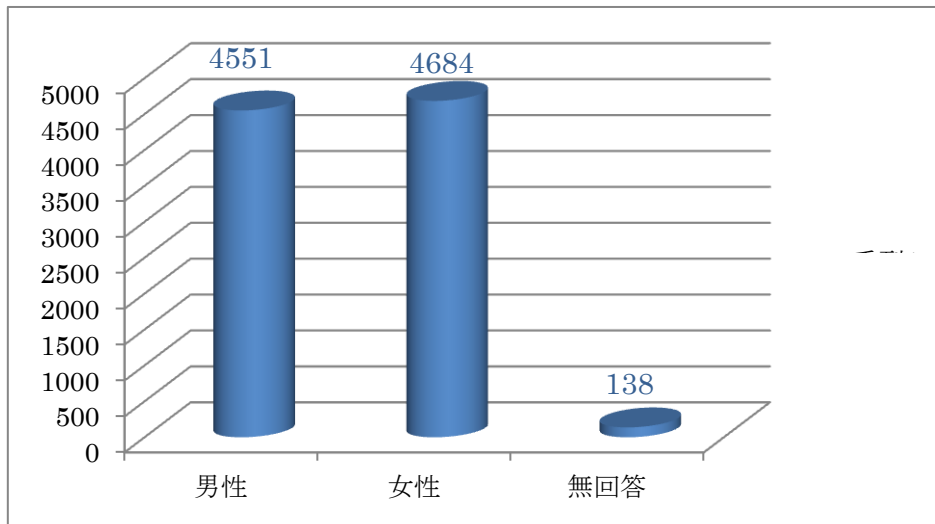
「3月11日以来まったく別世界の私達の家族。悲しくつらい毎日です。避難して妹の所へ1か月お世話になり狭い部屋での生活。妹ともギクシヤクしてしまう日々が続く、その後も子供のアパートと仮設住宅と転々となりました。心も体も疲れいつかは戻れるということを支えに今まで来ましたが、もう二年。そろそろ限界です。下の娘は高3と大学受験を控えて毎日泣きながら孤独と戦いながらも学校に通いようやく大学にも合格しましたが、もう故郷がなくなってしまったと心から笑える日々がないようです。浪江にいれば沢山の友人、おいしい新鮮な食材が何でも手に入りました。山、川、自然全てがステキなところでした。今では駐車場が遠く悩む毎日です。本当にいつまでこんな生活が続くのでしょうか。家族は3世帯バラバラになり主人は1人単身赴任という不自由な生活をしています。家族全てが苦悩の毎日です。何とか前に進めるようにして欲しいと思います。」（40代女性）

「①事故後五日間の避難所での生活において、食糧不足と寒さ、不衛生な環境によるストレス。②親せき宅での一か月半の生活に対する気疲れとストレス。③事故のため仕事を解雇されたことによる不安と苦痛。④避難したことにより、浪江の自宅に空き巣に入られたことへの苦痛。⑤生活環境が整っていない状況の中で知らない土地で働き、仕事と子育ての両立に相当苦痛を感じた。⑥避難中であることを偏見で見られることへの恐怖。⑦子どもの学校行事。知らない人ばかりで未だに苦痛を感じる。⑧頼る人がいなかった、子どもを二人抱えて一人で一から生きていくことへの不安。⑨事故後、子供の気持ちが不安定になり、相当悩まされた。⑩気持ちの浮き沈みがあり、仕事以外で人との関わりをもちたくない。また面倒に感じる。⑪仕事と家庭のストレスが増し、仕事の時間を減らした。⑫学校のいじめ、地域性も知らない。また知らない人ばかりで本当に苦痛。⑬将来設計が決まらない。目標を持ってない。どうしていいのかわからない不安。⑭最後に、現在においては、生活環境や住宅環境に不満はあるものの、仕事もあり衣食に困難はない。ただ、現在の避難先は好んでいる場所ではなく、日々、ストレスが増すばかりだ。絶望感がぬぐえず、生き地獄とさえ感じる。心が潰され殺される思いだ。精神的苦痛は、一言では表すことはできません。すべて元通りにして欲しい。その代償は、お金に代えることのできないほど大きなもの。苦痛はこうしている間にも続いている。」（30代女性）

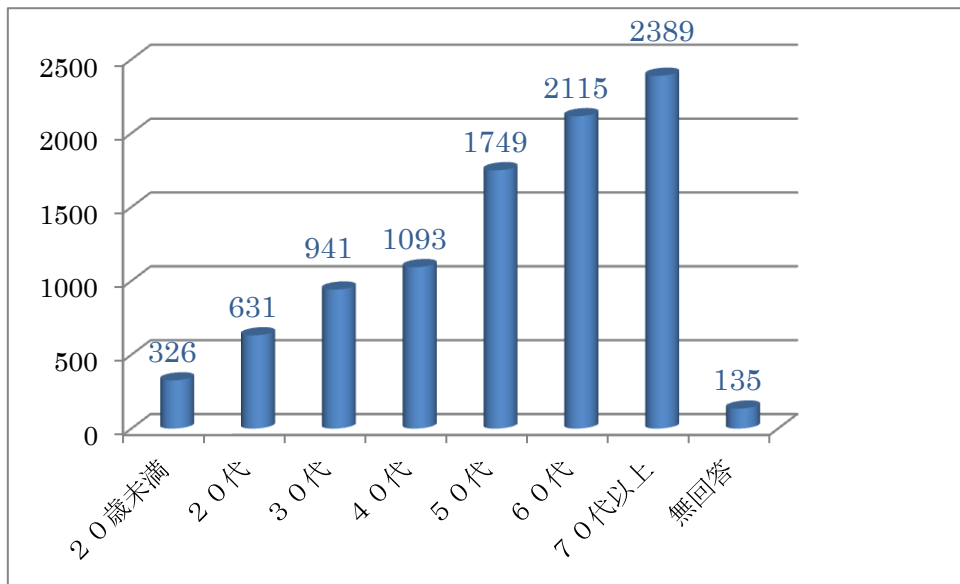
10 回答者の属性（質問10）

以下は、回答者の属性である。性別では、男性女性がほぼ拮抗しており、年齢では、地域性もあり高齢になるほど回答者が多く分布する傾向が見られる。また回答者の居住地域については、下図のとおりであった。

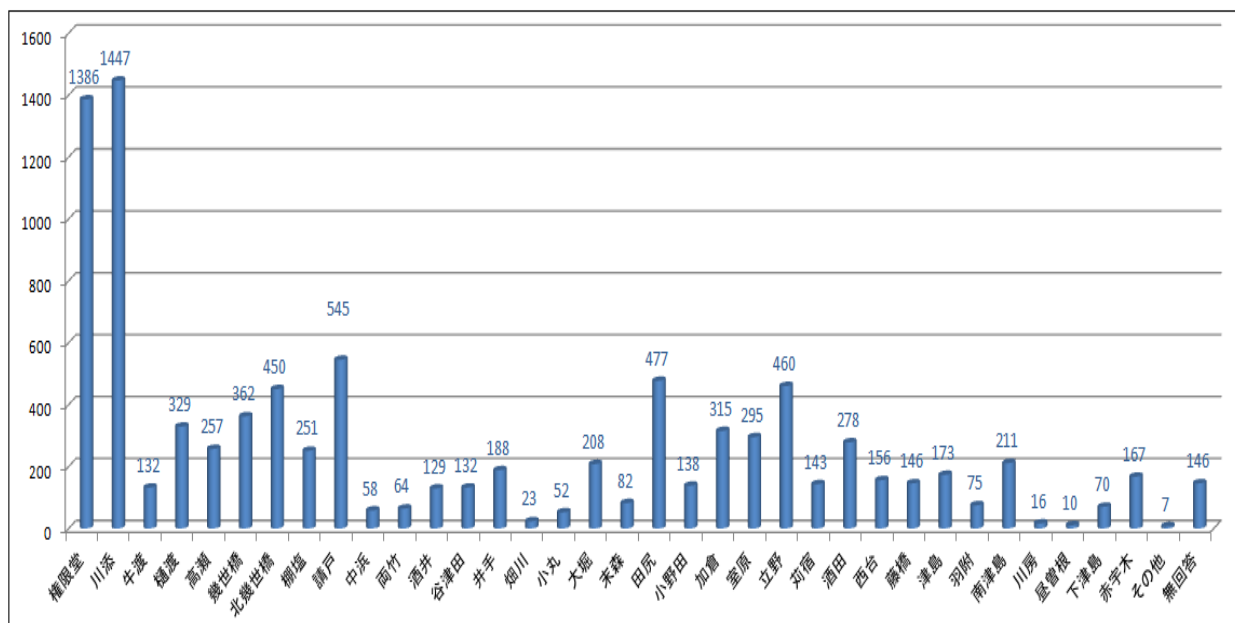
10-1 性別



10-2 年齢



10-3 浪江町のどの地区に住んでいたか



以上、質問項目ごとの単純度数の傾向について検証してきた。次に、これら単純度数の震災前後での比較による分析データについて示していく。

Ⅱ 震災前後の比較データ

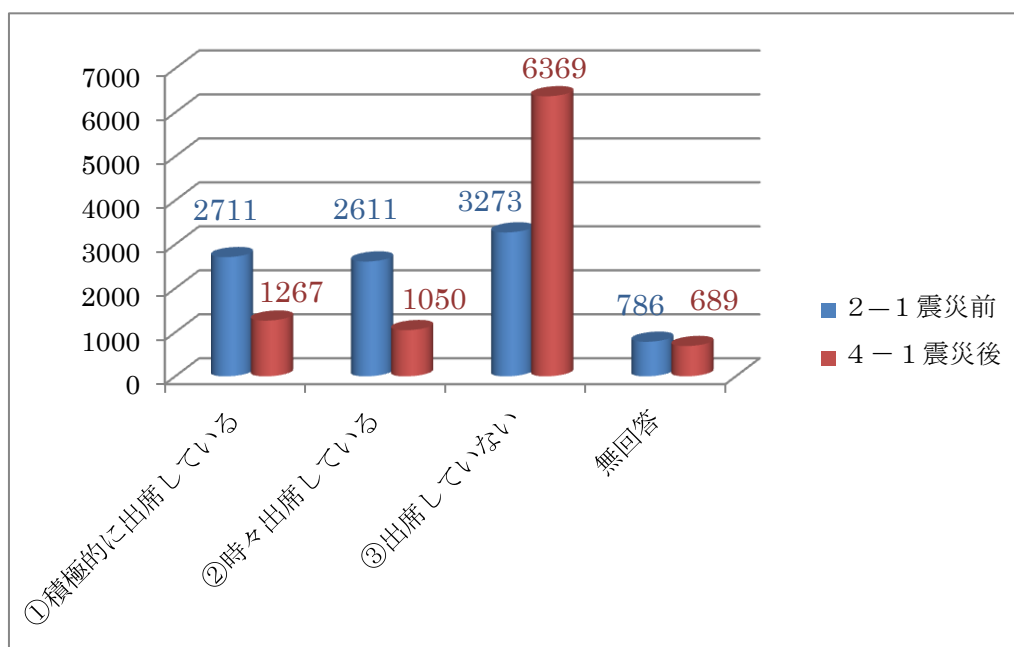
これまで整理してきた回答の基礎的度数分布を基礎として、まず、震災前後の比較を行うことで、現在の被害状況の特徴を把握することを試みてみたい。既に基礎データの整理の中で触れている点もあるが、再度、比較したグラフを示すことで、その特徴をより鮮明に把握することが可能になると思われる。

1 地域コミュニティ活動の現況と参加

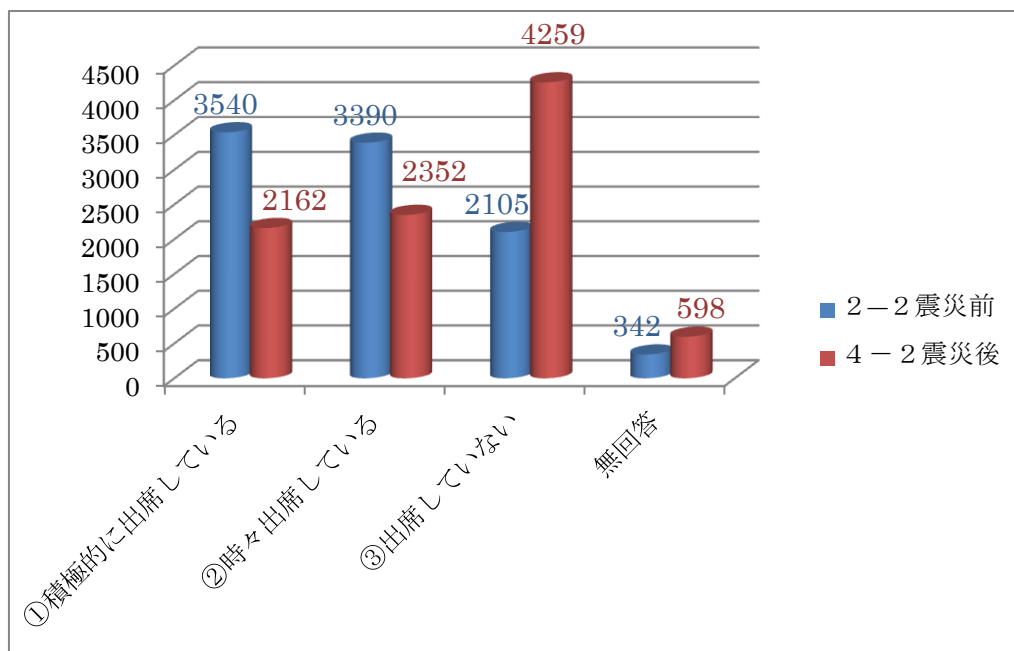
「同窓会」、「自治会活動」、「業種組合」のいずれにおいても、参加度数は減少している。

このうち「業種組合」への参加度の現象が比較的少ないのは、多くの回答者が元々業種組合への参加の対象ではないことが影響していると見るのが妥当であろう。また、このデータは、参加自体が難しくなっていることと同時に、そうした集会、活動の開催の頻度自体が大きく減少していることをも意味している可能性が強い。これらの変数は、浪江町におけるコミュニティ、社会関係が、傷つけられ、破壊されていることを如実に物語る指標であるといえることができる。

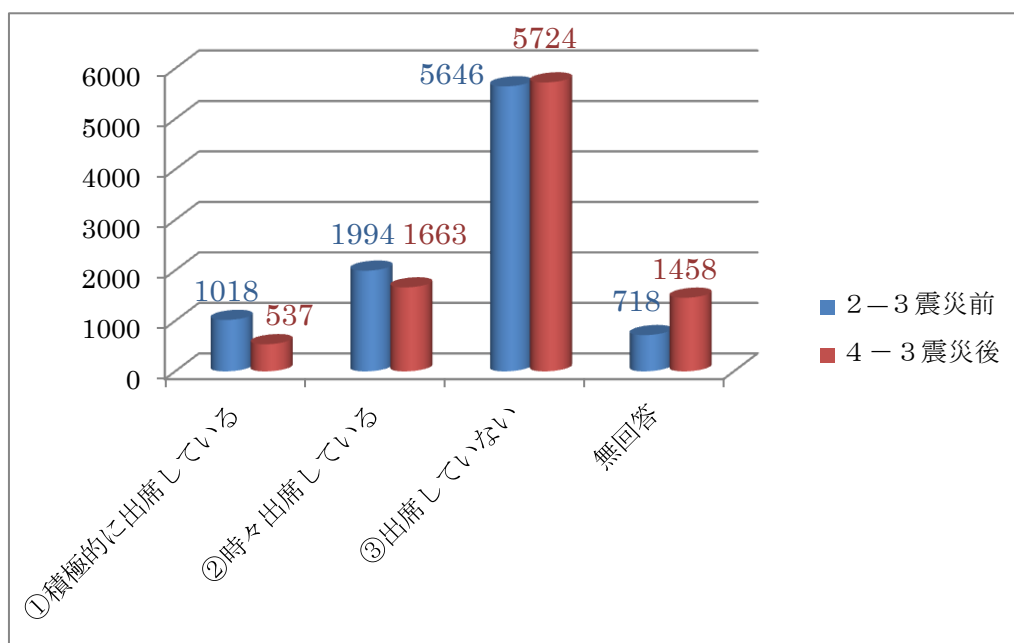
Ⅱ-1-1 中学校・高校の同窓会への参加の有無



Ⅱ-1-2 自治会活動への参加の有無



Ⅱ-1-3 商工会・農協などの業種組合への参加の有無

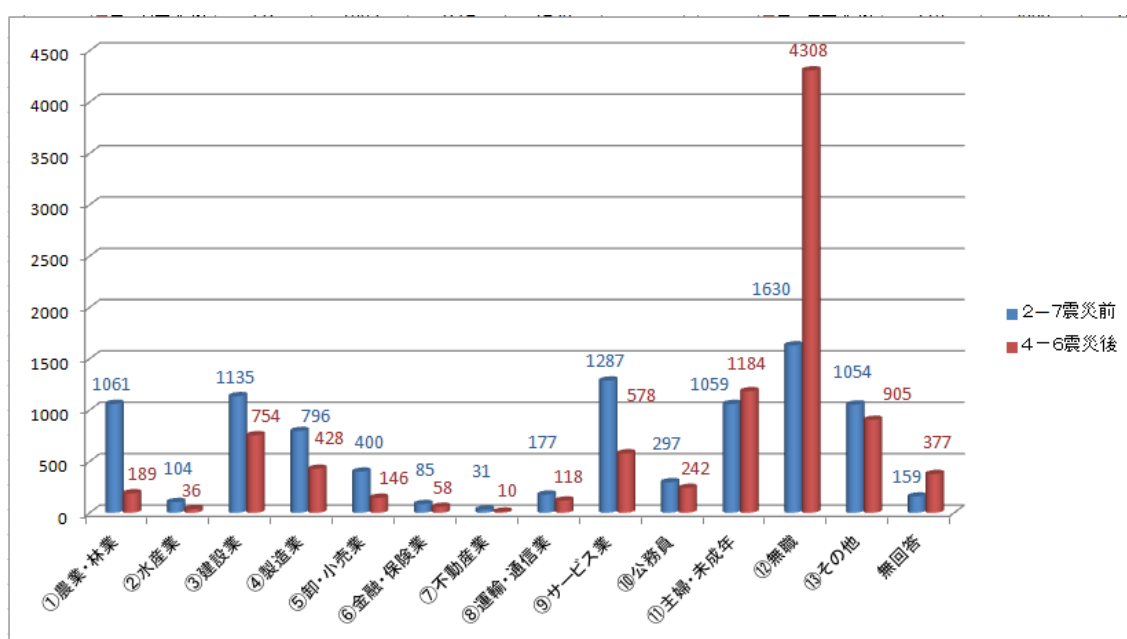


2 職業の変化

次に、就業態様がどのように変化したかを、震災前後のデータを比較することで検証してみる。

「農林・水産」の就業者数が著しく減少しているほか、「サービス業」、「卸・小売業」、「建設」、「製造」などほとんどの職種で大きな減少が顕著に見られる。その反面、「無職」が激増している。これらの就業形態の変化は、被災後に元々の生活基盤から引き離された事実から、当然に導かれた結果ではあるが、単に、従来の職業からの変化、失職による収入減を意味するのみならず、浪江町というコミュニティを支えていた製造・建設、物流、消費といった社会的機能そのものの喪失をも意味している。このデータからは、収入面の苦境にとどまらない、コミュニティ破壊の実態を読み取ることができよう。

II-2 従事している業種



なお、自由記載欄にも、コミュニティに支えられた仕事を町の喪失とともに失った町民の声が見られる。

「仕事を失ったこと。それに伴い、同僚たちとバラバラになってしまい、コミュニティが破壊されたこと。息子と遠く離れたところで住むことになってしまったこと。」（30代男性）

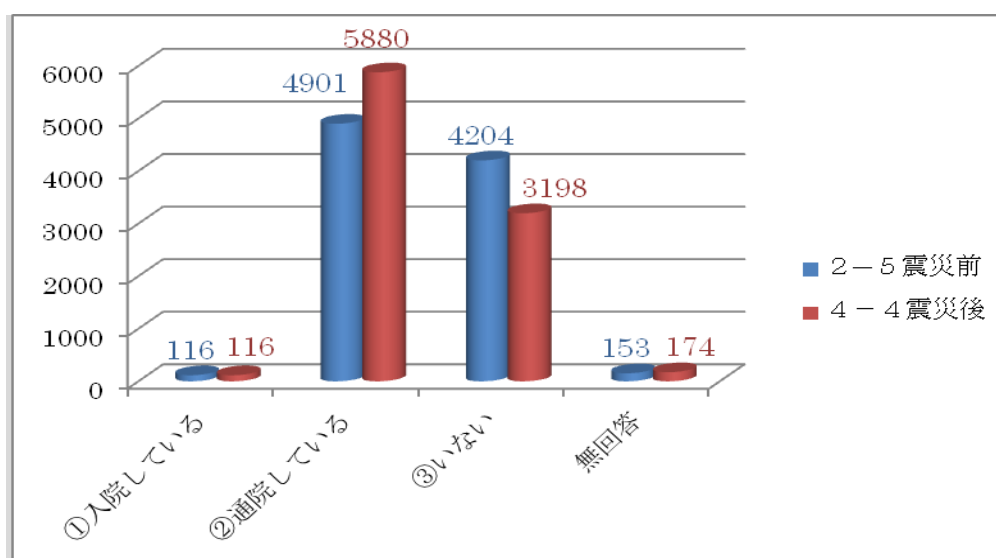
「浪江では親子で仕事をし、高校生だった息子も家の仕事を継ごうと決心し、その途の進路を考えていたものの、ぱったりその途が絶たれて、今はまだ立ち直っていない状態です。やっと一人で何とかしようと一歩を踏み出したところですが、前途多難です。本当なら夢を掴むために家から出発するはずなのに、息子はまだ夢を考えられない状態。その中でも何かを見つけるべく、一歩踏み出しました。一緒に住んでいた子供た

ちとも今はバラバラです。」(50代女性)

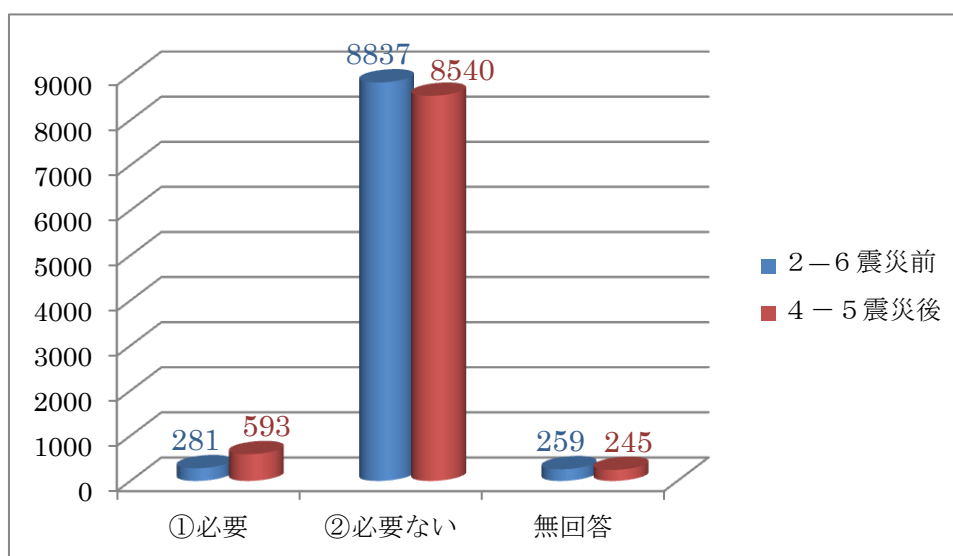
3 健康・介護

次に、震災前後の健康状況や介護の実態を比較したデータを見てみる。病院治療については、入院者に著しい相違は見られないものの、通院者が相当数増加していることが分かる。特に、治療を受けている人と受けていない人の度数を比較してみれば、震災後、加療を要する人が増加していることが、より顕著に認識できる。また、介護についても同様に、震災後に介護が必要となった人の度数が増加していることが分かる。

Ⅱ-3-1 病院で定期的に治療を受けているか



Ⅱ-3-2 介護が必要か否か



この点に関しても、自由記載欄でも、震災後に精神を病んでしまった方、避難中に怪我をしてしまった方、病状等が悪化した方などの声が多数見られるので紹介する。

「避難生活により、高齢者が避難所のトイレで転倒して怪我をしたり、避難先のホテルの食事で糖尿病が悪化したりした。父は、会社のある浜通りと中通りの往復生活を1年間続け、無理がたたったのか入院した。病院（仙台）への往復でやっと落ち着いた年寄りがうつ病を患い、糖尿も悪化、介護度が上がってしまった。」（40代女性）

「避難生活を続けているうちに、義父母が体調を崩し、寝たきりになってしまった。義父の昼夜逆転の生活、24時間介護の生活で、自分も血圧が高くなり不眠になり、それでも休みのない介護。狭い借り上げ住宅での生活、ひどい結露で除湿機を朝から晩まで何カ月も動かす生活、いつまで続くのかどうしてこんな思いをしなければならないのか、本当に悔しく残念、無念。」（50代女性）

「避難生活で病状が悪化して、父親が亡くなってしまったこと。」（40代女性）

「津波で家が流されただけでも苦痛なのに、原発事故で家の再建もできず、一緒になって避難をして、家のある人達が荷物を取って来たり、家を見に行った話を聞くのがとても苦痛でした。こんな事故がなければ2年間で今とは違う生活をしていたかも分からなかったのにそれが残念でした。避難の途中で父親は介護が必要となり、慣れない土地での生活、病院の入退院やデイサービスを受け、また避難の途中で亡くなり、口には出さなかったが、本人も残念だったと思うと苦痛でした。高齢者を連れて避難している人は普通の人より何倍もの精神的苦痛があると思います。」（60代女性）

「避難後に避難所で体調を崩し、救急車にて病院へ。そして、そのまま入院となり、持病の悪化で入退院の繰り返しで、震災前は足が不自由でも何とか自力で歩けたが、入院中筋力が弱くなり、結局車いすの生活となりました。現在もアパート二間のうち、一間は介護ベッドや必要器具で場所をとるため、片方の6畳で家族は寝起きしています。本当に苦しいものです。精神的圧迫というものでしょうか。」（60代男性）

「狭い仮設住宅でやることもなく運動不足から足腰が弱り、杖なしでは散歩もできぬ有様。持病の心臓病は悪化し通院もままならない。」（70代以上男性）

「事故が起きてから、自分たちがすべきことが分からず、原発の恐ろしさ、子どもたちを被ばくさせてしまったことへの後悔、将来の不安。」

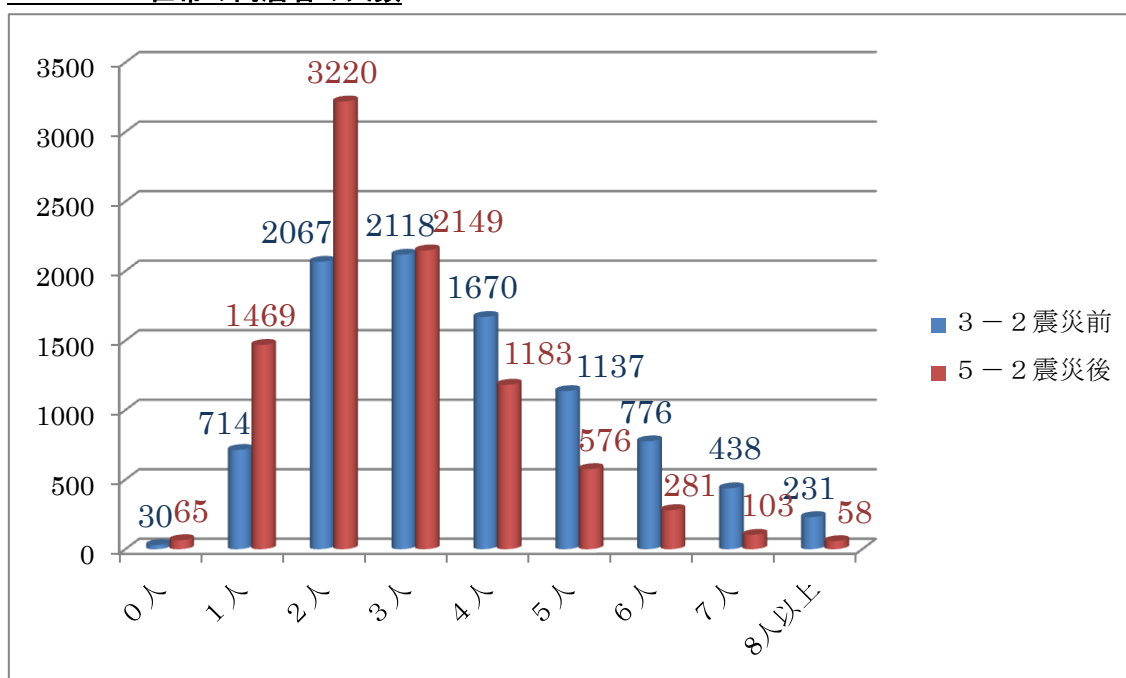
考えても考えても先は見えず、何度も避難先を移動し、浪江町に帰れない。避難所の閉鎖により、子どもの学校やアパートを探すため毎日毎日高速道路を使った。旅館では、子どもが歩いたり笑うだけで、次の日に苦情が来たりと、毎日、気が休まることはなく、外へ連れ出しては怒ってばかりだった。中学生の娘は、2度の転校により、気持もふさぎ、いじめにも苦しみ、不登校となった。私たち親も疲れてしまい、私は、避難後から不眠症になり、血圧もあがり、現在は薬を飲んでいる。目を閉じると、以前の生活が浮かぶ。現実が今も受け入れられない。周りの方には、避難していることを言えない。つらいと言えない。理解をしてくれる方はいない。」（40代女性）

4 家族生活環境

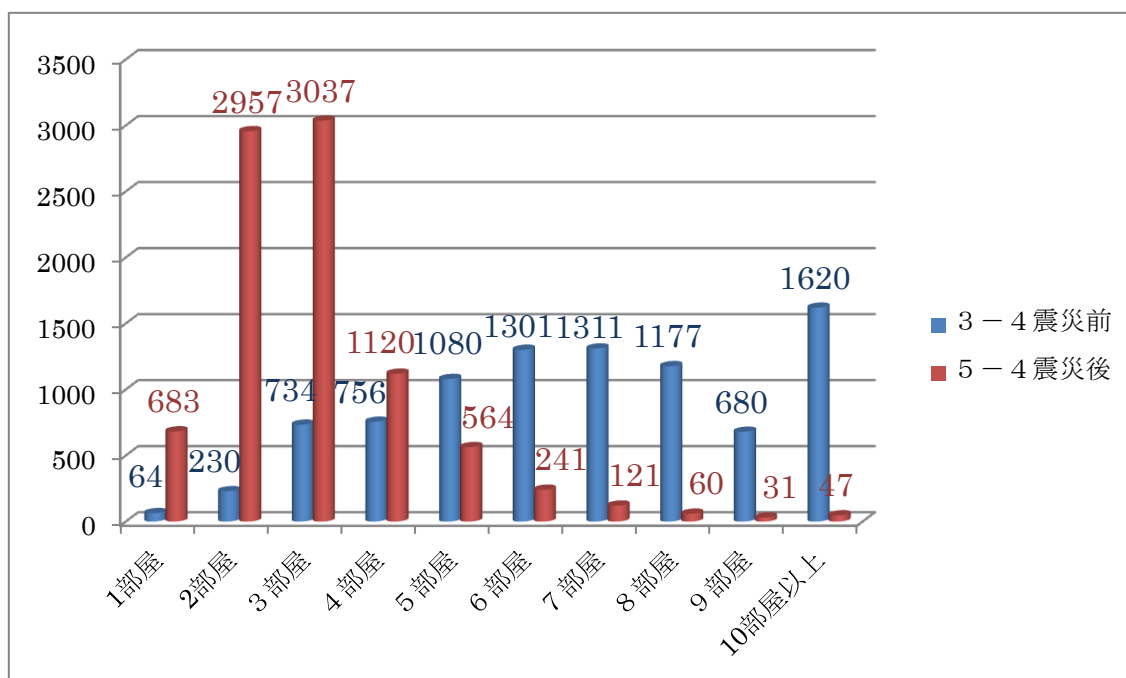
次に、家族の生活環境の変化を示す変数を検討する。同居家族数と住居の部屋数についてみると、まず同居人数については、1人世帯、2人世帯が著しく増加し、3人世帯で拮抗、4人世帯以上が減少という傾向が明確に表れている。とりわけ、高齢単身世帯や2人世帯の場合などは、生活面で困窮している可能性も高いが、そうした被害の実態がこのデータからも伺うことができる。

また、部屋数については、1部屋から3部屋程度の住居の占める割合が激増しており、5部屋以上の住居に居住する人の度数は大きく減少している。このデータは、多くの浪江町住民の住環境が、震災を境に、極めて悪化していることを示している。

Ⅱ-4-1 世帯の同居者の人数



Ⅱ-4-2 住居の部屋数



収入・支出といった金銭面での困窮とは別に、必ずしもそこには反映されない生活の基盤となる住環境の悪化という点についても、看過することはできない。また、この部屋数の著しい減少という現象は、個々の住環境の悪化にとどまらず、家族の崩壊や分断と密接に相関していると考えるのが自然である。住環境の悪化が、家族という生活の最も重要な基盤の破壊にもつながっているというべきである。

この家族の生活の破壊や、それが生活に与えた影響について、自由記載欄には以下のような声が見られた。別項目であげられている家族の分断等についての声も、密接に関連している。

「学校の転校を2回もしたこと。自宅では将来音大に行くための練習を毎日していたが、避難後はピアノを設置する部屋もなく、また、練習もできないため、自分の夢が実現するにほど遠くなってしまった。この現実をどう受け止めるか自分の感情をセーブしながら生活していかななくてはならないこと。寮生活を送ることになり、寮でも2人部屋のため、気を遣う。」(20代未満女性)

「一番辛かったのが、学校から連絡もなく、知らない土地のアパートの部屋から一方も出られず。プライバシーもない部屋で3カ月も生活していた時」(20代未満男性)

「3. 1 1 から7か所も避難してきました。今は仮設で生活しています。6人家族なので、4人と2人と別に住んでいます。学校も遠くて孫も休んでばかりいます。困っています。」（70代以上女性）

「借上げ住宅で、小さいアパートに住むしかなく、浪江では9人で住んでいたが、今は4か所に離れて住んでいる。小さい子供が居るので、福島で働いている父親や弟と離れて暮らさないといけないので、生活費が大変。」（30代女性）

「子どもたちの生活環境が一変した。友達も変わり、学校・先生方とも打ち解けるまで大変な思いをしたと思う。それでもがんばっている姿を見ているのは、本当にかわいそうで辛かった。家も、浪江では、個室があり、テレビも数台あったので、友達を連れてきたり、泊まりがけで遊んだり、楽しみを持って生活していた。借り上げは居間を含め3部屋しかなく、狭いため、上の子たちは友達も呼べない。恥ずかしいらしい。欲しい物も、置き場所が限られているので、かなり我慢させている。洋服も同じ。年頃の子どもたちにいるんな我慢を強いていることが申し訳ない。」（40代女性）

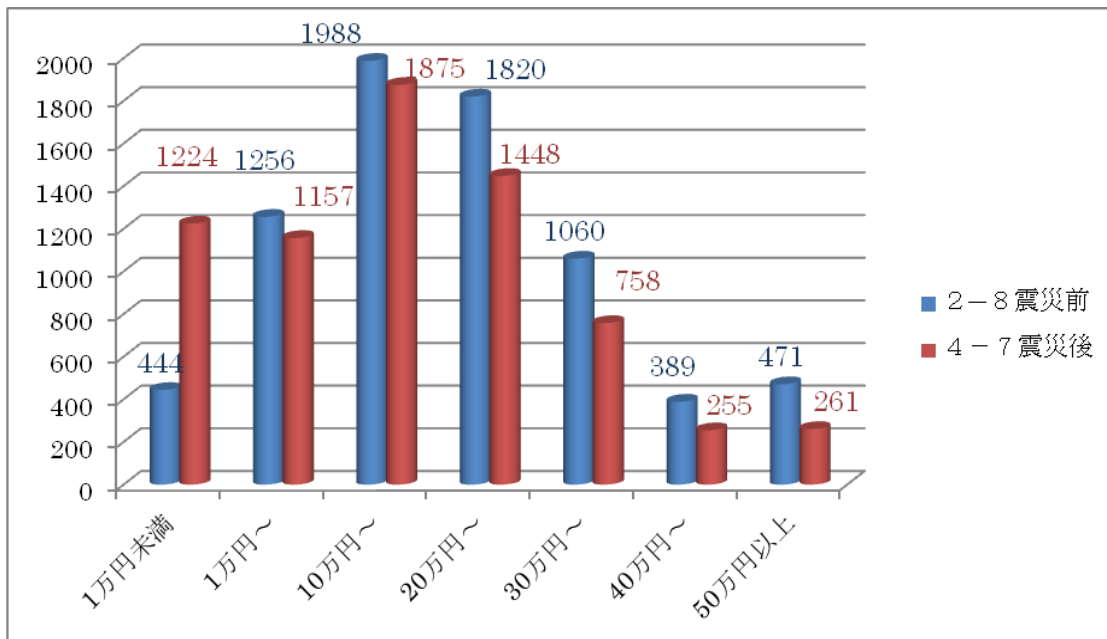
5 個人収入・個人支出の変化

最後に個人収入、支出の震災前後の変化について検討する。

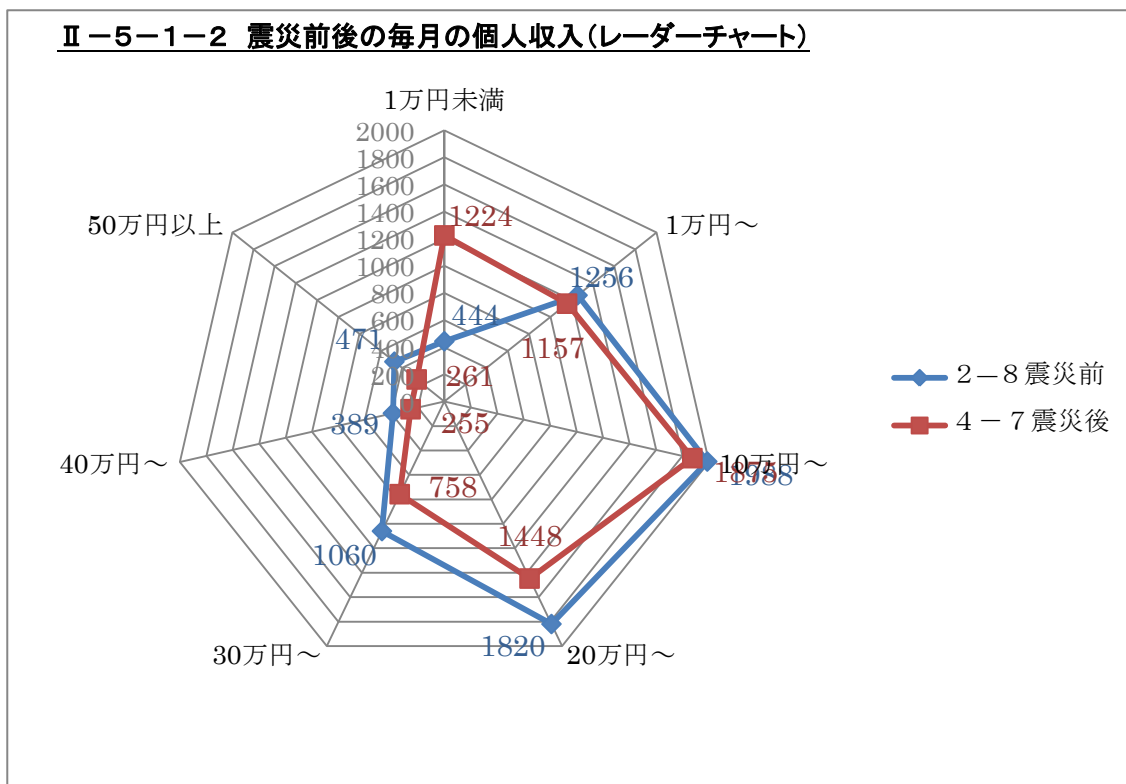
個人収入については、顕著な傾向を読み取ることができる。「1万円未満」という実質無収入に近い人の度数が顕著に増加しているほか、それ以外の収入範囲では、いずれの層も同様に度数が減少している。すなわち、すべての層で、震災前の収入を維持できておらず、震災による収入悪化の影響が存在する（ほぼ全ての層が減収傾向に平行移動したことは、レーダーチャート（グラフⅡ-5-1-2）からも明らかである。）と同時に、無収入層、すなわち生活に困窮していると思われる層が著しく増加しているという、二重の収入悪化の実態がここから読み取ることができる。とりわけ、無収入層は、精神損害の賠償10万円が唯一の生活収入となっている可能性が高く、実数では1224名にも上ることから、大きな問題といわざるを得ない。

支出は、収入に比して、震災前後で著しい変化はない。その理由としては、家族構成等に応じた一定レベルの支出が収入の変化に関わりなく必要であり、切り詰めることに限界があること、また、家族が分離している状況等の中で、切り詰めると同時に新たな支出が必要となって、結果的に一定のレベルにとどまっていること等が推認される。また、抑制された支出があっても、避難生活に伴い顕著に増加した支出もあるため、家計負担としては悪化していることも容易に推定することができる。

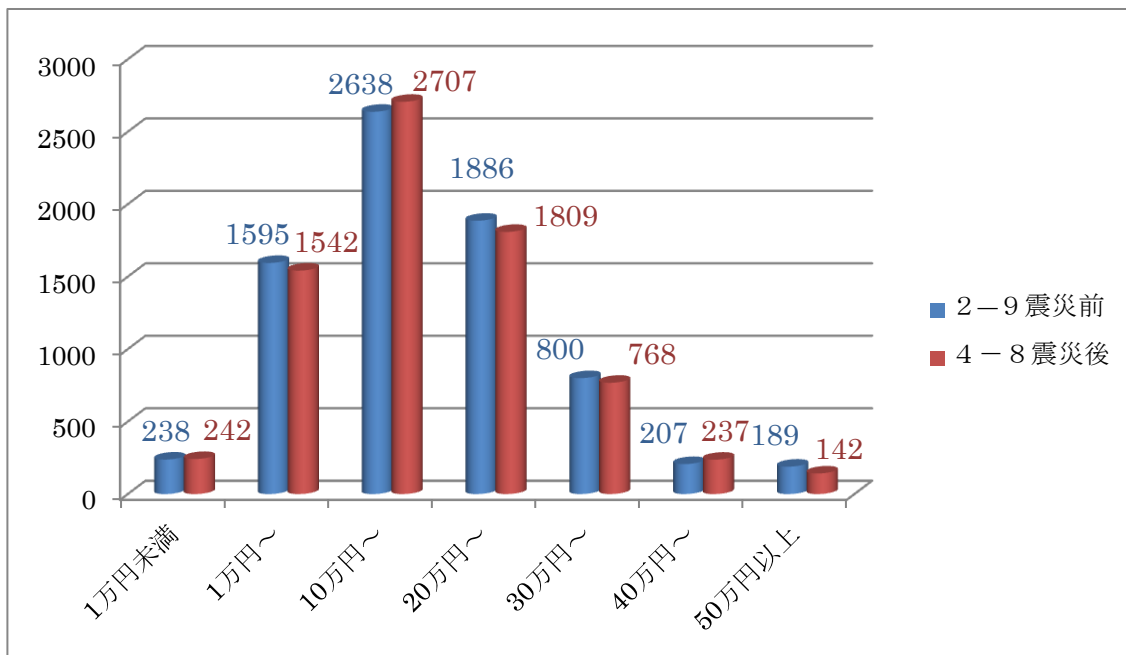
Ⅱ-5-1-1 震災前後の毎月の個人収入(棒グラフ)



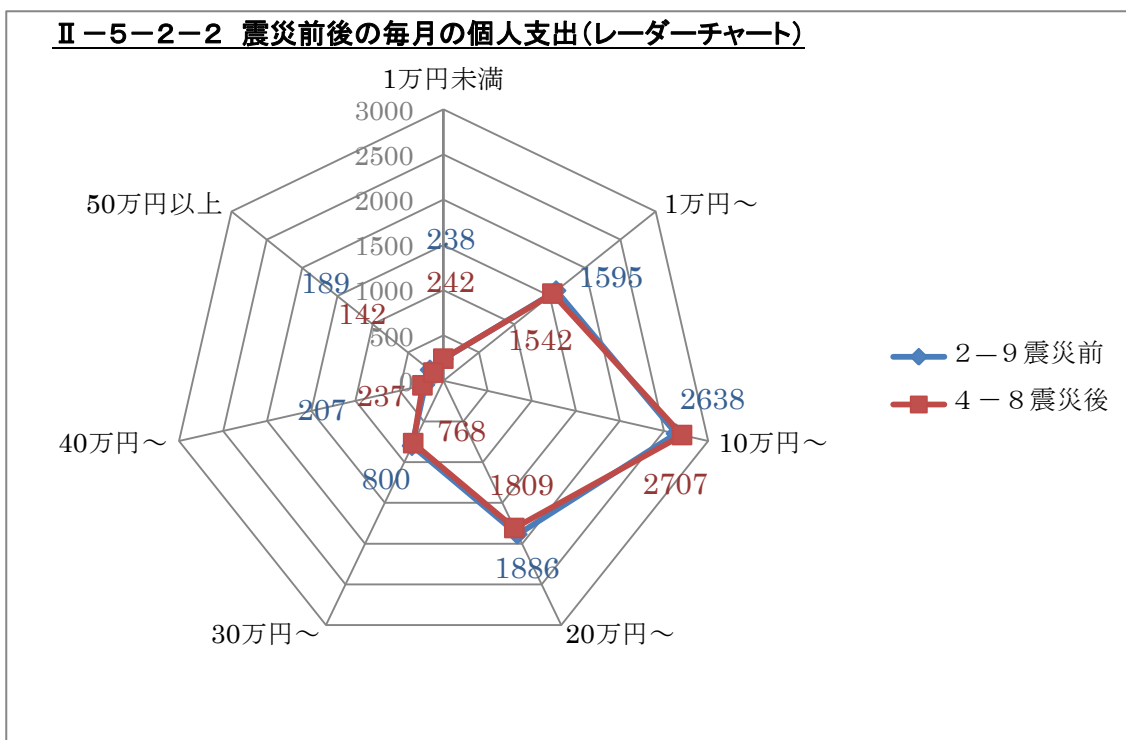
Ⅱ-5-1-2 震災前後の毎月の個人収入(レーダーチャート)



Ⅱ-5-2-1 震災前後の毎月の個人支出(棒グラフ)



Ⅱ-5-2-2 震災前後の毎月の個人支出(レーダーチャート)



なお、支出増の具体的項目については、以下のような声が上がっている（第2部I8「適正な賠償額について」の部分で紹介した声も併せて参照していただきたい。）。

<生活費の増加、増加の理由>

「二重生活のため、毎月の出費が多い。アパートの空きがなく、借上げにならないため、家賃、光熱費、交通費、食費とかかる。賠償金がなければ今の生活を続けていくことは困難。」(30代女性)

「震災前は、米野菜など自分で作っていたが、避難先は全部買うので大変。衣類を自宅から持ち出せず、買っており、タクシー代など金銭に困っている。」(70代以上女性)

「収入が避難前の3分の1に減ってしまったが、住宅ローンもあるため、日々生活していくのが大変です。賠償金は一時的金として入るが、住宅ローンはあと10年残っているので、賠償金をローンに使ってしまうと、これからの生活が苦しくなる。これからのことを考えるとどうしていいのか答えが出ない(頭痛薬が必需品になった)。福島といわきの二重生活、主人は県外出張と家族3人ばらばらの生活で、こんな生活していいのか?と不安がある。生活費もかかり、いつまでこんな生活が続くのか心労が耐えない。正直、このアンケートを書いてても悔しさがこみ上げてきて、なんでこんな生活をしなければならないのか涙が出来ます!!」(50代女性)

「現実に適応しようと子どもの手前、頑張ることが苦痛。家族との別離。連絡がとれず、無事なのか心配だった日々があった。小学生、高校生の子供が避難先で就学先を探し、通学させたものの、学校へ行けなくなった日々の苦痛。環境の変化から、登校を嫌がった時期もあった。夫に会いに行くため、親子共々の長距離を移動した。その心身両面の疲労と交通費の増大に悩む。福島県で夫が仕事をしているため、家族別離による多重生活により、生活費が増大し、家計が苦しい。自然と共に暮らしていた生活がなくなった。天然水の利用、四季折々の食材等。」(40代女性)

「自宅を離れ、兄弟と意見の食い違いで仲が悪くなり、親には心配をかけ、子どもたちは故郷をなくし、私達は帰るところもなくし、親の墓参りもできず、これからの生活を考えると先が真っ暗。夜も眠れない。今までに生き甲斐としていた仕事、畑、花、カラオケ、友達、何もかも失った。多すぎる。今の生活は、全てがお金のかかる生活。水、野菜、お金を出して食べる生活。」(60代女性)

「家族の離散、家族がバラバラ。生活費(アパート、光熱費、家具、その他)も3倍になり大変。」(40代女性)

「県外に避難しており、浪江町から遠いため、なかなか帰宅することができない。家族がバラバラで4重生活なので色々支出が多く大変である。」

子供達と遠く離れているため、なかなか会えない。子供達が問題に直面した時、一緒に付いていてあげられない。知人、隣組、親戚がバラバラなので不幸、祝い事等があった時に行くのが大変である。」(50代女性)

「避難前は家族10人で生活していたのに、今は、私たちの家族5人で暮らすようになり、父母、祖父母は別棟で生活していて二重生活状態。今までは、1つずつで済んでいたものが現在では2つ、3つと必要で、電気、ガス、灯油などの代金も今までの倍以上も支払わなければならない。」(30代女性)

「毎日孫と一緒に生活していたのに、会うことができないこと。通院などタクシーを使うことで金がかかる。野菜など作りたいが作れない。浪江では買うことはなかった。」(70代以上男性)

「私は災害が起きる4年前に身体障害者になって人の手を借りないと生活できない体です。災害前はサービスセンターでお世話になっていたのですが、避難生活になって以降、仮設住宅は狭く、車いすの生活ができず、老人ホームを利用するほかないため、費用も二重になっている。」(70代以上女性)

「現在の住居に決まるまで子供たちの学校が1ヶ月ごと3回転校したため、子供たちへの負担は大きかったと思う。主人は震災前に骨髄移植をしており、月に1、2回新潟から福島医大に通わなければならないため、子供達に学校を休ませて連れて行く必要がありますが、毎月のガソリン代、移動距離だけでも負担が大きく、この先不安です。」(40代女性)

「避難生活当初はみんなよくしてくれたが、1週間、2週間と経つにつれて、まだ先が見えないにも拘わらず「早く自立したらどうだ」、「甘えてばかりいるな」等言われた。」

現在の避難先は、避難者が多く、賠償をもらっていることを知っているため、「金があるんだから税金を市に払え」、「治安が悪くなった」、「早く帰れ」等、心無いことを言われ、肩身が狭い。借上げ住宅に住んでいたころは、大家が足元を見て家賃を上げてきたり、退去の際に皮肉を言われたりした。生活費は、これまでは野菜や米を自分で賄っていたが、今では全て買うことになった。プロパンガスも高く、支払額が増加した。東電の対応にイライラさせられる日々。」(20代女性)

「お葬式などが多く、どこに行くにもガソリン代がかかるし、知り合いも遠くにいるため、いつまでこの生活が続くのか不安だらけ。」(60代女性)

「長女の専門学校進学や長男の中学はどうなるのか、部活の友人達との関係はどうなるのか等、子供達の精神的苦痛は大きかった。会社の移転

に伴い、家族とはバラバラになってしまい、家族が3カ所に分かれ生活せざるを得なくなった。家計は赤字。」(50代男性)

「先が見通せず、仕事にも就くことができない。三重生活のため、経済的にとても負担が大きく、大幅な赤字です。」(40代女性)

「子供の送迎により、ガソリン代が大幅に増加した。」(30代男性)

「今でも避難先から福島県内に仕事で通っているが、交通費(JRだと、片道5時間1万5,000円、車だと、片道6時間、ガソリン代1万円)がとても多くかかっている。福島県内でも定まった場所での仕事ではないので(サービス業)、ホテルを転々としている(一泊7000円くらい)、金銭的(1週間でガソリン・JR代・ホテル代で、90000円近くになってしまう。)何よりも、故郷を失った気持ちは、言葉にできない。生活を全部一からやり直すのはとても大変である。」(40代男性)

「生活費が1.5倍。」(50代男性)

「今、買い物をする度、私の浪江にある自宅にあるもので、まな板とか鍋とか、こんなものをなぜ買わなくてはならないのだろうと、むなしさ、やるせなさを感じる。楽しかったはずの買い物すら苦痛になる。しかも、100円均一で安いものを買わなければならないという、自分の好みでは決められなく、気力がなくなる。」(50代女性)

「家族の生活は、二重三重となり、生活費がかさみ、ローンも残っているため、これから先を考えると、心が折れそう。」(50代男性)

「家に帰れない寂しさ。家族や妻と離れて避難生活で辛かった。(精神的にも。)友人たちとも離れてしまい、同級会もなくなってしまい、疎遠がちなってしまった孤独感。借上住宅が決まるまでの間、親せき宅や会社の同僚のお宅にお世話になったりと、生活スタイルの変化とストレスで眠れない日々が続いた。生きた心地がしなかった。今もなお、浪江にある実家には住むことができない。誰も住んでいない我が家はどんどん荒れ果て、虫の死骸やカビがひどいため、帰宅できても、とても住める状態にはない。これから先、どこに家を構えたらよいか不安ばかりが募る。誰も住んでいないにも拘わらず、住宅ローンは残っており、今も払い続けている苦痛と負担は大きい。借入住宅に住んでいるが、家賃は9万円。3万円は実費で先に支払っており、以前よりも支出が増加しているのは明確。経済的な負担がのしかかり、生活が圧迫されている。」(20代男性)

「震災前は職場が富岡町であった。母親が富岡町に一人で住んでおり、毎日のように安否の確認をしていたが、現在は県外へ(母親)避難しており、安否確認に行くのも苦労である。東電に対して、家族間の移動費用

を請求したが否認されている。ガソリン代も嵩んでるため、金銭的にも苦勞している。高齢になってきているので心配である。」(40代男性)

「避難場所を4か所移動したことは、とても苦痛であった。体育館では眠れなかった。自宅に帰宅しても部屋の中が動物に荒らされ臭くがひどかったて清掃もできない。物も持っては来れなかった。避難して3か月後に脱毛になり、時々悩むと脱毛になる。少しでも出かけるとお金がかかるため、家にこもるようになった。仮設での生活。部屋が狭く、家族一緒に住めない。隣近所の音が気になる、うるさい。すぐ目が覚める。人間関係が複雑。挨拶しても返されない。外に出かけるにも、じろじろ見られる。出かけづらい。家のローンが多額であるにも拘わらず、3重生活はつらい。今は3か所に分かれて生活しているため、金銭的に負担が大きい。」(40代女性)

「家族が離れて暮らすつらさ。(主人が)鬱病と言われ、それからが大変。それを支える人のつらさを知って欲しい。先のない生活はつらい。生活費も二重になります。」(70代以上女性)

「家族が離れて生活するようになりました。家族の中で病気しなかった人が病気をしています。家族が家族としての生活ができなく、苦痛となり、言葉のない生活となっています。今までお金がかからなかったものにまでお金がかかるので、生活費がかさみ、働きたくても働くところもなし。避難生活に入り、おいしい食べ物をおいしいと、楽しいことが楽しいと感じたことは今現在も感じたことはありません。」(50代女性)

「現在、家族や友人が離ればなれになっており、すぐには会える状況にない。友人とはそれぞれの間接点の場所で会うことが多く、その際は必ず宿泊する。以前は、そのような余計な出費はなかった。」(30代男性)

いずれにせよ、収入の減少傾向の中で、支出に大きな変化がないことは、一般的な生活水準の悪化、そして低収入層における厳しい生活環境の存在を伺わせるし、自由記載欄をあわせて読めば、生活は著しい経済的困難に直面していることが十分に伺える。

以下では、このような各データ（基本変数）及び生の声（アンケート自由記載欄）を参考にしながら、さらにクロス分析をしていきたい。

Ⅲ 変数合成・クロス集計による分析

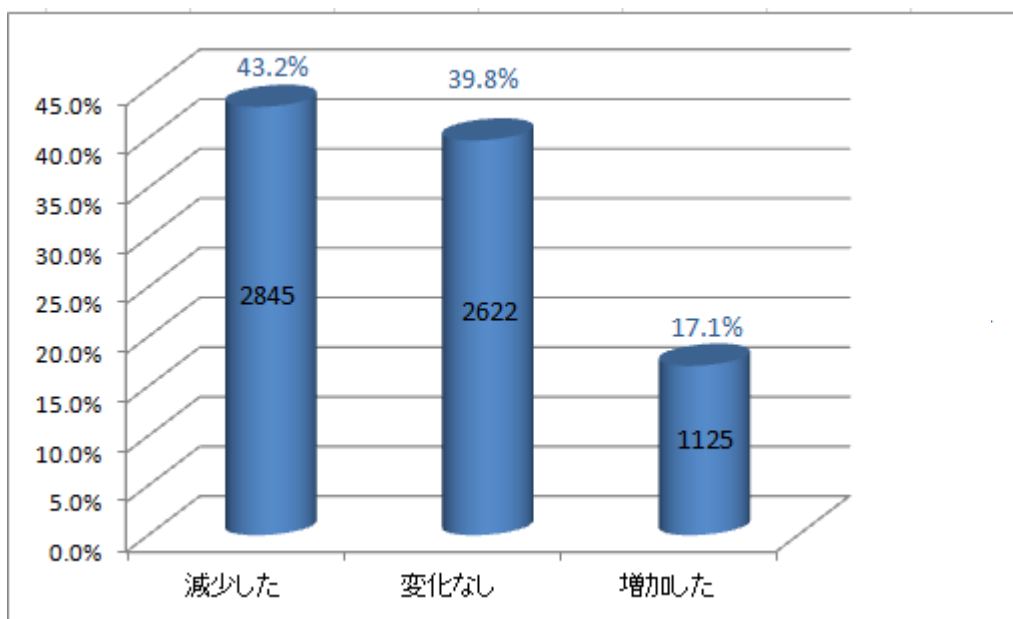
以下では、ここまで見てきた基本変数をもとに、新たに変数を合成した結果、およびそれら変数間の相関関係を把握するためのクロス集計の結果を基盤に、浪江町住民の被害の実態をより、詳細に検討してみることにしよう。なお、相関係数等は未だ算出せず、さしあたり、クロス集計データといくつかのグラフのみを示しておく。

1 収支変容関連データ

(1) 個人収支の変化状況

まず被災後個人収入から被災前個人支出を引き、収入状況変化についての増減データを整理したものが下図である。

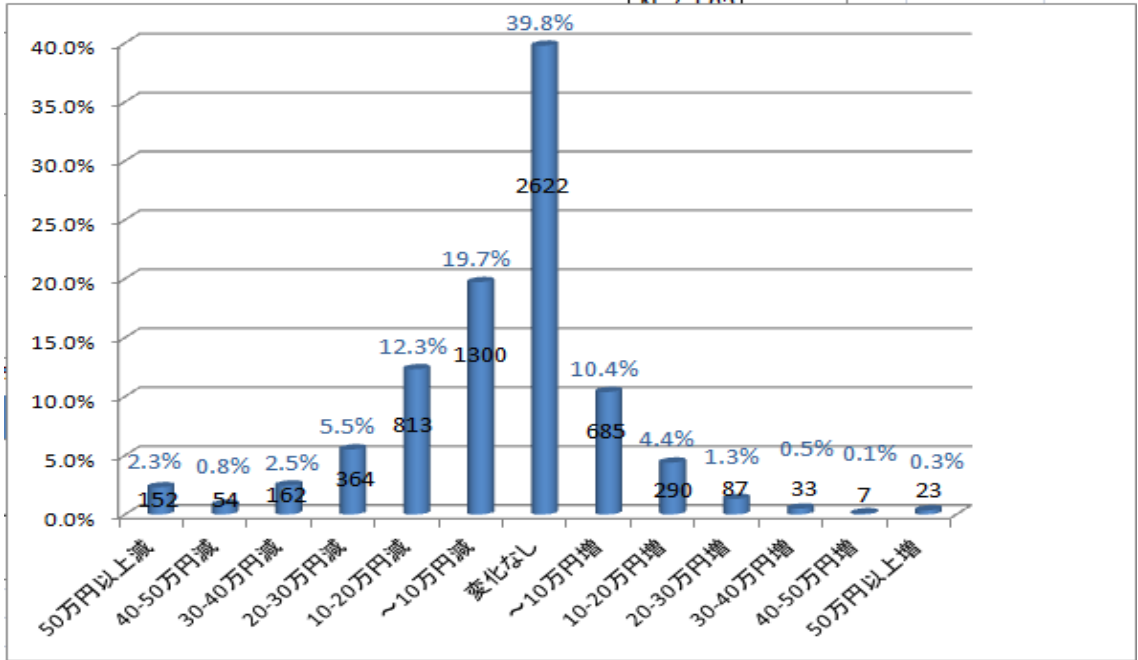
Ⅲ-1-1 個人月收入の変化(震災前/震災後)



これによれば、43.2%が、被災後、収入が減少している。また、増加した者が20%弱存在するが、世帯構成の変化等により、主婦や未成年層などで新たに収入の道を見いだした者は、当然に収入増に算入されるため、そうした者も含む数値と捉える必要がある。

さらに増減の程度について細かく区分し検証したものが、次の図である。

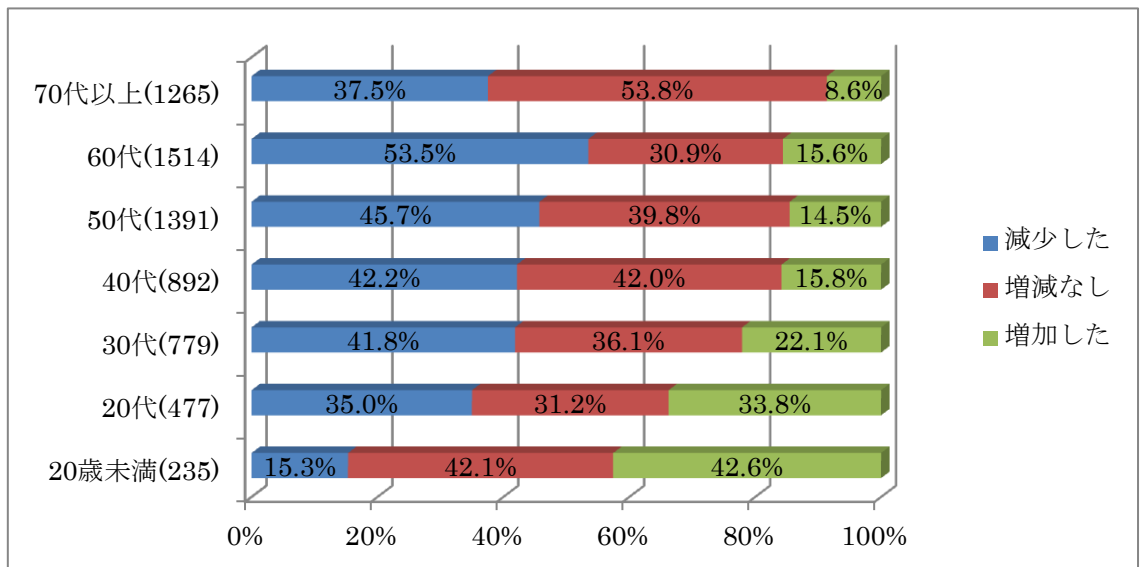
Ⅲ-1-2 個人月收入の変化(震災前/震災後) : 詳細区分



減少の割合は、グラフに表れたような分布であるが、50万以上減少している者が存在するなど、かなりの程度減少している者が多く存在することがうかがえる。50万以上の減少数は、割合では2.3%であるが、絶対数では152名に上っている。

また、年齢層別に収入の変化を検証したのが次の図である。

Ⅲ-1-3 個人月收入の変化 (震災前/震災後) : 年齢別

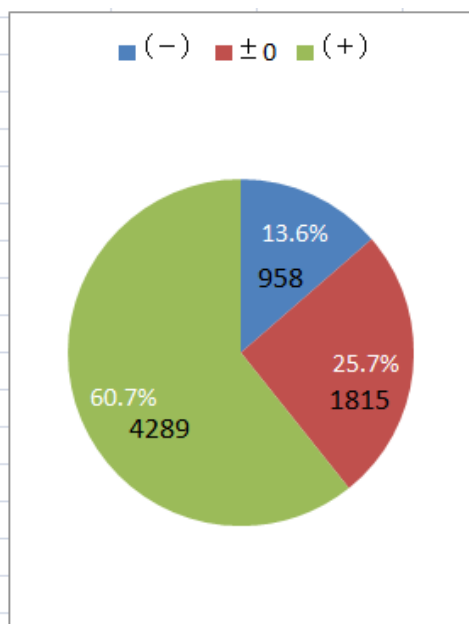


大まかに見て、年齢層が高くなるに連れて、収入減少の割合が大きくなっている。ただし、70歳以上については高齢故に個人収入は震災前からそもそも限定されていたことが考えられ、減少の割合は60代よりは低くなっているのは当然といえる。また、20歳未満で増加層が多くなっているのは、先に指摘したように、世帯構成変化により新たにアルバイトや就職することを余儀なくされた層が存在することを示唆している。

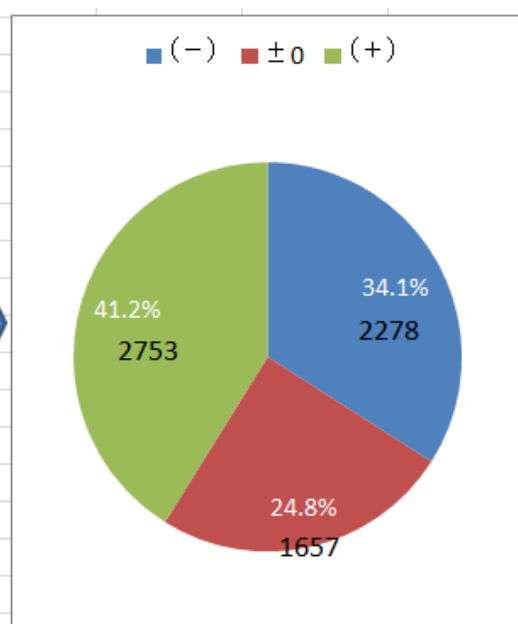
(2) 個人収支の変化状況

次に、収入変化だけでなく、支出との関連も含め、震災前後で個人の収支がどのように変化しているかを検討したものが下図である。

Ⅲ-1-4-1 個人収支 <震災前>

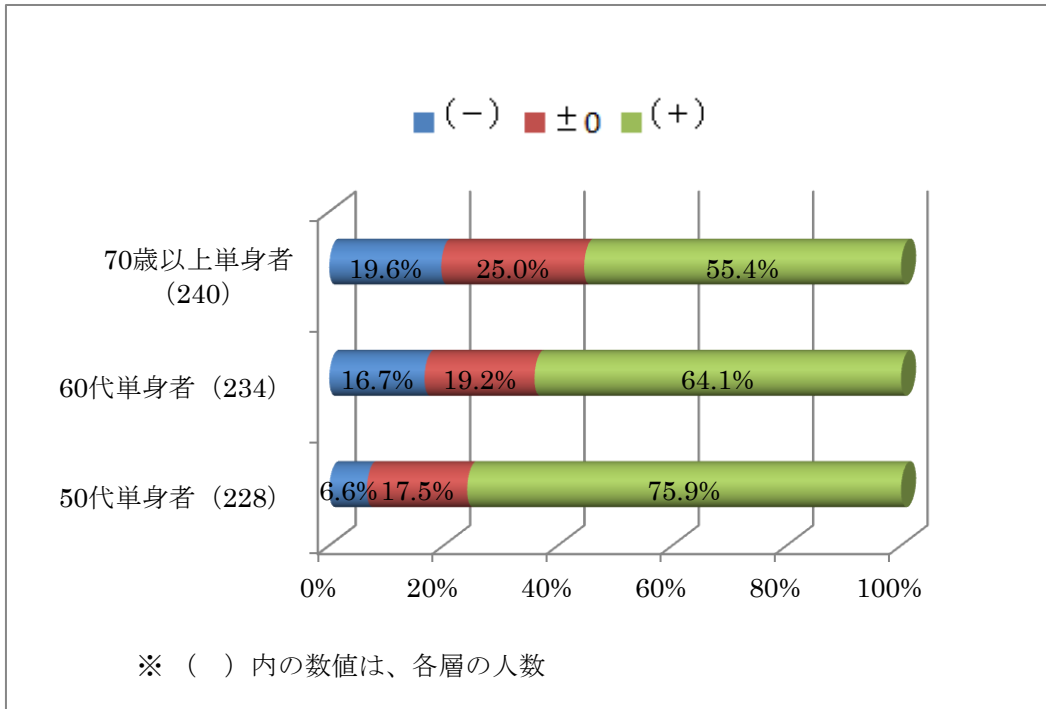


Ⅲ-1-4-2 個人収支 <現在>

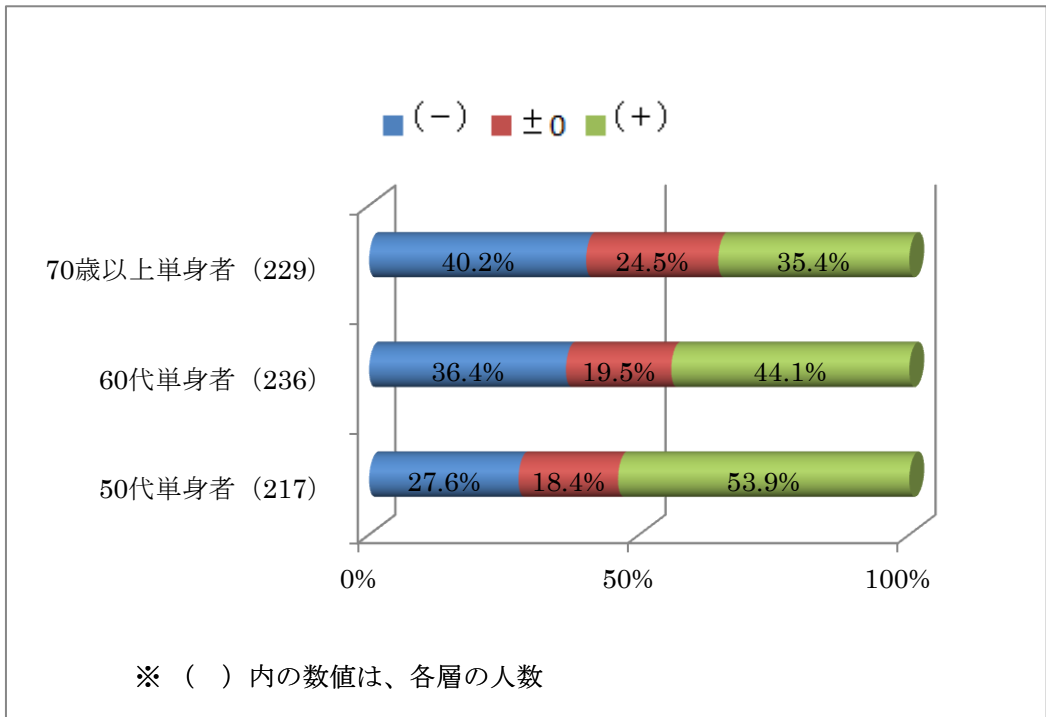


個人単位では、震災前の黒字収支は60%、赤字収支は13.6%にとどまっていたが、震災後は、黒字が41.2%に減少し、赤字は34.1%に上っている。収入減少の影響が大きかった50~70代で、かつ、家族の収入に依存できない単身者の収支を抽出してみたのが次の図である。上が震災前の収支、下が震災後の収支である。

Ⅲ-1-5-1 個人収支 <震災前> :50~70代の単身者ベース



Ⅲ-1-5-2 個人収支 <現在> :50~70代の単身者ベース



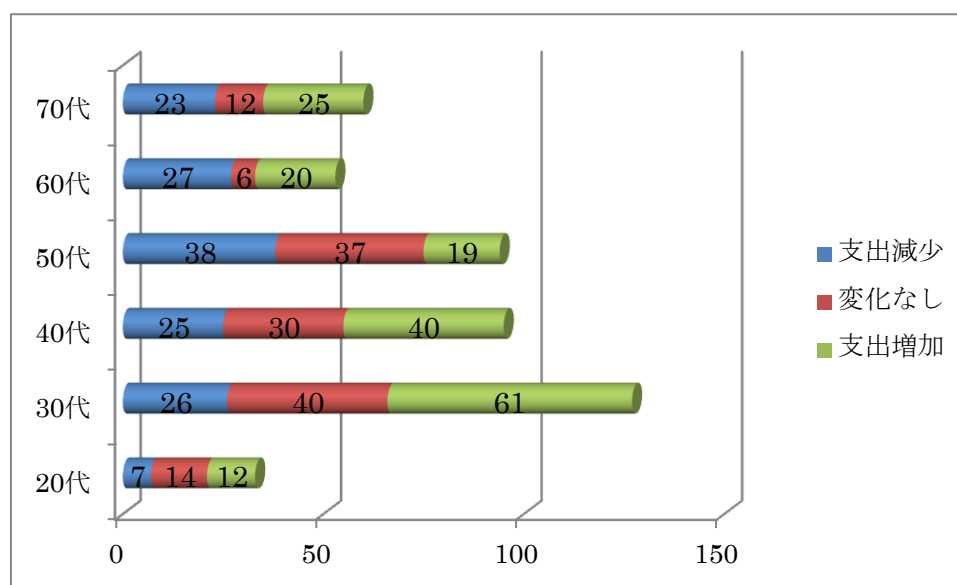
これを見ると、50代~70代のどの世代の単身者においても、収支赤字（青色バー）が大きく増えており、困窮状況にあることがうかがえる。

また、震災前後の世帯支出の変化に関して、震災前は世帯主ではなかったが、震災後に世帯主とならざるを得なかった層で、支出の変化を確認したのが、下図である。

これによれば、30代ないし40代で震災を機に世帯分離した世代などの若い層では、支出増の傾向が強く、50代以上では支出が減少しているか、拮抗していることがうかがえる。

なお、家計の困難についての生の声は先に紹介したとおりであり（第2部Ⅱ5「個人収入・個人支出の変化」等参照）、支出が減少している家庭でも、家族の分断等により収入が年金のみになったなどによって、分断後の家計はむしろ困窮化している世帯も多数あると考えられる点については留意が必要である。この点、支出が減少しているとの回答割合が比較的多かった60代、70代単身世帯について、こうした高齢層世帯の収支が悪化していることについては、先のクロス集計（グラフⅢ-1-5-1、Ⅲ-1-5-1）でも裏付けられたとおりである。

Ⅲ-1-6 震災前非世帯主で震災後世帯主である者の支出変化



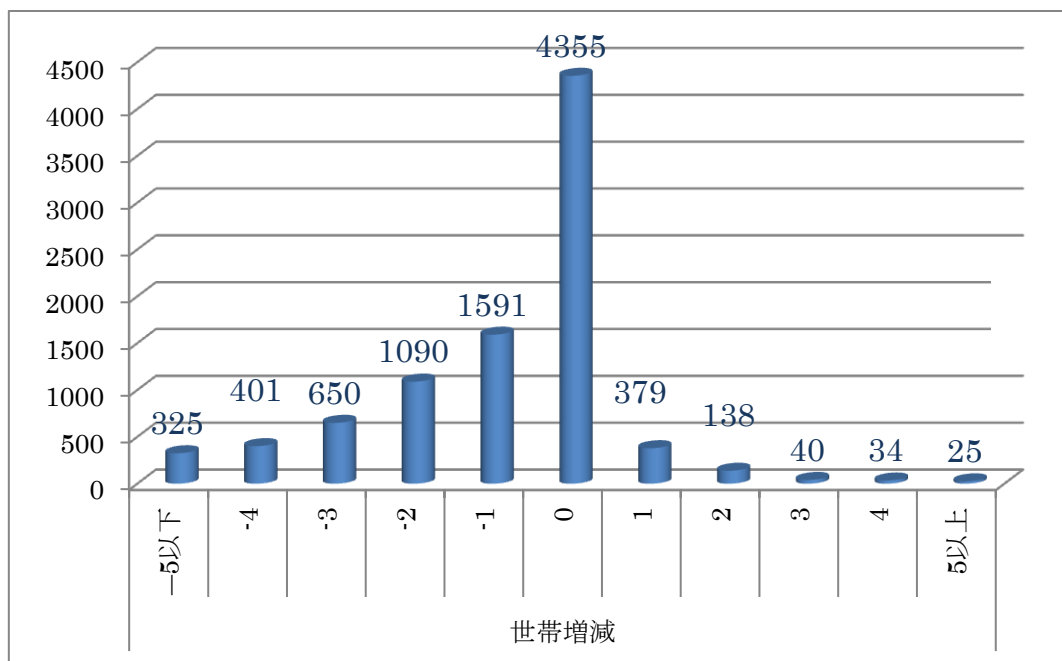
2 世帯構成の変化関連

(1) 世帯構成の変化

次に世帯構成の変化についてみる。まず、被災前後の世帯人数の変化一般については次の図のようになっている。

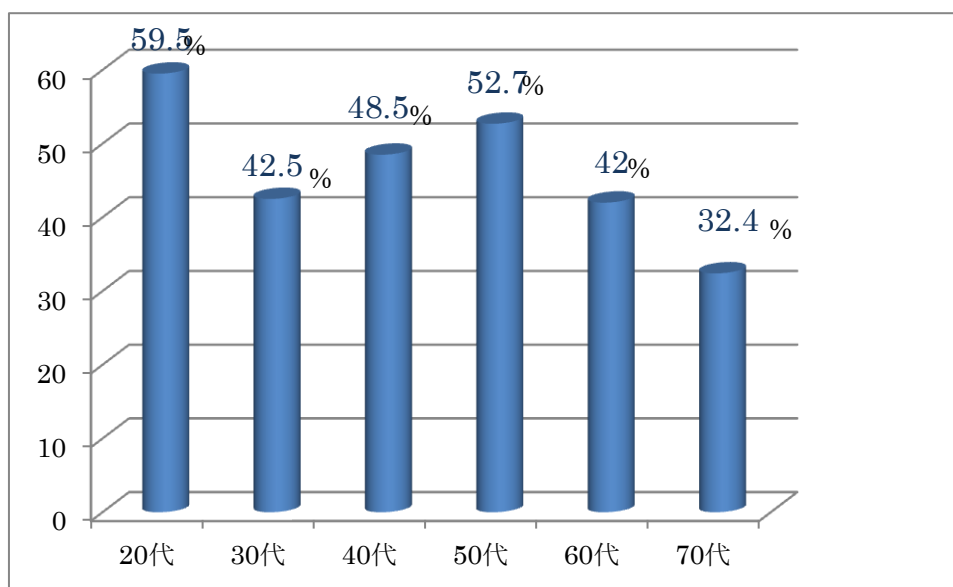
これは、家族の分離に関してこれまで出てきている自由記載欄記述、また町の統計とも一致する傾向である。

Ⅲ-2-1 世帯人数の増減



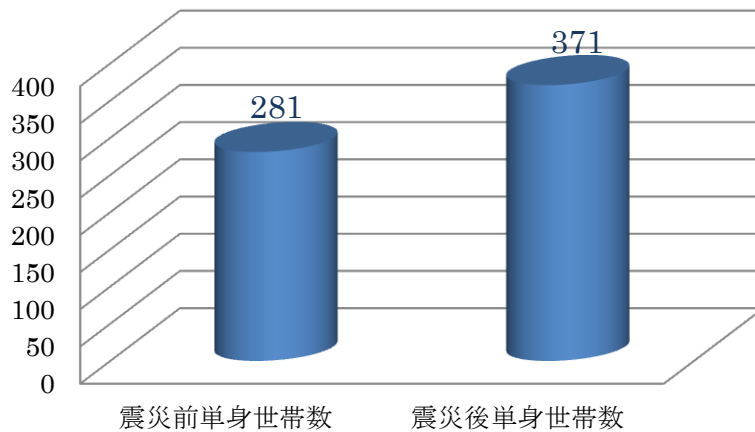
また、年代別の世帯人数の減少割合を示したものが、下図である。

Ⅲ-2-2 世帯人数の減少割合：年代別

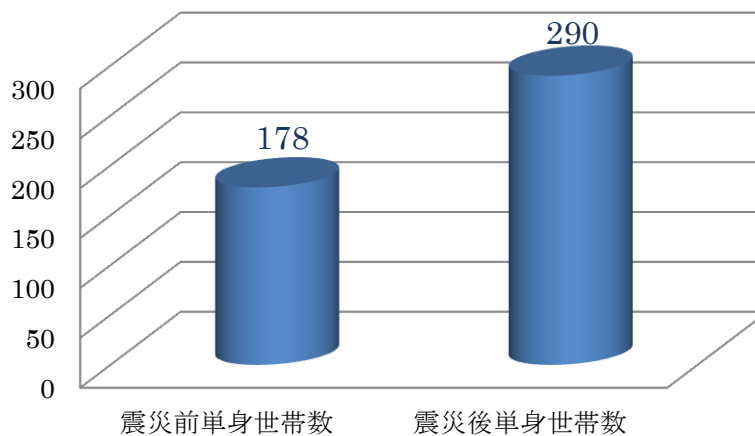


また、高齢層単身世帯は、より生活に困窮する度合いが高いと思われるが、この高齢単身生活者の増減については、70代の単身世帯は、被災前後で281名から371名に増加、60代では、178名から290名に増加している。

Ⅲ-2-3 震災前後の単身世帯数:70代



Ⅲ-2-4 震災前後の単身世帯数:60代



このように、高齢者単身世帯が増加したことや、単身の高齢者が心細く不便な生活実態は、以下のように、自由記載欄にも現れている。

「原発避難から何も持たず金もなく息子と一緒に避難したが、住むところ、また、通院先の主治医、服薬中の薬の手配、再発、身体的理由などから、集団避難ができず、仕事住居への不安がずっと付きまとった。3月末には仕事に戻るよう言われ、家がない人は避難所から通勤するように言われたが、再発を恐れ親戚の家に泊めてもらい、車がないので軽トラを借りて通勤したところ、皆から笑われてしまった。それもつかの間、親戚の家から出ていくように言われ、狭い1LDKのアパートを見つけ、隣の住人が朝の5時から夜の23時まで扉の開閉の音や騒ぎ声が響き、

眠っていてもうるさく目を覚ます毎日だった。

今まで娘の孫も里帰りをして家族でにぎやかに孫の世話一切をやって楽しんでいたのに、自分一人になってしまった。息子も次女も放射能の不安からそれぞれ遠く離れた所へ就職してしまい、私の老後の子供と孫との幸せな生活がまったくなくなり、持病とどう向き合って生きていけばいいのかわからない。絶対に許せない。」（50代女性）

「自宅の時は、部屋が8室でアパート生活は初めてで、部屋の一角には、妻の骨の仏さんと枕元での生活。成仏もできず、78歳の一人暮らし。残念でならない。」（70代男性）

「知らない土地での生活。」

家族とちりぢりになって一人で生活していること、孫の顔を浪江にいたときみたいにみれない。家族の仲も、前と違い仲が薄れているように感じる。

仙台では知り合いが一人もおらず、さびしい。」（50代男性）

「病院が遠い。外で飼育していた犬を室内で飼っている。そのため、朝、昼、夜の散歩を必ずしなければならないこと。部屋探しが大変だった。一人暮らしになったことで会話をしないことがさみしい。孫たちとも会うことがなくなった。」（60代女性）

「妻が介護生活に入った。入院施設から断られたことは全く困惑した。家に帰っても一人では生きられない。

最初は浪江から来た人には、家は貸さないとわれ、断られた。2、3日ぼっとして何もする気になれない。気を取り直し、役場にまた書類をとりに行き、一人町を家さがしに歩いたことは忘れられない。」（70代男性）

「家族がバラバラになってしまい、生きる勇気が湧いてこない。一人での生活で病気しても見てくれる家族がいない。

一部屋での生活が苦しい。風呂が小さい為、毎日他の風呂に通っていて、震災前の自分の家の大きな風呂が恋しい。」（60代女性）

「震災時に入院していた夫の病状が悪化し、6月に死亡。そのため、一人になり不安が多く、気持ちが安定しなかった。

仮設住宅はとても狭く、落ち着けない息苦しさがあった。

いつ帰れるか、家は大丈夫かと心配ごとが多い。また、これまでしてた畑作りや花の手入れができず、ストレスになった。

避難生活による環境の変化・ストレスに等により、2011秋ころから、心のバランスが取れず、その後認知症を発症。現在リハビリ中。(家族代筆)」（70代女性）

「両親（父90歳、母85歳）と私達と実姉5人で借上げ住宅で暮らすはずでしたが、両親が会津の病院に入院し、避難所が閉鎖され、一人住み替え会津に今も住んでいます。」

病院の近くには、仮設住宅があり、大熊住人ではないと入れませんでした。大熊にも浪江にもお願いしましたが、無理ということで一人借上げ住宅となりましたが、誰も知る人がいなく、また、父の介護も虚しく亡くなりました。アパートなので、大好きな草花も植木も諦めました。普通の暮らしが思い出せません。」

「今年、会津は雪が多く、雪に慣れない生活に浜通りが懐かしいです。雪のため、車が潰れてしまいました。人生初めてです。雪の片づけ方がわからないのです。」（50代女性）

「福島は寒くて大変です。昼間はなんとか良いですけど夜になると一人なので寂しいです。人間関係。孫達といっしょに生活したいです。車はあるけど道路がわからないので行けないです。」（70代以上女性）

「知り合いがない中での一人暮らし。親戚づきあいがしづらくなり、墓参りの時期には先祖にすまないと思う。」（60代男性）

「今現在、子供達ともバラバラに住んでいる。昨年1月に夫を亡くし、9月に母を亡くした。私自身も自転車で転び手術をし、3か月ほど入院したが、それでも全部対処しなければならなかった。そんな中でも誰一人浪江の役所の方は来てくれなかった。」

今は一人で郡山に住んでいるが、家に一時帰宅すると、家はねずみのふん、あらゆる動物が入っていてメチャメチャになっている。2回も崩れているので、家には帰れない。外からはあまりわからないが、家の中は大変なものだ。」（60代女性）

「3月11日の事故でより家族6人で苧野、津島と避難し津島も危険と
思い、12日の夕方川俣に避難し、その日から川俣の公園での車での寝
泊り。雪は降り寒く、ガソリンは少なくエンジンもかける事が出来ず、
浪江町民がどこに避難しているかわからず、ようやく3月16日に川俣
高等学校の体育館に入る事ができるようになり、又孫の学校が始まると、
又避難場所が変わり、今度は家族6人で住める広い借上住宅も仮設住宅
もなく、8月4日に自分一人で本宮の四畳半と台所の狭い仮設住宅で息
子、嫁や孫達と別々の生活が始まり、今まで嫁のつくった食事を食べ、
今は慣れない台所でのおかず作り。でも、今はコンビニ弁当やカップラ
ーメンの毎日。」（60代男性）

「避難中に夫を亡くし、すべて夫がやっていたので、一人暮らしは初めてで、将来的に不安は消えることはない。精神的にも肉体的にも大変で

した。」(70代以上女性)

「家族6人1部屋で生活していたときは、ストレスがたまり、泣くほど辛かった。家族の絆が、ほどけてしまうような気がした。

また、ずっと連れて来ていた猫をアパートのため何度も捨てにいき、また探しに行ったり、今でも、我が家の猫を思い出すと、胸が苦しくなる。
今は仕事の都合で6畳一間のアパートに一人くらい。昔の大家族だった頃の思い出をこころに浮かべることが多くなった。」(50代女性)

「家族が離ればなれで今は一人暮らし。さいわい仕事はみつかりましたが、午前中だけの仕事で、仕事が終われば家では話す相手がなく、休みの日は一日中声を出すことがなく過ごしています。道ですれちがう人は多けれど、一言も話しをする事はありません。こんな人生で良いのだろうか、これが「淋しい」ということなのかしみじみ思うこのごろです。」(60代女性)

「私達は関西に避難、間もなく母(当時82才)は体調崩し、入院。言葉が互いに分からず、母は話しをあまりしなくなり、三度目の転院先にて亡くなりました。その間夫も体調がすぐれず、血圧が220以上もなり、救急病院にお世話になったりしました。母の病院もだんだん遠くなり、夫が具合悪い時は朝早々と電車になりました。

福島に戻り2人の生活と思っている矢先に通院から入院となり、今思うとその頃から徴候があったのでしょうか?今まで8人家族だったのに一人の生活なんて…治療見てるのも切なく辛くなりますが、頑張っております。良き治療をして頂き安心して居るものの、あとこれから先どの位一緒に生活が出来るのかと思うととても不安な毎日です。」(60代女性)

「避難先を何回も変えてばかりで、これから先のことがわからず、安心した暮らしが、落ち着いた住居がほしい。

家族がバラバラになり、一人っきりの暮らしになって体も弱く病院に通院もしていたので、このままでは、と不安になった。

離れた家族の所へ行ったり来たりも大変でした。

原発事故の避難者とわかると、最初の頃は差別もありました。」(60代女性)

「職場が遠い(60km)。特に冬場は、道路が凍結し危ない。

一人でいると、頭が変になる。今まで兄弟・友人・知人と話せていた。

自分で野菜等を作り食事をしていたが、今は出来合いのもので、体調がおかしくなる。」(60代男性)

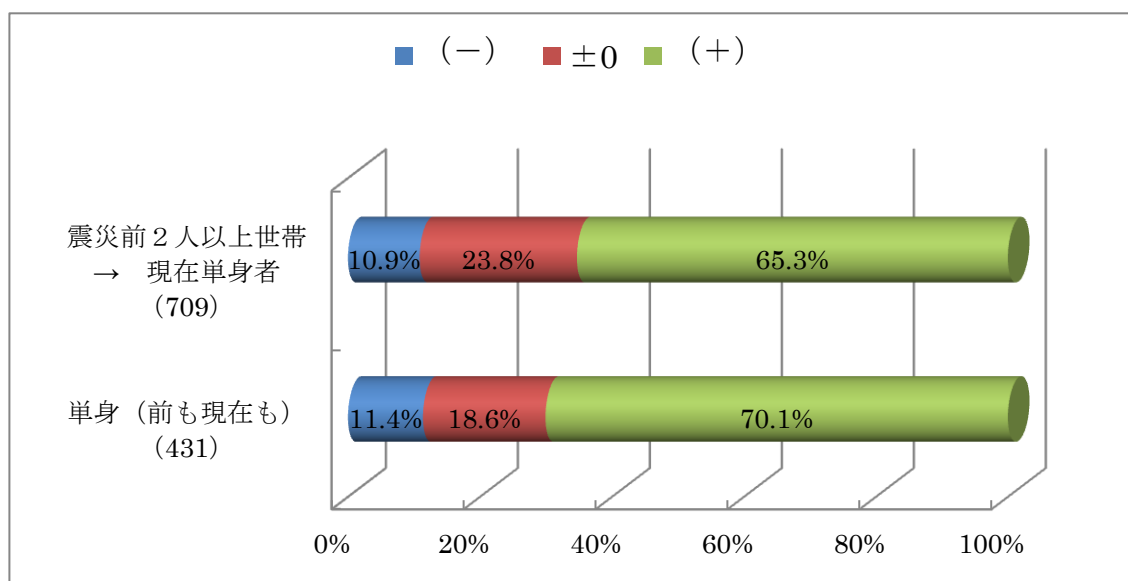
「長引くとは知らず借り上げ住宅に老人一人暮らし。知らない土地の寒暖差にストレス。突然救急なことあっても連絡することができません。」

家族別々次第に会話もなく前の生活には戻れません。」(70代以上女性)
 「仕事の関係上、父と母は別々の生活をし、父親はなれない一人暮らしをしている。慣れない一人暮らしの生活、一人でいることの孤独感等から大きなストレスを感じ、父はいくつかの病気を患ってしまった。一緒に暮らすことでストレス軽減ができればと思っているが、仕事等で現実には一緒に暮らすことは難しい。一緒に暮らしたいのに暮らせない葛藤や、このままでは父は衰弱して早死にしてしまうのではないかという心配や不安が大きい。何とか今の状況を改善したい。」(20代女性)

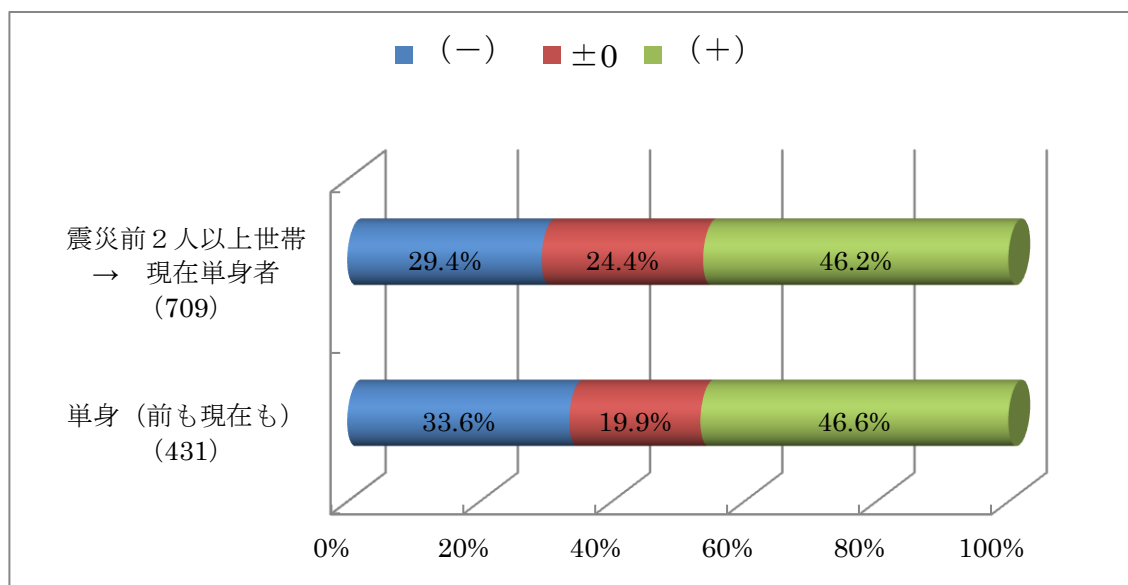
(2) 単身者世帯の収支

次に、高齢者に限らない世帯構成で、単身者世帯の収支に焦点を当ててみたのが次の図である。「震災前後を通じて単身である者」、「震災後単身世帯となった者」別に、震災前の収支状況を比べたグラフと、震災後の現在の収支状況を比べたグラフである。

Ⅲ-2-5-1 震災前の収支:元々単身者と新たな単身者別



Ⅲ-2-5-2 現在の収支:元々単身者と新たな単身者別



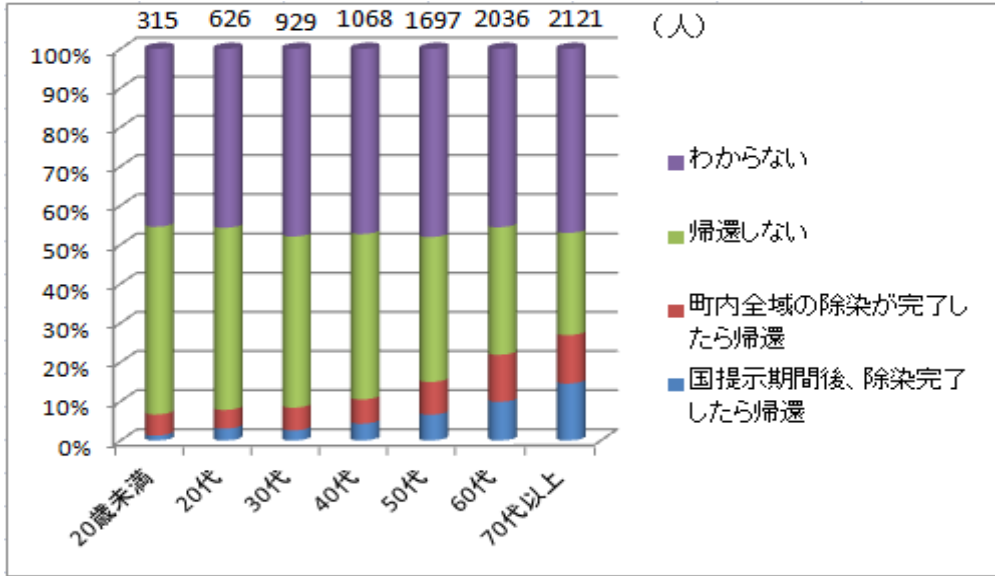
以上のデータからは、震災後に単身者として生活している者は、新たに単身者となった者も、もともと単身者であった者も、震災後に収支が大きく悪化している状況がわかる。

こうした結果には、高齢単身世帯の数が震災後に増加していること（グラフⅢ-2-3、Ⅲ-2-4）や、高齢単身者の収支が震災前後で悪化していること（グラフⅢ-1-5-1、Ⅲ-1-5-2）に照らせば、経済的に困窮状態に陥った高齢世帯の増加が、大きく影響しているといえるだろう。

3 帰還意思と適切な賠償額のクロス分析

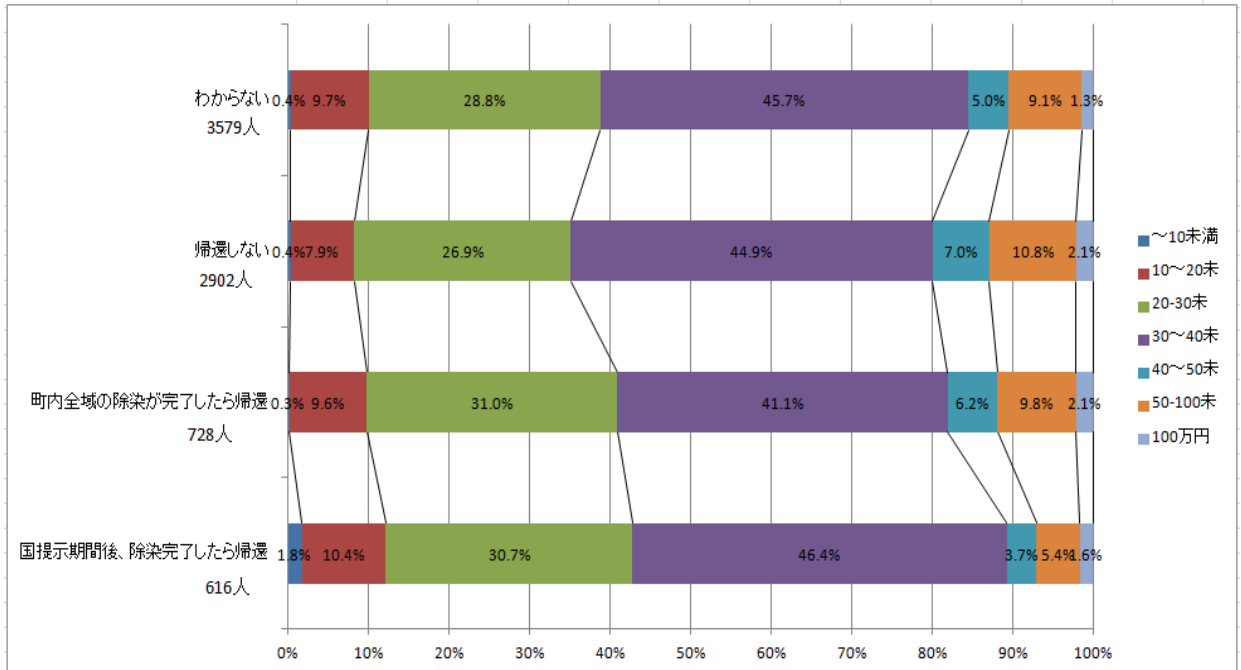
最後に、帰還意思について検討する。まず、年齢に応じた帰還意思の差異を検証したのが下図である。ここでは、明確に、若い層ほど帰還意思を持たない割合が高く、年齢層が高くなるほど、その逆になる傾向が見られる。ここから、①若い層については、子供の問題等から帰還を選択することが困難であることとともに、②高齢者層については、帰還もままならず、同時に新たな地域での生活再建もままならないことにより、強い困惑を感じていることを読み取ることができよう。このことは、先にあげた自由記載欄の声からも十分に裏付けることができる（第2部I7「帰還の意思」参照）。

Ⅲ-3-1 年齢と浪江町への帰還意向のクロス表



また帰還意思と適切な賠償額評価をクロスしたものが次の図である。ここでは帰還しないと回答した層が、より高い賠償額を求めており、コミュニティを奪われた怒りが現れていると同時に、帰還を希望する層も相応の賠償額を求めており、新たな土地での生活再建への具体的な財政的支援の必要も読み取ることが出来る。

Ⅲ-3-2 浪江町への帰還意向と適切な賠償額10万刻みのクロス表



IV 避難者に対するいじめ、偏見、いたずら等

なお、アンケート項目には入っていなかったが、自由記載欄には、避難者に対するいじめ、偏見、いたずら等についての記載が多数見られた。これも伝えるべき情報と思われるので、その声をここに引用し、紹介する。

これらの声は、被曝、賠償金その他様々な問題と密接に関連して発生しており、避難者がさまざまな偏見にさらされて堪え忍んで生活している実態が、ここからもわかる。

<いじめ、偏見、いたずら等>

「子供の転校が続いて、子供も精神的ストレスを受けているのだなと改めて思った時（家では、普通を装っているが、夜におねしょが続いたり、寝つきが悪くなったりなど…。）」（30代女性）

「避難のとき、何もわからず車で何か所も避難所を移動した。すごく寒い体育館、電気がない暗い体育館、段ボールを引いた上に毛布2枚。子供たちをと思い、脚を曲げながら交互に大人は寝ていました。ご飯も自分たちは食わず限られて配られた食べ物は全て子供たちに食べさせていました。その後、子供の学校のため、いわきの方に移り、2回転校しました。どちらの学校でもいじめがあり、前の地元の学校であればこんな思いさせないであげられたのと思うとかわいそうで子供が寝てから泣いていました。」（30代女性）

「住む所を追われ、今までの人生の思い出、人々との絆を断たれていること、一時帰宅のたびに見る我が家の荒れ放題の様子…全くそれらのことを無視した冷たい言葉、視線に、心がズタズタになっています。子供も学校（福島市内の中学校）で、何かという『（浪江）町から来た人は…』とされています。何でこんな思いをしなければならないのか。腹立たしい思いでいっぱいです。」（40代女性）

「子どもも学校が変わり、いじめにあった。片道8kmの道のりを3往復、環境に慣れず、寒い仮設で狭い部屋で過ごしているため、喘息持ちの子供が病院に行く回数が増えた。仮設の周りは、線量が高く、外で遊ぶことが心配で、1日15分程度しか遊べないし、山に囲まれ、夏にはまむしや蛇がでて、危険な所。除雪作業が大変。買い物も病院も遠く、山道の運転が負担である。」（40代女性）

「子供が福島から来たという事でいじめにあった。車のナンバーを見られただけで、指をさされたり、傷をつけられたりした。」（30代男性）

「いわきナンバーの車ということだけで車に傷をつけられるのですが…」
(40代男性)

「避難しているアパートの住民から、『福島人は新潟のことを知らないんだから余計なことはしないでよ』と言われる。避難当初は『大変だね！何かあったら助けるから！』などと言われていたが、現在は『お金をもらえるんだからいいじゃない。こっちで家を買うことができるくらいもらっているんでしょう』などといわれ、自由に買い物をすることもできない。お金で今ある普通の生活を売れるのか。納屋もなく、車も自転車も劣化が激しい。買えば『金持ちだね』といわれ、買わなきゃ『賠償で買えば？』と言われる。悔しい。先日、福島のお土産を渡したら受け取りを拒否された。まるで汚染された福島の土産など受け取れないとも言わんばかりである。日頃のお礼にもらったお土産を賞味期限切れで処分すれば『福島人は物を無駄にするのか』と陰口を言われる。何か悪いことしましたか？悔しい、悲しい。」(30代男性)

「子供が一番精神的につらい思いをしたいと思います。福島から来たということでクラスの子に『放射能』を浴びてると言われて帰ってきたこともありました。」

いわきナンバー、福島ナンバーだけで、車にキズをつけられたこともありました。他の県の人達から見れば、賠償金もらってるからいいじゃないと思われ、精神的につらい思いをしました。避難してからは、こちらは被害者なのに、ひっそりと目立たなく、あまり人と接しない様な生活。」
(30代女性)

「車のナンバーを見られてタバコの吸い殻を投げられたり、後ろからあおられたりするなどのつらい経験をした。」(30代男性)

「もう2年が経ち、何も変わっていない現状で本当に私達は段々苦痛が深まっていく中周りからは、冷たい視線(新聞等で賠償額が明示されているため)もらっているから働かなくてもいいだろう!!等耳に入るため精神的にも肩身の狭い思いも皆していると思う。」(50代女性)

「車がいわきナンバーと見るだけで変な目で見られます。車もいたずらされて困りました。」(50代男性)

「避難先での福島人への差別、避難先の学校でのいじめがすごいです。車へのキズ(いやがらせ)」(40代男性)

「子どもが転入先の学校になじめず悩んだ。」(40代女性)

「自分も子供も他県での避難生活に馴染めていない。福島からきたという偏見があるようだ。長男は学校でクラスの子と遊ぶことはないようだ。」

二男は転入した保育園に馴染むまでに1年以上かかった。」（30代女性）

「子供が転入先でいじめに遭い、けがもした。浪江から来たという、
「ばいきんまん」のような言葉の苦痛を受けた。」（40代女性）

「息子の入学式が可哀相だった。同級生には知っている人が誰もいなく、知らない土地での学校をとにかく嫌がり、無理に行かせてしまったこと。娘は、転校先に知っている人が誰もいなく、毎日が憂鬱でふさぎ込みがちで、学校でもいわれのない一言を同級生10人くらいにいわれ、学校で立てなくなるほど泣いていた。子供にとって、とっても苦痛だったと思う。」（30代女性）

「娘が精神的に不安定で、突然泣き出す。息子が小学校に行きたくない
と毎日泣いている。」（40代女性）

「子どもが環境が変わったせいで、学校へ行けなくなった。」（40代男性）

「千葉に避難していたとき、子どもが嫌がらせを受けた。自転車のパンク、放射能がうつるなどと言われた。東電からお金をもらっているから
いいわね、と言われた。」（40代女性）

「子供が学校になじめず、いじめにもあい、転校。私自身2度働いたが、東電からお金をもらっているのになぜ働くのかと問われ、鬱になった。もちろん職種は畑違いの仕事。苦痛以外の何物でもない。人が怖い。関わりたくない。」（40代女性）

「当時高校生であった子供が精神的に不安定になり、毎日、帰りたい、福島で友達と生活したいと泣かれた。子供が何事にもやる気を失っているように見える。」（50代男性）

「孫の学校でのいじめ、放射能がうつる、汚い、さわらな、浪江町での
学校であればこんなことはなかったであろう。思い出すと悔しくて情けない。」（50代女性）

「子供達（中学生）を連れて、学校を探して転校させるということは、私以上に子供達は知らない場所での生活にとまどい、悩む日々だと思います。子供の前では前を向いて生活するそぶり等、すべてにおいて言葉にならない苦痛なのです。」（40代女性）

「息子と孫の二世帯で暮らしていましたが、孫たちは新潟へ、息子は福島で単身アパート暮らし。孫たちはじいちゃんばあちゃんはどうしているのと心配していたようですが、一緒に大変な時期に過ごせなかったことのおかげがあります。また、孫が、新潟の小学校では教室の隅でい

つもポツンと一人でいたと後で聞いたら涙が止まりませんでした。」(60代女性)

「車にいたずらされた。ナンバープレートを曲げられた。自分でつけていない傷を付けられた。子供が友達の輪に溶け込めず、休み時間とか1人で居ると言ってしまった。」(30代女性)

「避難当時は同情していた人は今、現在、精神的損害の賠償額を、批判し始めた。口に出すようになった。まだまだ避難生活が続くのに、逆に、態度が変わってきたので、孤独になってしまいそうです。」(50代女性)

「私達何も悪いことしたわけでもないのに、あなた達はお金をもらって遊んで暮せていいな、働かなくとも、だまって、お金が入るからな、等と中傷をいわれる。」(70代以上女性)

「栃木県で避難してきたことを隠して生活している。福島県から来たとばれたら、差別されるのではないかという不安がある。今月、私の住むアパートの前で嫌がらせがありました。夜中に大きな声で『ここに住んでいる人は福島県から来てる！！義捐金もらっているんだろ！！義捐金よこせ！！』と言われました。」(20代女性)

「下の住人による、ポストや車へのいたずらがあり、今のところじゃないところに家をお借りできないかと聞いたら、無理ですと言われました。今もたまにですが、ポストにゴミが入っていたりしますが、我慢しています。その本人の前では、なるべく、にこやかにあいさつするようにして、嫌われないようにしています。なので、ストレスもたまります。その人の顔色をうかがっているようで嫌です。」(30代女性)

「借り上げのアパートに入ったが、ペットが居たため、入れる所が選択できなかったペットの声がうるさいと怒鳴られたため、毎日、ペットを預ける様になってしまった。」(30代女性)

「住居に関して、ペットがいることで住居を借りることが非常に困難であった。やっと借りることができても、ペットは1匹までとか制限が多く、借りる前に3匹いると申告していたにもかかわらず、入居して1ヶ月後くらいに『契約違反だ』『保健所へ連れて行け』など、非難され、悔しく、苦しかった。結局、住居を移ることになったが、また住居を探す苦痛、引っ越しの苦痛が多であった。今も、ペットのことで何か言われるのではいつもびくびくしている。持ち家だったので、ペットがいることでこんなにも世間から非難されるとは夢にも思わなかった。」(40代女性)

「福島県外に避難しているが、「いわき」ナンバーなので、車にいたずらされる。子どもが学校でいじめられる。」（30代男性）

「千葉に避難していたとき、子どもが嫌がらせを受けた。自転車のパンク、放射能がうつるなどと言われた。」（40代女性）

V 東電の賠償対応への不満

また、これもアンケート項目にはなく、上記に分類できなかつたが、自由記載欄には東電の賠償対応への苦情、不満も多数みられたので、その一部をここに挙げておく。こうした東電の対応は、原発事故による被害をさらに拡大させているものと思われる。

「東電へ賠償の TEL をすればどちらが被害者かわからない態度。毎回 TEL するのが苦痛。」（30代女性）

「難しい書類、曖昧な対応でこの事故のことを終わらせるな。毎回難しい書類ばかりでかなり苦痛。」（30代女性）

「東京電力原子力補償相談室の対応の悪さで、他人事のような対応が苦痛。」（30代男性）

「東電への請求書を書く苦痛。東電への電話対応の苦痛。東電が個別の事情で対応するといっておきながら、対応してくれない苦痛。」（40代男性）

「避難により、知人・友人・身内に簡単に会いに行くことができなく…。
（この生活が）いつまで続くのか？不安！！人生最大の精神的苦痛。原発に関する書類の記入が苦痛。」（50代女性）

「私も80歳にもうなるので、東電に出す書類なんか書くのも大変でした。何とも自分でやりましたけど、もう嫌になってしまいます。」（70代以上女性）

「被害者の我々が複雑で膨大な量の請求書類に頭を悩ませられ、それが正当なものなのかどうかなど一般人にはわからないし、不満な部分が多々あり、とにかく多方面からの書類が多過ぎる。」（50代男性）

「東京電力の賠償問題は難しくて苦痛である。」（70代以上女性）

「賠償請求の件で東電に電話し、様々な書類を提出しても確認がとれないとうやむやにされる。電話に出る人間が毎回違うので同じ話を何度もしなければならぬ。こちらは個人情報さらけ出しているのに賠償してもらえない。これらのやりとりに苦痛を感じる。」（40代女性）

「東電の賠償窓口へ問い合わせをしても「すみません、大変申し訳ありません。」などと質問に対しての親切な対応がされず、かえってストレスが増大し具合が悪くなる。家族が離れ離れで生活している為、以前よりはるかに口論が多くなった。高齢の両親の先のことを考えると不安が増す。私は被害にあつたにもかかわらず、国や政府、東電から見れば”やっかい者”になっているように感じる。」（40代女性）

「東電賠償請求に誠意なく交渉することが苦痛。(以下に例を記載します。)

・請求書に書いてある請求項目を支払ってもらえない。・浪江町は立地町村ではないから支払えないと遠回しに言われた。・娘が避難先の学校で放射線の被ばくのこと、いじめられて、避難先を変えたが、その分の交通費を請求したが、「そちらの都合で当社の責任ではないので支払えない。」と言われた。・請求するたびに言われた通りに書き直すが、難癖をつけて減額している。

東電から直接の謝罪の言葉が2年たっても一切ないのが不満。仕事で東電社員と仕事をすることがあるが、避難者と分かると含み笑いをされることが多く不快。東電社員の多くは事故は自分達のせいではないと思っているのが不快。」(50代男性)

「東電側に賠償のことについて避難直後の生活費はどこからでたとか、通帳のコピーを提出しろとかおかしい。ネットバンクだったので、わざわざ仙台まで取りに行ったこともありますし。若いから馬鹿にされて適当にタメ語で話されたこともあります。賠償金の請求をするのにもストレスを感じます。」(20代女性)

「賠償請求書を読んで書きこんだり、東電との賠償折衝で話をするだけで疲れてくる。なぜ、我々が東電の土俵(ルール)で相撲しなければならないのかを考えただけでストレスになる。東電は、賠償対応窓口は丁寧だが、中身(内容)がないし、賠償期間や基準がダブルスタンダードで余計に混乱を招き困る。賠償基準が実情に即していないし、詳細な部分でぶつかるため、2転3転しているので東電に振り回されている。新聞や報道では時効はないと言明しているが、弁護士に確認すると不明確な部分が多いし、胡散臭いという(もう少し真摯に発言し駆け引きしないでほしい。)」 「適正な賠償(公平・迅速)でないため、請求書に記入しようとするのが減入り落ち込んでしまう。」(50代男性)

「東京電力の相談窓口に行って、内容を説明し、大丈夫と言われて請求書を提出しても、東京本社ですべて一方的にカットされる。何の連絡も説明もないので、電話をすると、納得のいく返事をせず、威張っている、対応に腹が立って仕方がない。」(70代以上男性)

VI まとめ

冒頭にも述べたように本アンケート分析は、現段階で、おおまかな傾向の把握のために、基本的な度数分布の状況や、簡単な相関の検討を試み、まとめたものであって、さらに本格的な統計分析を行うには、データの大きさからも相当の時間が必要である。

とはいえ、ここからでも、被災前の浪江町のコミュニティの状況と、被災によって平穏な生活が奪われた町民の精神的苦痛の一端をみることができる。本アンケートの回答データの分析結果や自由記載欄の声には、町民の精神的苦痛が、「仮設住宅での生活」、「世帯の分離」、「収支の悪化」、「住環境の悪化」、「健康被害」、「高齢者の被害」、「子供の被害」等の様々な要素が相互に関連して影響を与えあって生み出されている実態が克明に表れている。

本報告書により明らかになった浪江町の住民、そして原発事故の被害者の方々の被害実態の深刻さを真摯に受け止め、適切な救済の方向が示されることを改めて求め、本アンケート分析報告のまとめとする。

最後に、本アンケート作成、集計にあたっては、富士通株式会社の東日本復興新生支援本部の方々より、ボランティア事業の一環として、多大なるお力添えをいただいた。本報告書の最後に添付した本アンケートの回答状況に関する単純集計表（有効回答数 9384 名）も、そうした活動の中でご作成いただいたものである。この集計作業がなければ、本調査は成り立たなかったものであり、この場を借りて、心より御礼申し上げたい。また、本報告書の作成に当たっては、早稲田大学大学院法務研究科修了生の須藤晴菜さんはじめ多くの修了生、在学生の皆さんの助力を得た。ここに謝意を表しておきたい。そしてなにより、苦しい生活環境の中で、こうしたアンケートに真摯に回答を寄せてくださった浪江町の住民の方々にも、心より御礼申し上げたい。

以上